
武士道・is・Dead

佐武 辰之佑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武士道・i s ・D e a d

【Nコード】

N 4 4 7 2 E

【作者名】

佐武 辰之佑

【あらすじ】

主人公のカエルは車の中で目を覚ます。隣にはコトカという女の子がいる。しかしカエルには全く記憶がない。コンピューターの中という不思議な世界でカエルは少しずつ記憶を取り戻し、自分自身を探してゆく。「井の中の蛙大海を知らず、されど蛙は天の高さを知っている」

「いいのよ、眠ってしまえば」

女がそう言うのが聞こえる。

「眠ればいいのよ。あなたの見ている闇が全部溶けてなくなってしまうまでね」

女が僕の脛にそっと手を触れるのを感じる。僕の見ている闇は白っぽく歪む。女の手からは不思議な安らぎが感じられる。女の手がゆっくりと僕の脛を撫でるとそれに合わせて僕の見ている闇にはさまざまな色が浮かび上がる。

「いいのよ、すべて忘れて眠ってしまえば。結局あなたはここに戻ってくるんだから」

耳を済ませてみても女がどこにいるのか正確な位置が掴めない。それは頭上から聞こえてくるような気がするし、あるいは下から聞こえてくるのかもしれない。

「一本の糸を辿ってくればいいの。あなたはきっとここへ帰ってくるはずよ」

その声は僕を落ち着かせてくれる。ふっくらとしたリズムを僕は感じる。そのまま僕は眠ってしまう。

気がつくとは僕は部屋の中で絨毯に横たわっている。部屋の窓からは明るい太陽の日差しが部屋の中を貫くようにして注がれている。光の帯の中で小さな埃が舞い上がってキラキラと光を反射させている。部屋の中には古ぼけたタンスや、テーブルが置かれて僕は色あせた赤色の絨毯に寝転んでいる。僕は胸に小さなロゴが入った真新しいティシャツを着て、短パンを履いている。随分汗を掻いたみたいで背中がぐっしょりと濡れているのがわかる。

起き上がって辺りの様子を窺ってみる。部屋の中は静まりかえって物音ひとつしない。少なくとも僕以外に誰かがいる気配は感じられない。ドアを開け、部屋の外を覗き込むようにして見回す。ドアを開けたときに発した音が場違いのように大きく耳に響いてくる。その音が家中に響き渡ったように思えるけど、その音を耳にした人は誰もいないようだ。家の中はまるで何かに蓋をされたように物音ひとつしない。ドアの向こうの階段を下りるとそこには玄関らしき扉が見える。大きさの違う女性用や男性用の幾つもの靴がつま先を合わせてきちんと並んでいる。僕は自分の足に合ったキャラクターターデザイン入りの小さな靴を履いて玄関の扉を開ける。

扉を開けた瞬間にもあつとした熱気が玄関に入ってきて、その向こうには新鮮な太陽に照らし出された明るい視界が広がっている。僕は玄関を出て、道路を歩き始める。人々はみんな僕よりも背が高

く、そして表情ひとつ変えないまま歩き去ってゆく。

しばらく歩いてゆくと公園が目に入る。公園はそれほど大きいものではないけど、ブランコや滑り台が置いてあって、公園を取り巻くようにして立っている木々が光を浴びてくつきりとした影を地面に投げかけている。その中心では僕と同じぐらいの背格好をした7、8人の男の子たちがサッカーをしている。まだ小学生の低学年あたりだろう。僕は公園の端っこの日陰の中にあるベンチに腰を下ろして男の子たちを眺める。暑い太陽は時間を止めようかとするように力強く辺りに照りつけ、生ぬるい風がときどき砂を巻き上げて男の子たちを襲う。でも男の子たちはそんなことに全く気がつかないみたい。ボールを必死に追いかけてまわっている。どうやらジャングルジムとその反対にある木の間をゴールに見立ててゲームをしているみたいだ。

一人だけ体の大きい男の子がいてその子が中心的にボールを扱っている。他の小さな男の子が反応できないぐらいに見事なフェイントをして、他の子がぶつかつてくると手で押し返してぐいぐいと前に進んでゆく。その体の大きな子がシュートをするとその子の半分ぐらいしか体の大きさのない痩せ細った男の子のふとももに勢いよくボールがぶつかる。ボールの当たった男の子はしゃがみ込んで泣き出してしまふ。

「バーカー。それぐらいちゃんを取れよな」と体の大きい子が言う。それから泣いている男の子のほうに近づいて行って足の脛あたりを軽くキックする。泣いている男の子はキックされた後に肩を大きく震わせてさらに激しく泣き出す。

体の大きな男の子はキョロキョロと辺りを見回して僕のところで視線を止める。Tシャツの裾で顔の汗を拭きながらその男の子は僕

のところへやってくる。よく見ると男の子の肘や膝のところには転んだときについたらしい砂がついている。一番濃く砂がついている左ひざの脇の辺りには血が滲んでいるみたいだ。

「おい、おまえもやらねえか？」と男の子が言う。

僕は首を振る。

「どこから来たんだ？」と男の子が言い、僕はまた首を振る。

「おまえ、喋れないのか？」

僕は黙っている。男の子はしばらく僕と見つめ合ったままだったけど、足元の石を拾って僕に投げつけるような振りをしてから仲間のところへ戻ってゆく。

しばらく男の子たちがサッカーをしているのを見てみるとだんだんと日が暮れてくる。空全体がゆっくりと燃え上がってゆくような暑い季節の夕暮れだ。だんだんとボールが闇の中で見えにくくなり、さつきまで濃い影を落としていた木々たちは気味の悪いダンスを風の中で踊り始める。

さつきの体の大きな男の子が僕のほうにやってきて「そろそろ帰ったほうがいいぞ」と言ってから公園の外に消えてゆく。それに気がついた仲間たちも一斉に公園の外に向かって駆け出し、最後に残された脛を蹴られて泣いていた子がボールを拾っていなくなると公園の中は一層闇が深くなったような気がする。

がらんとした公園の中にキイキイという音が響くのを耳にする。すでに暗くなつて見えにくいけど誰かがブランコをしているのがぼ

んやりと見える。小さな影はジャンプするようにブランコから飛び降りると僕のところへ近づいてくる。ブランコは揺れたままでその影が揺れるのに合わせて金属が擦りあうような音が規則的に繰り返されやがて小さくなってゆく。

「まだ帰らないの？」と女の子が言う。絵本に出てくるお姫様のようにフリルの着いたピンク色のワンピースを着ている。僕は首を振る。女の子は道路に設置された街頭の人口的な白い光の中に夢の一部のように立って僕を見ている。

「お家の人心配するんじゃないの？」

僕は首を振る。

女の子は僕のところさらに近寄ってきて暗がりでも顔が見えるくらいの位置にまでくる。僕は何かを考えようとするけど、僕の考えはまだ言葉というものを形作ることはできない。僕の考えはふらふらと頭の中をさ迷ってからその回転の中で消えてしまう。

「良かったら私の家に来る？」と女の子は言う。

僕はしばらく迷ってから頷く。

「じゃあ、行こうよ。私の家すぐそこなのよ」

僕はベンチから立ち上がって女の子について行く。女の子の家は本当に公園から目と鼻の先という感じで公園を抜けてすぐの家の門を潜ると女の子はためらうことなくベルを押す。玄関には明かりがひとつ灯っていて、よく手入れされた庭の花々が門から玄関へと伸びている。

「ハイ」と女の人の声が扉の向こうで聞こえる。

女の子が「ママー」と言うと扉が開く。

女の子は僅かに空いた扉の向こうにするりと入ってしまい、扉が自動的に閉まると僕は玄関の外に取り残されたような感じになる。どうしようかと思っているとまた僅かに扉が開き、そこから女の子が顔を出す。

「いらっしやいよ」と女の子が言う。

その隙間から扉を潜ると、僕の知らない他人の生活の匂いが玄関の匂いと一緒に鼻に届く。女の子の母親らしき女性が一段高いところから僕を見下ろしている。玄関には僕の家と同じように幾つかの靴がきちんと並べられていて、どこかの草原で髪の毛の長い女が笛を吹いている油絵が飾ってある。そして僕の背丈よりも二倍ぐらい大きな鏡が壁に取り付けられている。

「いらっしやい。こんなに遅くなって家の人は心配しないの？」と母親が言う。僕は首を振る。

「私の新しいお友達。ねえ、ママ、今日泊めてあげてもいいでしょう？」と女の子は言う。

「それはかまわないけど、家の人心配するんじゃないかしら？どこから来たの？」

僕は首を振る。女の子の母親は長い髪を肩ぐらいでふんわりとカールさせてとても優しそうな笑顔を浮かべている。今まで会った人

の中で一番優しそうな人だと思う。

「困ったわね。お家の電話番号とか住所はわからないの？」

僕は首を振る。

「ねえ、ママ、いいでしょー。この子と遊びたいの」と女の子が言う。

「とにかく家に入りなさい。そんなに汚れて、もう」と母親が言う。

僕と女の子と母親は3人でお風呂に入り汚れを落とす。それからキッチンに行ってカレーライスを女の子と一緒に食べる。キッチンはリビングと一体になっていてそこにはL字型のソファが置かれ、テレビのスイッチが入ったままになっている。

「本市内の一軒家で30代とみられる女性の死体が発見されました」と眼鏡をかけたニュースキャスターがテレビの中からリビングに話しかけている。

「家の冷蔵庫からは女性の子供と思われる8歳ぐらいの少年の死体が発見され、警察は原因の究明を急いでいます」とキャスターは語っている。

それから僕と女の子は女の子の部屋に行く。女の子の部屋はとても綺麗に整頓されていて、小さな机が壁際にあり、棚の中にはぎっしりとぬいぐるみが詰め込まれている。女の子はすでにパジャマを着せられているけど、僕は同じようにティシャツと短パンのままだ。

女の子はぬいぐるみをひとつずつ取り出すとぬいぐるみについて

の説明を始める。この子とあの子は仲が良くないから一緒にしてはいけないとか、この子とこの子は離れたがらないとか、そんなふう

に。
「この子はね」と女の子は言ってクマのぬいぐるみを取り出す。「ヒコちゃんつて名前なの。ヒコちゃん、挨拶しなさい」女の子はクマのぬいぐるみの首のところを持って僕にお辞儀をさせる。そのぬいぐるみはずいぶんと女の子が大切に扱っているらしく、クマのお腹のところが少し黒ずんでいる。

僕は「こんにちは」と言う。

女の子がクマの代わりに「こんにちは」と言う。

「この子はね、遠い星の王子様なんだけど、なかなかお姫様に会うことができないの。家のパパとママみたいにね。それでヒコボシつていうんだけど、相手のオリ姫がなかなか来てくれないの」

「大変なんだね」と僕はいいながらクマを撫でてあげる。

母親がやってきて僕と女の子の布団を用意してくれる。母親はばらばらに散らばったぬいぐるみを元にあった場所に戻して、「早く寝なさいね」と言う。僕と女の子が布団に入ったのを確認してから部屋を出るときに電気を消してゆく。

女の子は部屋の中が暗くなって母親の去ってゆく足音が聞こえなくなると布団からはみ出すようにして手を伸ばし、僕の手を握る。

「私たちきつといいお友達になれるわよ。私のこと忘れないでね」と女の子は言う。女の子は手を強く握るわけではないけどそこには

しっかりとしたやわらかいぬもりがある。その手の中から僕はしっかりと彼女と繋がっていることを感じる事ができる。僕はこのままこの家で女の子と一緒に暮らしていけたらどんなにいいだろうと思う。

僕はそこでようやく女の子の名前を聞いていないことに思い当たる。僕は女の子の名前を聞かなくてはいけない。そしてその名前を覚えていなくてはいけない。でも女の子はすでに寝息を立てていてその繰り返される音を壊してはいけないと思う。そこでは静かに波がうねりを描き、僕を包み込むように耳元で木霊する。女の子の手はすでにだらんとしていてそこにはどのような力もこもっていない。やわらかな温もりは永遠に途絶えてしまったように思えてきて僕はもう一度女の子の手を握り締めしてみる。

ばたばたと僕の周りを歩き回る気配で目が覚める。女の子の母親がしきりに僕に何かを言っている。

「いいかげんにしてちょうだい！一体何様のつもりなの」と母親が僕に言う。「この子はどうゆうつもりなのかしら」

母親はとても怒った顔をしている。僕は明るくなった女の子の部屋にひとりで眠っている。昨日の優しいおばさんはどこにいったしまったのだろうと思う。いつの間に朝になったのかわからない。ほんの数十分前に眠ったばかりなのだ。母親に言わなくてはいけない。きつと時計が狂ってしまったんだと。

「ちょっと、あなたこっちに来なさい」と僕は母親に手を引かれてリビングにまで連れて来られる。僕はまだすごく眠い。それに女の

子はどこに行ってしまったのだろうか？公園に遊びにいったのかもしれない。僕も行かなくては、あの女の子と手を繋かなくてはと思う。それでも僕はあまりに眠いのでリビングのソファアの上に寝転がってしまふ。母親がケータイを持って何か操作しているのが見える。

僕はどこかに隠れなくてはと思う。そして玄関にあつた鏡のことを思い出す。あの大きく向こう側を映し出すその奥には全く別の世界が広がっている。僕にはそれがはつきりとわかる。その向こうには僕の知らない何か潜んでいる。その世界の空気や匂い、そして風を感じる事ができる。それは何かワクワクさせるものでもあり、淡い予感のようなものでもある。でも僕にはどうやってそこに行けばいいのかわからない。

僕は女の子のところにいかなくてはいけない、そう思いながら僕はまた夢に引き戻されるかのように目を閉じてしまふ。

雲のように浮かんでは青白い月明かりと共に消えてゆく僕の思考という風の吹く場所。そこには何もかもがあるけど、そこにはもう何も残されていない。人々が暮らした息遣いは擦れ切れ、懐かしい春の匂いが辺りには満ちている。僕の耳は鳥たちが会話をするのを聞く。そこには波のうねりがあり、渦のしぶきがある。

僕の影がそこでは躍っている。真っ暗な場所に一箇所だけスポットライトを当てたその場所で、僕の影は優雅に踊っている。そして悲しく笑いながら。ダンスフロアには大量の血が流された後がうつすらと闇の中に浮かびあがっている。

それでも影の踊りはとても見事だ。まるで大地と空を洗い清めて

いるように腕の振り方や腰のリズムの取り方を見てるとそこには影なりの哲学のようなものさえ感じられる。僕はただ目を奪われ頭の中を空っぽにして影の踊りを見ている。もう踊りを見ているということさえ僕は覚えていない。その踊りはあまりにも完結的で、いつの間にか世界が萎んで踊りの中に入っていった。そして僕は影と共に踊り、共に呼吸していた。

影は躍り続ける。一体音楽はどこにいったのだろうか僕は思う。音楽がなければ踊りは踊れないはずだ。それでも影はその無音の暗闇のなかで僕には聞こえない特殊な音を聞いているみたい。いつまでも踊り続けている。僕の頭はどんどんと混乱してゆく。一瞬何かが閃きかけるけど、それはつかみどころのない夢のように意識を集中すればだんだんとその僅かなささやきは遠ざかってゆく。

何かか何かにつつかる。ドカンと何か大きなもの同士がぶつかる音がする。何かとつもなく大きなものだったことがその音からわかる。大きな爆発音の後には金属が擦れあう音や硬いものが弾けるような音、それに細かいものが崩れ落ちてゆく音が重なり合いしばらく続く。それらの音が鳴り止んだ後には耳が痛くなるような静寂が僕を包む。

ふと気がつくと僕の影がまた躍っているのに気がつき始める。あ、そうか、そういえば影の踊りを見ていたんだな、と僕は我に帰る。

「LIFE ALWAYS HAS TWO SIDES」

僕はこの言葉を思い出す。どこかで誰かがそう言っていた。

「LIFE ALWAYS HAS TWO SIDES」

僕はもう一度その言葉を繰り返す。そしてその文章が意味するものが正しいのか間違っているのか考えてみる。おそらくその通りなのだろうと僕は思う。誰かが僕にそう言ったんだから。そして闇の中でもそれが光続けていたということなのだから。

2

「ピピ」

パソコンの電源を入れたときの音がする。それがまるで何かの鐘の音のように僕の意識を呼び覚ます。

NOW LONDDING

NOW LONDDING

NOW LONDDING

NOW LONDDING

NOW LONDDING

僕の中で何かが眠り続けている。とても静かに、とても完璧に。何物もそれを揺り動かすことはできないというぐらいにしっかりとそれは眠っている。

何かの音がだんだん遠くから近づいてくるのが聞こえる。その音は遠くのほうで聞こえるか聞こえないかぐらいの小さな音だ。僕の元にその音が忍び寄ってくる。まるで遠くで換気扇が回っているような音だ。誰かが次元のはざまの向こう側で子守唄を歌っているようにも聞こえる。音に付随して何かが意味を持たせようとしている。意味そのものが頭をゆっくりと持ち上げるみたいにざらざらと僕の神経を舐め上げる。眠っている僕の何かに擦りつくようにして僕を覚醒へと連れていこうとする。氷のような冷たい手を伸ばして身体を撫でてくれるようだ。辺りはとても静かなのにその音が僕の中にある何かを捕まえようとしている。あるいは持ち上げて突き上げようとしている。それは大事なものだ、と自分に言い聞かせる。それを奪い取られるわけにはいかない。

音？と僕は思う。僕はもう目覚めているのだろうか？

そうして僕は目を開ける。

最初に見たのは自分の手首だ。手首に何かが巻きついている。それは一本の糸で編みこまれたブレスレットのようなものだ。それを自分の左手首につけている。

そういえば何かをしていたような気がする。破れた布か何かを縫い合わせていたような気がする。針と糸を使って何かを直していた。でもそれは夢だったかもしれない。ここにいる僕とは全く関係がないような気がする。

頭がまだはつきりと覚えていない。夏の強烈な日差しの当たる車の中で居眠りをしているみたいは何もかもがぼんやりとして世界の境界線が危うくなっている。

そう、車の中にいるんだ、と思う。僕は自分が車の中にいることに気づく。車の運転席に座って自分の手首を眺めている。

それでもまだ意識ははつきりしない。なんだか自分がとんでもなく遠くからここへ帰ってきたような気がする。どのくらい遠かったのか考えるだけで気が遠くなりそうなくらい遠くだ。身体を動かさそうとするとまるで身体が動くのを嫌がっているみたいに重く感じる。意識はまだぐるぐるとものすごい勢いでどこかを回っている。大きくて丸いものが頭の中で回っている。

もう一度自分の手首についているブレスレットを見つめる。そしてそこに含まれている意味について考えてみる。なぜ自分がそんなものをつけているのか記憶を探ってみる。でも記憶を探ろうとするところには全く手がたえというものが無い。まるで空っぽの箱の中で何度も手を握り締めているような感じがする。握り締めれば握り締めるほど記憶というものが遠ざかってゆくような気がする。全くどことも繋がらない。世界は真っ白なまま僕の頭で広がっている。どこを見回しても地平線しか見当たらない。

いや、これは夢のはずだ、と僕は思う。何かがおかしい。何か

間違っていると僕は思う。そんなはずはない。なにかをされていて、そしてここへ戻ってきたんだ。僕はそこを糸口にドアをノックし次の扉が開くのを待った。でもノックしても返事は返ってこない。

なにをされていて、どこにいたのかわからない。その向こうの扉は開かないまま錆び付いて固まってしまっている。

落ち着いて考えよう。

僕はしばらく落ち着くように心がける。まだ意識はぐらぐらと波のように揺れている。まだどちらの世界に落っこちるのか決めかねているみたいに。

現実的にならなくてはいけない。

そつだ、地平線だ。地平線しか見えない。

僕はなんとか車の外の視界に気がつき、そこに地平線があることを確認する。見える範囲では草木一本もない砂漠が延々と続いている。

まだ僕の意識は僕の脳みその10メートルぐらい上空で回転しているような気がする。どうしてこんなに意識が朦朧としているのだろうか？僕は一体どこからやってきてここは一体どこなんだろう？それにそもそもいまままで何をやっていたんだろう？

考えることといえば自分への問いかけだけで肝心の答えが返ってこない。まるで記憶そのものがどこかに抜け落ちたような感じさえする。

そうか、そうかもしれない。僕には記憶というものが全くないのだ。

そう僕は考える。それは正しいように思える。

でもそこにはものすごい矛盾が隠されていることに気がつく。僕が記憶をもっていないとしたら、僕は一体何者なんだろう？ なんだか自分が魂を吹き込まれる前の人形になったような気分になる。

一体ここで何をやっているのだろうか？ それに何だか音楽が聞こえる。僕はそう思う。耳を済ませてそれが音楽であることを確認する。その曲名を頭の中から記憶を頼りにして伝ってゆく。そこに風のように流れる一本のラインを読み取りながら自分の記憶と適合するものを探し出してゆく。

意識がまだうまく定まらないためかそれが何の曲なのか全然わからない。コードの向こうに隠れたコードが繋がっていて、その向こうにまた別のコードが隠されている。何重にも何重にもいろんなブロックがかかっている。まるで合わせ鏡の中心にいるみたいにコードは延々と繋がってゆく。鏡に映されたメタファーがその反対にある鏡に映った別のメタファーを巻き込んでいる。そしてその二つは激しい渦を巻いて僕を取り囲んでいる。

僕はその渦の中心を捕まえようとする。僕は必死で記憶をさかのぼらせてゆく。まるでもう一度眠りの中に戻ってしまっぐらい深く、その中心へと堕ちてゆく。

僕はその渦を少しづつ読み取ってゆく。海のだ真ん中に出来た大きな渦にこれから浮き輪をもって泳いでゆくみたいにその渦の中に巻き込まれてゆく。

そして音楽の中に雨の音が混じっていることに気がつく。音楽の向こう側に雨の音を聞き取る。それは空から降ってきたものが車のボンネットに当たり、車の車体を伝い、そして大地へと降り注ぎ、海へと帰ってゆく。そうゆうサイクルの音がする。

そしてその音楽がチツク・コリアの「リターン・タワー・フォーエバー」であることに気がつく。

それでもここまで来るのにもかなりの労力を消費していた。まだ身体だつて動かない。なんだかひどく酔っ払っているようにも思える。なんだか何か大きなものを身体から吐き出したばかりでひどく疲れているような気がする。まるで身体から卵か何かを吐き出した後のようなのだ。

僕はもう一度意識を取り戻し目の前に広がる景色を眺めてみる。たしかにそこには地平線がある。でも地平線のように見えて地平線じゃないものがある。僕は目を凝らして、その世界の半分の違いを認識する。そしてそれを理解する。

海だ。

砂漠が広がる地平線だけだと思っていたものは左側が半分海なのだ。車の反対側は切り立った断崖になっていて、それを朝焼けの始まったばかりの地平線と水平線しか見えない車の中で見ている。

どうして一体こんなものが目の前にあるのだろっ?と思う。ここは一体どこなんだ、と再び思う。

全くわけがわからない。

僕はどうして今、こんな、ところに、いる、の、だろう。

と思考がデジタルみたいに切れ切れになっていった。

ここは一体どこなんだ？

目の前に広がる雄大な景色を眺めながらそう思う。僕はなぜこんなところにいるのだろうか？と。

ふと運転席の横を見てみるとそこには女がいる。

女か、と僕は思う。

「おお、おお、おおおおおとおおお、じじじじじ、じじ、これは、朝目が覚めたら、おおおおんが、となとなとな隣りで寝てえているうう、という状況ですねええ」と僕はひとりごとを言う。でもなぜこんなことを言ったのか自分でもさっぱりわからない。

どうしてこんなところに女が寝ているんだろう？どうして僕の横に女がいる必要があるのだろうか？僕はそう考えてみる。でも記憶の触手は空箱に手を突っ込んだみたいにとことも繋がっていない。

マツタク、ワケガ、ワカラナイ、

と僕は思う。

チック・コリアの「リターン・トゥー・フォーエバー」は曲の中間ぐらいに差し掛かり、ドラムやベース、ボーカル、電子ピアノの生み出す様々な音の渦の中心にまるで一本の糸のように流れるメロ

デイーを耳にする。

車の外の景色はまだ太陽が昇る前らしく空には星が輝いているのが見える。空と海とは同じような濃い紺色でその二つを隔てるものは何もない。断崖から見下ろす波は激しく僕をどこかへ押し流そうとする。やがて空と海の間には僅かなざわめきのようなものを感じ始める。波の音が静かにその二つを引き剥がそうとしている。霞が生まれ、そこから少しずつくつきりとした水平線が現れ、空は空へと帰ってゆく。

水平線は霞んだ白から透明なオレンジに変わってきて夜の間には溜まった闇を残さず飲み込んでしまう。水面はシルクのように光を吸い込み、星たちは役目を終えたかのように現れてくるそのオレンジに身を預けて光の中に消えてゆく。

カモメたちが断崖で一日の始まりの光で体を清めようとするように並んでそれを待っている。辺り一面がオレンジに染め上げられてもまだ太陽は現れない。まるで闇を吸い込んで消滅してしまったんじゃないかと思うほど太陽はなかなか姿を現さない。

しかしその間は時間が止まってしまったかのように美しく儂いひと時だ。一瞬だけ僕たちを夢の中から解放し、目覚めさせてくれる。しかし太陽が現れると目の網膜に光の影を残し、それを合図に一日が始まる。

「目が覚めたべか？」

と僕の隣に座っている女が話しかけてくる。僕は女の方を見る。

女はかなり目が悪いのか大きな牛乳瓶の底みたいな眼鏡をかけていて、小太りで気持ち悪いにきびが顔中に張り付いている。色白で長くぼさぼさした髪が顔を少し隠すように垂れ下がっている。着ている服も外見同様にあまりパツとしない。どう好意的にみても美人とはいえないタイプだ。

「ねえ、あんだあ、目が覚めたべか？」と僕に話しかけてくる。なんだか声もざらざらして聞いていて聞いてるだけで落ち着かなくなる。

「ねえ、あんだったら、目が覚めたべかって聞いてるじゃないのお？」

とにかくうるさい、と僕は思う。なんで僕に話しかけてくるんだ。僕はまだかなり眠いんだ。それに自分の身に何が起きているのか全然わからない。

「ねえ、聞いているべか？」女がまたそう言う。

僕はなんとか首を振る。でも首を振ったところで僕が喋りたくないことを表現しているわけではないし、女にとって僕は言葉を聞き取っているということになる。

「なんだあ？あんだあ？具合でも悪いのげえ？」

女はまた話かけてくる。

「なんとか、言ったらどうだあ？私、わかんねえっス」

「ちょっと待たれよ。拙者、今、おぬしと話したい気分ではないのじゃ」と僕は言う。そう言いながら、自分で自分の言った言葉の響きが僕の思考と全然噛み合っていないことに気が付く。

「あんだあ、どうしたっスか？そんな変な喋りがたしでえ。頭でもおかしくなっちまったべか？やっぱりどこか具合が悪いんじゃないののお？」

「待たれよ、と申しておるではないか。拙者、今、それどころではないのでござる」

「あんだあ、やっぱり頭おかしくなっただんでねえか？」

女はそう言って車の中に響き渡るぐらいものすごい声で「ガハハハッハハハハハハッハハハハア」と笑う。なんて醜い笑い方をするんだらうと僕は思う。

「何がそんなにおもしろいのでござるか？」と僕は言う。

女はそれを聞くとさらに大声で笑う。

「あんだあ、って、けっこうユーモアのセンスあるんじゃないの？私、知らなかっただあ」

「拙者は冗談でこんなことを言っておるのではござらん、一体何がどうなっておるのじゃ？」

「もう冗談はこれぐらいでいいべさ？いい加減にまともに戻ってべか？」女はそう言と僕のほうに手を伸ばそうとしてくる。僕に障つもらしい。

「しばし、しばし、待たれよ」と必死になって僕は言う。「おぬしはこんなところで一体何をしておるのじゃ？それになぜ拙者とおぬしが一緒にこんな車の中にいるのじゃ？全くわけがわからぬ」

僕がそう言つと女は少し眉をひそめる。

「あんだあ、自分が何言つてるかわかっているべか？ホントに頭おかしくなつたんでねえの？」

「それにだいたいおぬしは一体誰であるか？拙者は今まで何をしておつたのじゃ？」

「あんだあ、いい加減にしないと私も怒るっスよ。もうこの前みたいに喧嘩なんかしたくないっス。私たちやつとここまで来たんだから」

「しばし、しばし、待たれよ」と僕は必死になって言う。それにしても僕はどうしてこんな古臭い言葉遣いなんだろうと自分で思う。

「失礼かと存ずるが、しかと聞かれよ。拙者は本当にわけがわからぬ。一体ここはどこのじゃ？どうして拙者はこんなことをしておるのじゃ？何ひとつ覚えておらんのじゃ」

女は眉をさらにひそめてしばらく考え込む。僕の耳には「リターン・トゥー・フォーエバー」が曲の後半にさしかかっているのが聞こえてくる。ここは一体どこで、僕は一体何をしているのだろうか？それにこの女は誰だ？僕のことを知っているみたいだけど僕には全く記憶がない。まだここは夢の中なのだろうか？僕は今までどこで眠っていたんだろう？

僕は記憶を探ろうとする。でもそこには全く何も無い。僕の頭の回転はどこにも辿り着かないし、どこにもぶつからない。どこか空中でクルクルと回っているだけだ。

「あんだあ、もしかしたら記憶喪失とか言うんじゃないでしょうね？そんなことは起こって欲しくないっす。冗談ではすまされねえがら」と女が言う。

「拙者には、わけがわからぬと申しておるだけじゃ。それより、ともかく、おぬしは一体誰なのじゃ？」

「ねえ、それが、記憶喪失って言うんじゃないの？私はコト力です。私のことも覚えてないべか？」

「コト力？おぬしはコト力と申すのか？全く記憶にござらんな。漢字ではどう書くのじゃ？」

「日本の楽器の琴に、うたの歌で、琴歌でしょ？ホントに覚えてないべか？3月3日。耳の日産まれのお姫様って私のこと呼んでたでしょ？私あなたが記憶喪失になんてなったらこの世界でもう生きてゆけないっすよ。私のこと覚えているべな？」

「覚えておらぬと申しておるであらう！」と僕は少し怒ってしまった。
「おぬしみたいなブサイクな女がそのような顔をしても一文にもならぬ、冗談は顔だけにしろ！おぬしは鳥山アキラ大先生のドクタースランプ・アラレちゃんか？一体どうなっておるのじゃと聞いておるであらう！」と続けて僕は言ってしまう。

僕は自分で言ってしまったって後悔する。もう少し落ち着いて話すべきなのだ。

コトカは海の方角を向いてしばらく黙っている。しばらくするとカーステレオの音楽が止まり、車内には静かな雨の音が木霊し始める。

「申し訳ござらん」と、とにかく僕は謝った。ごめんな、と言いたかったけどそんなことは今のところどうでもいい。とにかく話を進めなくてはいけない。僕はここで一体何をしているのだろう？僕は一体誰なんだ？とにかくそれを突き止めなくてはいけない。

「音楽終わったべ？何か音楽かけてくんねえが？」とコトカは海の方角を見たままそう言う。

「でもどうやって音楽をかければいいのじゃ？」僕がそう言うところには10秒ぐらいじつと黙ってから運転席と助手席の間に埋もれているケータイを僕に手渡す。

ケータイだ！と僕は思う。そう思った瞬間にすごくホツとした気分になる。このなかには僕の記憶の手がかりとなるものがぎっしりと詰まっているに違いない。これを手がかりに僕は自分の記憶を取りもどすことができるだろう。

ケータイの待ち受け画面には一枚の絵が映っている。でもその絵は僕の記憶と一致しない。どこかの草原で髪の毛の長い女が笛を吹いている油絵のような画像がケータイの待ち受け画面になっている。これは本当に僕のケータイなのだろうか？とにかく僕はケータイをいろいろと操作してみる。でも操作すればするほど僕はますます混乱してゆく。ケータイはまるで新品かもしくは初期化されたみたいは何も情報が入っていないからだ。

「ここには何も記憶がないみたいじゃが、これは本当に拙者のケータイであるか？」と僕は言う。

「嘘！そつたらことあるわけないでねえの、ちょっとこつちに貸してみ」とコトカは僕の手からケータイをひったくる。それからしばらく操作してみる。

「あなたが、やったんでしょ？あなたが初期化したんじゃないの？私あなたのケータイなんて絶対に触らないもん。あなたしかいないでしょ。また最初からなんて冗談じゃないわよ。どれだけ苦労したか覚えてないでしょ？これが何回続けば気が済むの？あなたはだいたいねえ、どうしていつもそつなのよ。どうしていつもこつなつちやうわけ？いい加減こつゆう下らないことは辞めたらどうなの？」

コトカの言葉が急に少しまともになった。何が起こっているのかまだ全然わからないけど少しは喋りやすくなつたような気がする。

「なんだよ、これはオレ様の責任なのかよ！なんでそつなるんだ。別にオレ様の責任でもいいよ、そんなことは。とにかく何がどうなつているんだつて聞いてんだよ」と僕は言う。僕の言葉も少しまともになる。

「あなたね、これは忘れたとかでは済まされない問題よ。これはものすごく深刻なトラブルなのよ。そのことわかってるの？本当にわかってるの？ねえ、カエル、怒ってる場合じゃないのよ？」

「おまえなんだよ、その口の利き方は、お前自分が何言ってるのかわかってんのか？それにカエルってなんだよ？おまえ、この豚ヤロウ、お前のパンツ豚の匂いつきでブルセラに売っちまうぞ！」

「カエルって、あなたの名前でしょ？やっぱりあなた、記憶がないんでしょ？」

「何だよ、オレ様がそんな名前なわけないだろ、気持ち悪い。それにおまえのそのひでえ田舎なまりの言葉なんとかならねのか？お前、自分のオマンコに凍ったキュウリでも突っ込んで身体の脂肪掻き出してろ。それビデオで取ってまたブルセラに売ってやる」

「あなた、本当にわからないのね？そうじゃないと私までわけがわからなくなっちゃうもん」そこでコトカはため息を付く。

「だからそう言ってるじゃないか、何がどうなってんだ。趣味の悪いネックレスなんかして、それにガキみたいなキャラクターのイヤリングなんか付けやがって、いい加減自分の歳考えたらどうだ？」

「まずい、と僕は思う。自分でもわけがわからないままどんどんと喋ってしまったっている。もうかなり状況を立て直すことは難しいくらいにまでまずいパターンだ。今は二人きりで車の中にいるのだ。そしてこの女の子しか僕の記憶の手がかりはない。まだ自分の置かれた状況が全然わからないのにこの状況は非常にまずい、と僕は思う。」

「いや、決して、オレ様の言ったことって・・・なんていうか・・・」

その・・・違うんだよね」と僕はとにかく状況を立て直そうと試みる。「とにかくオレ様の言いたいことは、そうじゃないんだ。ヘイ、ヨウ、とにかく音楽でも聞こうぜ。これはちよっと・・・なんていうかさ・・・言いにくけど・・・とにかく違うんだよね」

と言いながら僕はカーステレオのスイッチを入れようとする。でも車の中にはどこにもカーステレオは見当たらない。さっきまでの音楽はどこで操作していたのだろう。

「て、いうかさ、どうやって音楽聞くんたい？ファンキー・モンキー・ベイバー？おまえのことそう呼んでいいかい？ファンキー・モンキー・ベイバー？」

「あなたのそうゆう下らない、冗談は変わらないのね」そしてコトカは自分のケータイをポケットから取り出すと操作し始める。

「私の持つてる曲って、3曲しかないけど・・・」

「いいよ、いいよ、ファンキー・モンキー・ベイバー。なんでもいから音楽をかけてくれ」

「とりあえず、その呼び方はやめてよね」

コトカがそう言うのと車の中のスピーカーから音楽が流れ始める。ドラムとギターの音がまずバチンと沈黙を破り、それからベースの音が続く。それから誰かの歌声、誰だ？と僕は思う。それに英語の歌だ。最初は男の声なのか女の声なのかもはつきりしない。でもその音楽は渦となって僕を取り囲む。僕の何かを揺さぶり、そしてどこかへ連れていこうとしている。そこには限りない安らぎと、そして僕の失った世界がある。僕はその失われた世界の音を聞く。

誰だ？この歌は？と僕は再び思う。僕とコト力は静かに音楽に耳を済ませる。

そうするうちに次の曲になってしまふ。でも歌っているのは同じ歌手で、どうやらジャズであるらしい。僕は今までにジャズなんか聞いたことはない。でもわからない。そんな気がするだけで記憶が埋もれているだけなのかもしれない。

僕がそう考えているといつの間にか嵐のような強烈な曲の持ち上がりがやってくる。僕は言葉を失い、ただその音に耳を澄ます。僕はもうどこかに飛ばされていったような気がする。僕は自分の身が引きちぎれるような嵐の真ん中にいることをそこで知る。僕は上空に巻き上げられてもう戻ってくることはできない。僕は失われた世界の悲しみの声を聞く。

これはニーナ・シモンの「マイ・マン・ゴーン・ナウ」だ、と僕は曲名に気がつく。そしてこれの前にかかっていた曲は同じくニーナ・シモンの「ターン・ミー・オン」だ。

それから次にまるでクラブミュージックのような全く聞き覚えのない曲がかかる。メロディラインはどこかで聞いたことのあるような気がするけどはつきりとはわからない。でもそこには歌詞が含まれている。

音楽が鳴り止んだら

一瞬にして世界が沈黙に包まれた鐘の音を聞いたら

すぐに足を動かすんだ

その鐘の音は

光と闇が一匹の巨大な怪物となって

おまえの何かを食いつぶす

メデューサの餌食になるまえに踊りだせ

ダンス ダンス

踊りだしたら

おまえの足はもう止まらない

天国と地獄の境界線を

踊り狂うことになるだろう

天国に足を踏み出せば

お前は地獄に行き

地獄に足を踏み出せば

おまえは天国に行く

DNAの螺旋を上り続けるんだ

ダンス　ダンス

音楽が鳴り止むとまた静寂が車のところにやってきてさっきから
変わらない雨の音がまた静かに鳴り始める。その途端にコト力は煙
草をポケットから取り出して、ライターで火を点け、煙草を吸い始
める。

「おい、てめえ、こんな狭いところで煙草なんか吸ってんじゃねえ、
それに全然似合わないからやめろ」と僕は言う。

「何よ！あなただって煙草吸うでしょ？」

「オレ、オレ様が？バカ言ってるじゃねーよ、オレ様が煙草なんか
吸うわけないだろ。臭いし、身体にも悪い、美容にも良くない。っ
て言ってもおまえはもう美容がどうのこうのってレベルは遙か昔に
終わってしまったみたいだけだな」

しまった！と僕はまた思う。どうしてこう自分で自分の首を絞め
るようなことを言うのだろう。

「それだけ私がかわいいってこと？」とコト力は音楽を聴いて気分

が良くなったのか少し冗談めいたことを言う。

「そうかもな」と僕は答える。「この、豚ヤロウ」

「ねえ、カエル、たぶん最悪のパターンだと思うけど、あなたはまた記憶をなくしてしまったみたいね？」とコト力は煙草を車内の灰皿にトントンと叩きながら言う。

「ななん、あ、ななん、なななな、なんだよそれ？オレ様は何度も記憶をなくしているのか？それに本当にオレ様の名前はカエルって言うのか？」

「自分のケータイ見てみれば？パスポートが入っているから」とコト力は言う。

パスポート？と僕は思う。何で僕がパスポートなんか持っているんだ？ここは外国か？僕は外国に来ていて、どこかで記憶をなくしてしまったのだろうか？それになんで僕がパスポートなんか持っているんだ？しかもケータイの中に？ケータイにそんな機能があっただろうか？

とにかく僕はケータイを操作してパスポートと表示された文字をクリックしてみる。

名前 石川 カエル

住所 0号室

という画面が出てくる。

「なんじゃ、こりゃ？これがオレ様のパスポート？」と僕は言う。
「全く、わけが、わからない。マツタケ、ドウナツテ、イルンダ？」

「もう、また最初からあなたにこの世界のことを説明する気にはなれないわね。簡単なことだけは教えてあげるけど、あとは面倒くさいから自分で調べてね。私たちがこうゆうことになった以上、もう私も勝手にさせてもらうから」

「ちよ、ちよ、チヨ、ちよっと待ってくれよ。一体ここはどうなっているんだ？これはどうゆうことなんだ？全く話の筋が見えてこないんだけど。あ、このオレ様を置き去りにしようっ たってそうは問屋がおるさねええ、からならああああ、この売春婦」

「もうあなたのそうゆう冗談は聞き飽きたわ。そのうちにまたエロビデオのネタが出てくるんでしょ？そうゆう下品なのはもう聞き飽きた」とコトカは言う。

コトカがそう言った瞬間に僕はエロビデオのことを思い出す。

いかにもアダルトビデオらしい古臭い画像で、ラブホテルの一室らしい部屋にベッドだけが置かれた部屋で男と女が交わっている。古めかしいラブホテルで壁、天井全面に鏡が取り付けられている。女の顔は画面から外れていて下半身だけが画面に映っている。そして男のほうはもうこれが我慢の限界だ、という顔をキープしながら

長い間マシンガンのように腰を揺すっている。ギシギシとリズムに合わせてベッドが揺れる独特の音が僕の耳に入ってくる。男はこんなにがんばったんだから、もう死んでもいいよみたいな感じで立ち上がると女の顔のほうに向かってゆく。

「なんだよ、オレはエロビデオの話なんかしてねえだろ？ 下品なのはおまえのほうじゃないか、この豚、ブクブクで、コロコロの豚やロウが」

違う、どうしてこうなってしまうんだ。話が全然前に進まないじゃないか。

「違う、ワリイ、そういう意味で言ってるんじゃないんだ」

「じゃあ、どうゆう意味なの？」とコトカは言う。

「とにかくここにいる僕は僕じゃない。僕とは全く別の人間だといつことよ」

「とにかくここにいる僕は僕じゃない。僕とは全く別の人間だといつことよ」

僕が言った言葉を正確にコトカは真似をした。しかも僕と同時に。まるで前もって僕が何を言つかを知っていたかのように。

「つまり」

「つまり」

「なんていうか」

「なんだと！この、ぶぶ豚ヤロウが、同じことの繰り返しじゃねえか？もううんざりなんだよ、おまえみたいな豚」

「もう、わかったからとにかく部屋に戻らない？」

「部屋？部屋ってなんだ、おめー、泊まるところがあるのならば早く言わないんだ、このヤロウ。皮むいて丸焼きにしちまうぞ」

「もう、わかったから、さっさと部屋に戻りましょ？いいでしょ？」とコト力は確かに落ち着いてそう言う。

僕は頷く。とにかく話が少しは前に進んだ。とにかく泊まる場所があるのだ。僕の家なのか、どこかホテルの部屋なのかはわからない。でもとにかく一人になっていろいろと考えてみたい。そうすれば僕が何者なのかももう少しは思い出せるはずだ。

「オーケー。ファンキー・モンキー・ベイバー。とにかく部屋に行こうじゃないか？少し話しをするのにも疲れた。もういい、もう今のところオレ様が誰だっついていい、君が誰だっつかまわない。とにかくファンキー・モンキー・ベイバーとはそこでお別れ、ということになる」

「何言ってるの？私たち一緒に部屋に住んでるのよ」

「この豚豚豚、ぶた、ブタ、豚豚がああああああ、てめえ、そんなことあるわけねえだろおおおお！」

「だってそうなんだもん」とコト力は言う。

もうダメだ、と僕は思う。これはものすごいことになってきた。

僕が記憶を失っている間に何かとんでもないことに巻き込まれたの
だろうか？ダメだ、とにかく今は考えるときではない、と僕は思う。
とにかくこのコトカのことを一旦信じるしか道は残されていないみ
たいだ。誰も周りにいないし、僕はこんな町から遠く離れたところ
にいる。まだ全然わけがわからないけど、とにかくこのコトカとい
う女の子の言うとおり部屋に戻ろう。それ以外に今のところ僕の選
べる選択肢というのはなさそうだ。とりあえず今は早く一人になっ
て落ち着きたいのだ。

「オーケー、確かコトカちゃん、って名前だったよね？ファンキー・
モンキー・ベイバー？」

「その呼び方はやめてって言ってるでしょ？」

「オーケー、何回も悪いとは思う。コトカちゃん、とにかくオレ様
は部屋に行きたい。早速だけど出発だ。ゴー、ゴー、行こうじゃな
いか、楽しいドライブの始まりだ。さあ、行こう、どんどん行こう。
もう帰ってこれなくなるまで行こう」

「ってカエルが車を運転してきたんでしょ？あなたが運転すればい
いんじゃない？」

「この豚ヤロウがあ！しつこいんだよ！いい加減！そんなこと知ら
ねーって言うってんじゃないやねえか！」

どうしていつもこうなるんだ。僕は車なんて運転したことはない
けどとにかく前に進まなくてはいけないのだ。何がなんだか全然わ
からない。とにかく進もう、と僕は思う。「オーケー、とにかく、
このオレ様が車を運転しよう。やったことはないけど、とにかくオ

レ様は部屋に行きたい。この状況をなんとかしなくてはいけない。
オーケー？セニヨリータ？」

「セニヨリータでもなんでもいいけど私にはコトカッていう名前が
ちゃんとあるの。わかったらそろそろ行かない？」

なんなんだ、その口の利き方は？と僕は思う。どうして僕ばかり
がこうゆう目にあうのだろうか？僕がせっかく気分を変えようと冗談
を言っているのにどうしてそのことに気がつかないのだろうか？まあ
いい、そんなことはどうでもいい。とにかく車を動かすのだ。

「オーケー、じゃあどうやって車を動かすのかオレ様に教える」

「何？その口の聞き方？それが人にものを頼む言い方かしら？私が
おとなしくしていると思つて調子に乗らないでよね」

「こおおおおおおおおおおおおの豚、豚豚豚、豚、豚ヤ
ロウがあ！それはオレ様のセリフだああああああああ。たと
え死にかけて虫でもおまえのオマンコ半径5キロ以内は近づかない
ぞ！」

「もうわかったから行くのか、行かないのかどっちかにしてくれな
い？」

僕は興奮して呼吸が荒くなっている。毎回のことだけど、本当に
どうしてこうなるんだ？

「L I F E A L W A Y S H A S T W O S I D E S」

「えっ？今なんて言いやがった？このぶぶぶぶ……ぶぶ……ぶ……か

わいい子豚ちゃん？」

「LIFE ALWAYS HAS TWO SIDESって言ったよ、カエルの口癖でしょ？」

「知らない。覚えていない。悪いけど」

「まあいいわ。運転の仕方は教えてあげる。それに見ての通り誰もいないんだからそんなに危なくないでしょ。まさか隣の断崖に突っ込むなんてことはないでしょうし、道は一本しかないんだから」

僕は頷いてとにかく先に進むことに決める。その先がどこに繋がっているのか、このときの僕は全く予期していない。でも結局僕は進むしかなかったのだ。たとえそれがどのような場所に僕を連れて行くのか前もってわかっていたとしても。

「そしたらね」とコトカは話始める。「その運転席のところに手形のスペースがあるでしょ？そこに手を置いて」

僕は言われたとおりに自分の手を運転席の窪んだ手形のスペース

に重ねる。

「そして進め！って思ってみて」

僕は言われたとおりに車が進むことを考える。

そうすると急に車が前に進む。

「キュッ」

僕がびっくりしたので車に急ブレーキがかかる。僕は車の激しい振動を身体に感じる。

「なんだよ、この車？どうなってんだ？」

「これはあなたの思考に合わせて進むようになってるの。カエルが進めって思うと車は進むし、止まれと思うと止まるの。どう？なかなかすごいでしょ？」

「というよりも……………」

なんだか僕はものすごいところに来てしまったんだな、と思う。思考で動く車？ここは一体いつの時代なんだ？エンジンもないし、排気音もしない。どうやってこの車は動いているのだろうと僕は思う。

「何度も申し訳ないけど、ここは一体どこなんだ？どうやらオレ様は本当にカエルらしいな。全くわけがわからん。君はコトカちゃん、だったよね。念のため？」

「そう、私はコトカであなたはカエル、私たちはパートナーなの？」

「もう話すのには疲れた。とりあえず君が（お前みたいなブサイクが、と僕は心の中で思う）オレ様のパートナーだろうとどこかの宇宙人あるうとどうでもいい。部屋までは遠いのか？」

「さあ？それはどうかしら？」そう言ってコトカは笑う。

「なあ、オレ様は疲れたって言ってるじゃないか？話し合いは最低限度にしたいんだ。部屋まではどのくらいだ？何分ぐらいだ？もしくは何十分か？」

「だから、それは私にはわからないって言ってるじゃない。人の話聞いているの？」

「おおおお、お、オレ様はもう疲れたって言ってるじゃないか？もうホントに怒る気力も残ってないんだ。とにかく進みながら話そう、って言ってもオレ様は疲れているからあまり話したくないんだけど……」

「勝手にすれば」とコトカは言う。

なんなんだ？ふざけやがって、とにかく車を進めようと僕は思う。一度手形から手を離して両手を擦ってみる。少し落ち着かなくてはいけない。僕が何者なのかはひとまず横に置いておくことにする。僕は車のフロントガラスに神経を集中し、それから手形に手を載せる。そして少しずつ車を動かしてゆく。周りには何も障害物はない。隣の絶壁にさえ落ちなければこのままずっと進んでゆけばいいのだ。町の近くまでいけばあとはなんとかなるだろう、と僕は思う。

でも僕の思考とは反対に車は海の方に向かってゆく。オイ、オイ、オイ、と僕は思う。

「ねえ、何やってんの？そっちじゃないわよ」とコトカが言う。

「わかってる、わかってるって」「僕はそう言うけど、車はさらに海の方に向かってゆく。」

「ねえ！カエル！何やっての？って言うてるじゃない？そっちは崖よ、私はまだ死にたくないんだけど」

「わかってる、わかってる」と僕は繰り返す。

「あなたそればかりで全然向きが変わってないじゃない？ほら、もう落ちちやうじゃないの！」

「わかってる、わかってる」

「このカエル！あなた『わかってる』しか言えないんじゃないの？全然わかってないじゃない！車の向きを変えるの、このままじゃ崖に落ちちやうでしょ？」

「このクソ豚がああああ、わかってるって言うてんじゃないか！」

車は止まる。

「ねえ、あなた本当は海に落ちるのが怖いんじゃない？そういう意識があるとそっちに流れて行っちゃうわよ。スケートとかスキーとかでもダメ、ダメ、って思っているとそっちに行っちゃうことってあるじゃない？それと同じよ」

僕は大きいため息をつく。どうしてこうなるんだ、どうして僕はこんな目にあっているんだ？大体この女は一体何様のつもりなんだ？そしたら自分で運転すればいいじゃないか、と僕は思う。

「オーケー、ただの冗談だよ」と僕は言う。「オレ様のチキンレースにどこまで耐えられるか試してみただけだ」

「嘘がミエミエじゃない、さっきものすごい顔してたわよ。犬みたいにオシッコもらしそうなね」

「このおおおおお、ってオレ様は本当に疲れているんだ。本当の本当に疲れているんだ。とにかく行くこう、セリヨリータ、いや、コトカちゃん。オレ様が過去に何か悪いことをしたんだったら謝るよ。誤って済む問題なら謝るよ。とにかくオレ様は疲れた、ということが言いたいんだ。オレ様は早く部屋に行って休みたい」

「それはカエルが記憶をなくしたからこんなことになってるんじゃないの？大体それはあなたの責任じゃない？何？私に責任をなすりつけようとして？そもその問題は、カエルが記憶をなくしたってことじゃない？どうしていつもいつも私のせいにするのよ？それにね……」

あーーーーー、始まった、と僕は思う。もうダメだ。もう耐えられない、と僕は思う。そして運転席の手形に意識を集中させる。

するとものすごい勢いで車がスピンし、海と並行してカミカゼのように車は動き始める。僕とコトカは飛行機が飛ぶときのようなものすごい重力を感じる。

「イエー、進んだじゃねえかー、こいつはスゲエゼー」と僕は言う。
「もう、いきなり発進させないでよね。びっくりしたじゃない」
うコトカは言う。

とにかく車は進み始めたのだ。どこかわからないけど物事は前に進んだ。方向性さえ決まってしまうえばあとはそのまま進んでいけばいいのだ。それにこのものすごいスピードで進む車ならあつという間に部屋に着いてしまうだろう。そこまで行けばあとはなんとかなるだろうと僕は思う。僕の記憶の手がかりになるものがそこにはあるだろうし、とにかく一人になって考えてみたい。もう少し落ち着きを取り戻さなくてはいけない。

海からはもうずいぶん水平線から離れた太陽が輝いている。どこかの海なのかわからないけど、海は穏やかに大きな波を重ねるように断崖に打ち付けている。透明に澄んだブルーの海はこんなときでも僕の心にはとても美しく映る。それは何かを愛撫し、そして慰めてくれているようだ。反対側を見ても果てしない砂漠しかない。草木一本も見当たらないし、生物がいるような気配すらない。フロントガラスには激しい雨がぶち当たっている。

激しい雨が????????????????????????????????????

雲ひとつないのに????????????????????????????????

なんじゃこりゃ????????????????????????????????

僕はフロントガラスをよく見る、そこには雨ではないものがぶち当たっていることがわかる。

「オイ、コトカ。これって雨じゃないよな？」

「ああ、これね。これは砂よ。星の砂って言うの。」

車はだんだんとスピードが落ちてゆく。そしてゆっくりと止まる。

「なんで？砂が降ってくるんだ？はつきり言って、ストレートに言って、これ以上ないぐらいものすごく真っ直ぐに言って、オレ様にはわけがわからねえ。頭がイカレちまったとしか言いようがない。ここでは空から砂が降るのか？雲ひとつないのに？雲があるのなら百歩譲ってそういうこともあるだろうと言ってやってもいい。この状況ではしようがない。オレ様も腹を決めよう。でも何で雲ひとつないのに砂が降ってくるんだよ？」

「私に何でも聞かないで。私はコンピューターじゃないのよ。自分で調べたらいいじゃない。ケータイ持ってるでしょ？」

「持ってるけど？」と僕は言う。

「ケータイに聞けば？」

「ケータイに聞いてどうするんだよ？アホかおまえは？ブウブウで取り返しのつかないぐらいのアホか？」

「だからケータイに聞けばいいって言ってるじゃないの？」

「だからケータイに聞いてどうすんだって言ってるじゃないか？」

「もう、わかんない人ね、バカ！ケータイに話しかければいいのよ。」

の声が聞こえる。

「違う、これは、違うぞ。これは何かの間違いだろ？そうだろ？フアンキー・モンキー・ベイバー？セニヨリータ？どうなってんだ？」

「だから最初からまたあなたにこの世界のことを説明するのはうんざりだって言ったじゃない？とにかくここはそうゆう世界なの。それに私はコトカっていう名前があるの」

「そうゆう世界って、どうゆう世界だよ？砂が空から振ってきたり、ケータイが喋ったりする世界ってことか？コトカ、ことか？オイ、コンドウ、向かって来い！」

「何よ？そのコンドウ、向かって来いって？」

「バカがああああ、コンドーム買って来い、だあああああああああ、オレ様の頭はイカレしまったあああああああああああああ。この豚、豚、ブタああああ、おまえのせいじゃないのか」

「だからカエルが記憶をなくしたからこうゆうことになってる、って言ってるじゃないの！」

「オーケー、セニヨ、じゃなかった、コトカちゃん。はつきり言う。この際だから、ここだけははつきりさせておこう。いいか？これだけは言っておくぞ」

「もう、わかったから、何？」

「オレ様はどこかで記憶をなくしてしまったかもしれない。それはオレ様にとってはものすごおおおおく、大変なことだ。コトカちゃん

んには上手く伝わらないかもしれないけどオレ様はすごくパニックになっている。それは認めよう。認めないと話が先に進まない。とにかくそれも、ものすごおおおおく、このオレ様にとっては大変なことだ。しかし、それを横に置いてみても、本当は横に置きたくないぐらい深刻なトラブルなわけなんだが、横に置いておくとしてもだ！」

僕はここで一度言葉を止める。そして深呼吸する。

「オレ様にはたとえ記憶が戻ってもこの世界のこととはわけがわかんねえような気がする」

「そうかもね」

「人が真剣に話をしてるのに『そうかもね』はないだろお！このブタがあああ、オレ様はな、オレ様はな、何度も、もう何度も言うてるけど、疲れているんだ。疲れるときぐらいあるさ『人間だもの』」
「バイ・相田みつお。とにかく部屋に行くぞ。それしか道はない」僕はそう言うけど、だんだんと心配になってくる。部屋に行ったらとしても全然自分が誰かわからなかったらどうしよう、と僕は思う。

「だから、さっさと行こうって言うてるじゃない？」

僕はコトカの顔を見る。相変わらずブサイクだ。こんなにブサイクなんだったらもう先祖を振りかえっても何万年もブサイクの血族なのかもしれない。もうこんなブサイクとは話したくないと改めて思う。

「オーケー、コトカ。とにかく行くぞ。車動かすからな」

僕はそう言っつて手形に意識を集中させる。今度はゆっくりと車を発進させることができる。少しずつだけど僕はこの世界に慣れようとしている。とにかく星の砂とやらが降るうが、ケータイが喋るうが、思考で進む車だるうが、進むしかないのだ、と僕は自分に言い聞かせる。

僕は運転に意識を集中させる。どのくらいまでこの車はスピードが出るのかはわからないけど、とにかく僕の思考が働く限り全速力で車を動かす。でもどこまで行っても風景は全く変わらない。海と砂漠が延々と続くだけだ。車の中は静まりかえっていて、車の車体に細かい砂が当たる断続的な音が木霊する。僕はどうなっているんだ？とコトカに聞きたくなる。どこまで行けば部屋に着くのだろう？そう聞いてみたくなる。でもそんなことを言い始めたらまた話がややこしくなってしまうかもしれない。とにかく部屋に着かないことには話が進まないのだ。それがどれだけの距離であろうと部屋があることは確かなのだ。とにかく走り続けよう、と僕は思う。

コトカも一言も喋らず僕とコトカは無言のまま車が移動している風景を見ている。かなり長い時間、10分か、20分ぐらいそのまま進んでみても一向に景色は変わらない。海と砂漠だ。僕はまたコトカに質問をしてみようかな、と思い始める。いや、ダメだ、とその度に思い直す。とにかく、進むのだ。

でもどんなに進んでも、進んでも、何もかわらない。一体どうなっているんだ？とまた疑問が湧き上がってくる。コトカは半分寝ているかのように表情がぼんやりとしてくる。オイ、オイ、僕に運転させておいてそれはひどいんじゃないか？と思い始める。それでも僕はじっと黙って運転に意識を集中させる。

まっすぐ前を見つめて……地平線と水平線か……
……どこかでこんな景色を見たことがあるような気が
してくる……と、まずい、僕までだん
だんと眠くなってきたじゃないか？……でも、
コトカと喋ると……なあ、……まず
い、眠い……。

「オイ、てめえ、オレ様に運転させておいて寝てんじゃねーよ」と
僕は言う。

それでもコトカは眠ったままだ。

「オイ、このアラレちゃんヤロウ、寝てんじゃねえって言うてるじ
やねえか。オレ様はな、運転してるんだぞ、オレ様が眠ると大変な
ことになるんだぞ」

起きない。

「オイ、ブタ、寝てる時も強烈にブサイクの豚、起きろ！」

まだ起きない。

「ブタあああああ、起きろって言うてんじゃねえか！」

「何よ？何なの？もう着いた？」

「まだ着かねえよ、一体どうなってるんだ？それに眠いんだ、疲れてるんだ。何か音楽でも聞こうぜ。このままじゃ焼き豚になるどころか、骨さえも残らなくなっちまう」

「ケータイ、ケータイ」と面倒くさそうにコトカは言うともた目を閉じて眠ってしまう。

僕は車の運転をしながら考えをまとめようとする。「ここはどこだ？僕は誰だ？それに何時代だ？」

ひとまずそうゆうわからないことは考えてもしかたがない。この世界では何でもケータイで動くのだろうか？ケータイはドラえもののポケットのようなものだろうか？

「ハイ、タケコプター！」と僕はひとりごとを言う。そう言ったつもりが、

「ハアあああああああ、タアアケエエコプウウタアアアアアアアアア」と僕の発した声は伸びてゆく？コトカは相変わらず眠っている。

一体どうなっているんだろう？

「マツタク、ドゥナツテ、イルンダアアアアアアアアアア」とまた声が伸びてゆく。今のところは、それは考えないことにしよう、と僕は思う。

僕はフロントガラスに注意を払いながらケータイを操作してみる。

何か手がかりがあるかもしれない。それにコトカはケータイで音楽を聴くのと言った。ということはこの中にはまだ隠れた機能があるはずなのだ。僕はケータイを操作し始める。そしてもう一度パスポートを開いてみる。

名前 石川 カエル

住所 0号室

血族 純日本人

とさつきと同じ画面が出てくる。

おそらく僕の名前はカエルというのだろう。試しに写真というところをクリックすると僕の顔写真が画面に映る。これは僕だ、と僕は思う。自分の顔はちゃんと覚えている。でも他のことは全く記憶がない。血族が日本なのは問題ないとしても住所が0号室とはどうゆうことなんだろう？どこかのアパートかマンションの住所なのだろうか？それにしても……………と僕は思う。

この隣で寝ているコトカという女の子のことは全く覚えていない。そういえば僕は左手首にブレスレットをしている。これは何の意味があるのだろうか？コトカはブレスレットについて何か知っているのだろうか？でも趣味の悪いブレスレットだな、と僕は思う。僕はブレスレットを外して車のダッシュボードの中に入れる。

「ビートルズの赤版と青版でございます。これは教科書に指定されていますので、どのケータイでも初期設定から聞くことができます」

「とりあえず、それでいいや、オレ様はビートルズ聴きながら育ってきたようなもんだからな」

「かしこまりました」

ケータイがそう言うのと車の中にビートルズの音楽が流れ始める。僕は少し意識がまともになったような気がする。僕が大きく深呼吸すると運転するのにもリラックスして身体の余分な力が抜けたような気がする。僕はしばらくビートルズに耳を澄まして、海と砂漠の間を進んでゆく。

コトカはまるで私は生きることには一欠けらの苦悩も持っていない、というようなバカみたいな顔をして運転席の隣で眠り続けている。どうやったらこんなにバカみたいな顔ができるのだろうと不思議に思ってしまうほどだ。

それにしても、この道は本当にどこかに繋がっているのだろうか？と思い始める。いくら進んでみても、おそらくは僕が運転に慣れてくればくるほど車のスピードは上がっているはずなのに、風景はちっとも変わらない。もうビートルズのアルバムを二枚とも聴いてしまつて、二回目の青版のアルバムにさしかかっているのに何も見えてこない。

「ナッシング・ゴナ・チェンジ・マイ・ワールド」と僕は音楽に合わせて口ずさむ。でも本当に歌詞の通り何も世界は変わらない。これはいい加減飽きてきた。

「オイ、ケータイ」と僕はケータイを呼び出す。

「ハイ、カエル様、どういたしましたか？」

「この道はどこまで続いているんだ？いつになったら町に着くんだけ？」

「申し訳ございませんが、私どものほうではそうゆうことは、ちょっと……わかりかねます」

「まあ、そうかもしれないな」と僕は答える。カーナビでもあれば良かったのかもしれない。

「そういえばさ、カーナビってこの車に付いてないの？」

「カエル様がお望みでしたらそうゆう機能はご用意できますが……」

「え？なんだ？あるじゃん、早く言ってよ。さっそくカーナビを使

おう。オレ様の部屋まではあとどのくらいだ？」

「それはカエル様が何かを見つけないと到着しない、とカーナビ機能は申しておりますが・・・」とケータイが答える。

「何？何だつて？オレ様が何かを見つけないと到着しない？じゃあこのままずーっとこうやって走ってるのか？どこにも着かないのに？」

「申し上げにくいですが、そのようでございます」と遠慮がちにケータイが言う。

「ふざけんじゃねえぞ！このままビートルズ、って、ビートルズは素晴らしいが、このままビートルズ聴きながらどこにも着かないってことは死んでしまっつてこと？」

「そうゆう考え方もございますね」とケータイは言う。

何言つてんだ、ケータイの分際で！と僕は思う。このままどこにも着かない？つてことは・・・いや、あまりそうゆうことは考えたくない。こんな何もない真っ平な世界で死にたくはない。まさに何もないじゃないか？チェーン店の看板もない、山や川さえない、こんなところで死ぬわけにはいかない、と僕は思う。

「オイ、どこかにH M Vでもないので？ビートルズばかり聴いていてもしかたがない」

「ご来店ありがとうございます。こちらはH M Vでございます」と若い女の声でケータイが喋る。もういい加減驚くにも疲れてきた。

「とりあえずさつき車の中で聴いていたチェック・コリアの『リターン・トゥー・フォーエバー』が聞きたい」と僕は言う。

「ありがとうございます。またのご来店お待ちしております」とケイタイが言う。そして車内には音楽が流れ始める。僕はこの曲を聴くとなぜだかいつもリチャード・バツクの「かもめのジョナサン」を思い出してしまう。

その途端に僕の目に何かが映る。なんだ？あれは建物じゃないか？車はものすごい勢いで建物に向かって進んでいる。今まで目印がなかったからスピード感が麻痺していたみたいだ。あっという間に車はその建物の横に止まる。

海の絶壁の脇に建てられたその建物は大きさからして、そして雰囲気からしてラブホテルみたいに見える。でも看板もなければ入り口の案内板もない。でも見渡す限り、それしか建物らしきものは見当たらない。これはコトカに聞かないとわからない。

「オイ、コトカ。今度はちゃんと一回で起きてくれ。オレ様は疲れしているんだ。頼むから起きてくれ。どこかに着いたぞ」そう言って僕はコトカの身体を揺する。

「どうしたの？あ、もう着いたみたいね。ここよ、ここに住んでるの」

僕は車のドアを開けて外に出ようとする。途端にドアの隙間からものすごい熱風が流れ込んでくる。

「ダメ！ドアを開けちゃダメよ。車のまま中に入るの。そうしないと死んじゃうわよ」

「オーケー」と僕は素直に従う。とにかくもう少しなのだ。あともう少し我慢すれば落ち着いて考えることができる。部屋に帰ってじっくりと考えよう。

僕は車をゆつくりと動かしてラブホテルの入り口らしきところへ入ってゆく。すでにシャッターが閉まっているガレージもある。誰か先客がいるのだろう、と僕は思っ少し安心する。少なくともこの世界に僕とコトカだけということはないみたいだ。開いているガレージに車を入れると自動的にシャッターが閉まる。

「オーケー、長かった、とんでもなく長かった。が、しっかし、オレ様はついに辿り着いたみたいだな。いろいろと迷惑かけたかもしれないが、とにかく助かった」

「わかったから部屋に行かない？私も疲れてんのよね？」

僕は頷く。もう何も言いたくない。後は部屋に転がり込んでしばらく眠ろうと思う。頭がまともになってくるのを待ってから次のことを考えればいい。

コトカは車から降りると裏の扉を開けて階段を登ってゆく。僕も自分のケータイを持って車から降りる。「オイ、ちょっと待てよ」と開かれた扉に向かって言う。

「カエル様、カエル様」とケータイが話しかけてくる。

「なんだ？オレ様は今忙しいんだ。これから部屋に帰ってぐっすりと眠るんだ」

「この車はどういたしましたしょう？よろしければ私どものほうで処分させていただきますが？リサイクル料もバカにはなりませんしね？」

「そうだな、適当にやっとしてくれ」と僕は言いながら扉を潜り、階段を登る。あまりそんなことをじつくりと考えている場合じゃない。階段を登ったところにコトカが立っていて僕が階段を登ってゆくとコトカは左に折れる廊下を進んでゆく。僕もコトカについてゆく。ホテルの廊下は水族館の内部のように天井と右側の壁が大きな水槽になっている。そしてコトカは廊下に一つだけあるドアの前で立ち止まる。

「ここよ、私たちの部屋」とコトカは言う。

「オツケー、待ってましたぜ、アネゴ」と僕は言う。

「コトカ」とコトカは言う。

僕はそのドアを開く。

「ブタ小屋だ！このヤロウ。豚小屋みてえに散らかってるじゃねえか。オレ様は綺麗好きなんだよ！もう疲れてるって言うてるじゃないか？なんで次から次へと問題が発生するんだよ？どうして何もかもがまともじゃないんだ？とにかくオレ様はこんなところでは休めない。豚！お前ブタなんだから綺麗好きだろ？おまえ掃除しろ！」

「いいわよ別に、私が掃除しても。いつもカエルが掃除してたからね。たまには私がやってあげる」

「お？なんだよそれ？オレ様もなかなか気の利いたことやってるじゃねえか」

「ねえ？ねえ？ねえ？ねえ？カエル？ブレスレットどうしたの？さつきまで付けてたでしょ？」と急にコトカは真剣な顔をして言う。

「あ？あれか、趣味悪いから外しちゃった。そういえば車の、あ！いけね、車処分するとか言ってたな。ブレスレットがどうかしたのか？」

コトカは急にものすごく怒った顔をする。

「どうした？ブレスレットに何かあるのか？そんなものまた買えばいいじゃないか？」

コトカはものすごく怒った顔のままドアを開けて部屋の中に入っ
てゆく。

「バカ！カエルなんか、死んじゃえ！」そう捨てゼリフを残すとコトカはドアを閉めてしまふ。僕がドアを開けようとしても鍵がかかっている。

「おい？なんだよ？わけがわかんねえって言ってるじゃねえか」

鍵はかかったままだ。

「オーイ、コトカ、わけがわかんねえって言ってるじゃねえか。オレ様をどうするつもりだ？オレ様は疲れてんだぞ」

返事はない。僕はドアをノックしてみる。

「クラブにでも行ってくれば？部屋、掃除しておくから」とコトカ

の音がドアの向こうから聞こえる。あまり元気がない声だ。どうしたのだろう？

「なんだよ？クラブって何のことだ？」

「そのまま真っ直ぐ行けばいいのよ。あんたって人は一回死なないとわかんないじゃないの？」

僕は廊下を見てみる。そこには真っ直ぐな廊下が延々と続いている。外から見た感じではこんなにこの建物は大きくなかったはずだと思っほほどにその廊下は延々とどこまでも続いているように見える。

ぼんやりとした水族館の内部のようなトンネルを進んでゆくとしばらくしてガラスの部分が終わり、真っ暗な闇になる。その闇の壁の中にぼんやりと扉のようなものが見える。

僕はどう考えたところでその扉を開けるしかなさそうだなと思う。コトカが言ったのはこの方角だし、ほかに道はありそうにない。それにずーと一本道だったのだ。選ぶようがないじゃないか。

僕がクラブの重々しい扉を開いた途端に僕の耳にはものすごい音量のダンスミュージックが飛び込んでくる。そしてキラキラと何色も色が混じったような光が僕の目を刺す。僕はその中で繰り広げられていることを見たとたん心臓が止まってしまふかと思ったくらい驚いてしまふ。

そこでは耳を割ってしまいそうなくらいの音量でフェイスレスの「ゴッド・イズ・ア・DJ」が流れさまざまな色の光の下で人々は踊り狂い、セックスをしている。誰しもが裸で誰一人顔がない。

そして誰しもが裸のロボットのみたいに毛もなく皺ひとつない。はたしてこれが人間と呼べるようなものなかもよくわからない。まるでアニメーションの世界に飛び込んでしまったような錯覚に陥る。

そのアニメーションのようなロボットたちは実に人間らしく振舞っている。彼らの踊りを見てみると彼らが頭の中で何を考えているのがすぐにわかってしまいそうなほどだ。がっしりとして男のように見える人は一緒に踊っている女の子とやりたくてたまらないみたいだし、セクシーですらつとした身体をしたロボットのほうは男と合わせて踊りながらも頭の中では全く別のことを考えているように見える。がっちりと抱き合いながら踊って人達はゲイなのかもしれない。みんな気が狂ったように腰を動かし、そしてセックスをしている。

音楽の大音量にかき消されて彼らの発する音は全く聞こえないけど見ているだけで彼らの行為のなかにあらゆる音が含まれているのがわかる。ありとあらゆる音がそのとてつもなく大きな宇宙の中でいまにも破裂しそうに膨らんでいるのがわかる。それぐらいにあらゆる音がそこには含まれている。

そしてそこにはさまざまな匂いが立ち込めている。まるで匂いと記憶が連動しているみたいに僕はこれがかかなりおぞましい光景であることに気がつく。

そんな光景を僕は扉の近くに立ったまま呆然と眺めている。一体ここはどこなのだろうと改めて自分に聞いている。でもそこに答えはない。僕の記憶はすべてかき消されてしまったかのように真っ白なのだ。

僕はひとまずそのカオスのような光景を潜り抜けてクラブの奥に

してくれたみたいで小さくしつかりと頷くと僕のためにビールをジョッキに注いでくれる。でもその瞬間僕は自分が全く金を持っていないことに気がつく。

しまった！と僕は思う。コトカに金のことを聞いておくべきだったことを後悔する。僕は必ずどこかに金を持っていたはずだ。こんな巨大なクラブの特別室のようなところに泊まっていて金をもっていないはずはない。

バーテンダーは僕が取り乱しているのにも気がつかずにさっさと僕の目の前のカウンターにビールを置く。

僕はなんとかボディランゲージのようなことをやってお金がないんだということを表現しようとする。ポケットを引っ張って中が何も入っていないことを相手の目の辺りの皮膚に見せる。そうするとバーテンダーはすべてを初めからわかっていたかのようにまた同じように小さく頷くと奥の方に消えてしまう。

「アー・ユー・オーケー？」

と後ろから男の声で話しかけられる。僕が振り返るとそこにはちやんと顔があり服を着ている老人がビールジョッキを片手に立っている。すでに白くなり始めた髪は長く腰の辺りまで伸び、体中にキラキラとしたシルバーのアクセサリーを付けている。老人はよれよれのTシャツを着て、ダークグレーのラフな短パンを履いている。そのTシャツはかなりの年代物であるらしく胸にはプリントで

WAR IS BAD

FOR PEOPLE

GOOD FOR

BUSINESS

HIROSHIMA 1945 2007

と書かれている。でもその文字もかなり汚れていてもう少しで読めなくなるぐらい擦り切れている。

「アー・ユー・オーケー？」と老人が言う。年の割には声も太くタフなイメージだ。

「イエス・アイム・オーケー」と反射的に僕は答える。とにかく話をすることが大事なのだ。僕は何か言わなくてはと思う。

「問題ないぜ、マイト。まるつきりない。ノープロブレムってやつさ。そこでさ、オレってさ、金、いきなり金、マネー、いわゆるカネの話で、ワリンだけどさ、いや、ホント、チョーもうしわけないなって思うんだけどさ、オレ、このオレ様っていうのは金、カネ持ってないわけよ、わかる、そういうのって？アンダースタンド？」と僕は英語で言う。

でも自分で言うておいてものすごいことを年上に向かって言うていることに気がつく。ふつうこうゆうときには敬語を使うべきなのだ。さらになぜかわからないけど僕が何かを言おうとすると、ラッブみたいになってしまう。でも英語には敬語というものが存在しないはずだ、と僕は思う。それならそれでいいのかな？

「でも、あんたケータイ持ってるだろ？」と老人は言ってガハガハ

と笑う。典型的な田舎の年寄りといった感じでいい人ではあるみたいだ。「ケータイ持っているだけで金は自動的に引き落とされるじゃないか？」

そうなのか、そんな便利なシステムなんだ、と僕は思う。とりあえず、こうやってビールが僕の目の前に運ばれてきたということは、金のことは一旦考えなくてもいいわけだ。

「いやー、マイト。全くまいったぜ、一体何がどうなっているのか全然わからないんだ。あなたに会えたオレ様ってラッキーだよな、もう、かなり、チョーやばい感じだったんだ。もう、本当にかなり参ったね。何がどうなっているんだ？マイト？」

相変わらず僕は英語を使っている、どこで僕は英語なんて話せるようになったのだろう、と再び思う。

「いやあ、ワシもこの詳しいことはわからのじゃ。それにしてもこの音楽はうるさいのお」と老人は言う。確かにそう言われるのもすごい音量でクラブ中に音楽が木霊しているのがわかる。

「?」

なんだ？と僕は思う。改めてクラブの中を見回すとさっきまでみんな肌だけロボットみたいだった人々はどこにもいなくなっている。ふつうに人々はクラブの音楽の中で踊り、あるものは座って酒を飲み、あるものは煙草を吸いながら会話をしている。裸のロボットはいなくなっている。

マッタク

ドーナツテ

イルンダ？と僕は思う。

「なんじゃ？どこか具合でも悪いのか？」と老人は言う。

「いや、マイト、ノー・ウォーリーズ、マイト。ちょっと眩暈がしただけだ、ちよつと飲みすぎたのかもしれない」と僕はとにかく誤魔化すことにする。記憶がなくて頭がおかしい奴だと思われたら話がややこしくなる。僕はとにかくこの世界のことを誰かに聞かなくてはいけない。この老人はかなり人がよさそうだなと僕は思う。僕はビールのグラスを口元に運ぶ。クラブの中はかなり大きなスペースであるらしく、カジノのコーナーもあれば、レストラン、教会の内部のような大きなダンスフロア。大きな野球場と言っても過言ではないような広さだ。上を見上げると天井はすべてガラス張りになっている。あのラブホテルみたいな建物の中にどうしてこんな大きな空間があるのだろうかと思議に思う。

「そうか、とここであなたはどこから来た？」

「ブツ」と僕はあやうく噴出しそうになる。

「え？マイト？何だつて？このオレ様がどこから来たかつて？そんなことも知らねえのかよ。ヨウ、レッスン、マイト、チエケラウト、オレ様は日本から来たんだ。純粋なピカピカの日本人だ」

「なんじゃ？あなたは日本人か？ワシは今まで純粋な日本人には会ったことはなかったのう」

「なんだよ？マイト？それは、ないぜ。日本人なんて世界中どこに

いつてもいる。まさにうようよ、いる。どこに行っても会えるだろ？それに最悪日本に行けば会えるんじゃないか？」

「日本なんてものはもう存在せんじゃないか？それにもう国境というものさえない。あんたいつの話しておるんじゃない？」

「オーケー、マイト、オレは歴史の話が好きなんだ。でもいつも学校のテストではビリかその前ぐらいだった。でも歴史が好きなんだ」と僕は答える。

何が、一体、どうなって、いるんだ、と僕は再び思う。日本はもう存在しない？それに国というものさえこの世界にはないのだろうか？

どうゆうことだ？僕は日本人じゃないか？コトカは日本人じゃないのだろうか？

それに……………ダメだ、考えてもわからない。

老人は少し戸惑ったような表情で僕のことを見ている。まずい、ここは頭がおかしい男だと思われぬように何か話しかけなくては、と思う。

「ヨウ、マイト、それよりもさ、オレの名前はカエルって言うんだ」と僕はとりあえず手を差し伸べる。

「ワシはジェフじゃよ。アメリカとオーストラリアの血族じゃ」と老人は笑って僕の握手を受け取ってくれる。

それですます僕は混乱しそうになる。ここはどこなんだ？とりあえず外国と考えたほうがいいのだろうか？そう思ってたあたりを見回すと、辺りには白人や黒人、それにアジア、さまざまな国の人々が入り混じっていることがわかる。

「ヨウ、マイト、ここってもしかして、ものすごくやばいところじゃないよな？お化けとか、へんな生物とかいないよな？って、いうかさ、オレ様って昨日酒飲んでここに来ちまってさ、覚えてないんだよね」と僕は言う。

「そりゃあ、大変じゃったのう。でも元々ワシらはコンピューターの中の世界に住んでおるじゃろ？結局はその中のどこか、ということになるな。言わんでもわかっておるとは思うがの？」

「ハア？何だよ？マイト？わけがわかんねえぜ、マイト。それはちよつと、ノー・プロブレムってわけにはいかないぜ？」

僕は自分でもわかるはつきりとわかるぐらい驚いた顔をして老人を見る。老人はますますこの若者は頭がイカれているんだろう、というような顔をしている。でも頭がイカれているのはそっちのほうじゃないか？と僕は言いたくなる。この世界がコンピューターの中だって？それはどうゆうことだ？じゃあ、どうして今僕はここに存在しているのだろう？

「ちよつと、待ってくれ。ストレートに言って、わけがわかんねえ、オレ様は酒を飲みすぎたらしい。実はオレ様ってアルコール依存症とうつ病なんだ。でも早く社会に適合するようにがんばっている、つもりだ。でもときどき記憶がスポツと抜けちまうことがある。どうしてかは医者もわからない、って言ってた。そこで、とにかくオ

レ様は歴史が好きなんだ。他人から歴史の話を聞いているのが一番のオレ様の病気の回復の方法だつて言われている」

「なんか、あんた変わつとるみたいじゃな。ワシも同じようなもんじゃ」

そう言つて、ジェフは「ガハハ」と笑う。

僕もここは合わせて笑つたほうがいいな、と思つて別におかしくもないけど大声でジェフと一緒に笑う。

「ハアー、実はワシも少し暇をしておつたところじゃよ。ちようど話し相手がいて良かった。ワシも歴史は好きじゃし、ワシみたいな年寄りの話は誰も聞きたがらんからの」

「マイト、マイト、マイト、オレ様つて、チヨー、チヨー、ヒマしてたところなんだ。実はさ、オレ様つて暇の達人なんだよね。一刀流免許皆伝ぐらいの暇の達人なんだ。ジェフに会えたオレ様つて、チヨー、ラッキーだよ。ジェフ、マイト、ナイス・トウ・ミート・ユー」と言つて僕は自分のビールグラスを差し出す。

ジェフは自分のグラスを差し出し、僕のグラスと合わせる。

「チアーズ、マイト！」

僕とジェフは大きな声で言う。

第二部

6

クラブの中では音楽が変わってインフェクティッド・マッシュルームの「アーム・ザ・スーパーバイザー」がかかっている。

ジェフは手に持ったビールをぐいぐいと飲み始めるとそのまま一気にグラスを空にしてしまう。

「イヨー、大統領！」と僕は言う。

ジェフは「ゲエツ」とゲップをする。まるで口の中からどす黒い塊のようなものを吐き出したような音がする。

それでもとにかく、ここは話を聞かなくてはと思う。そういえばさっきまであんなに身体が疲れていたような気がしていたのにビールを飲み始めたせいか気分が良くなってきている。

「ヨウ、ジェフさあ、あ、もう一杯ビール飲まない？もちろんオレ様のおごりだせ、マイト！」

「ああ、もちろんだあ」とジェフは答える。

僕がカウンターのところに行くところにはボーイらしいきちんと

した黒の制服をきた男が立っている。

僕が「トウ・ビヤ・プリーズ！」と指でピースサインを作りながら言うと、男は新しいビールを二つ運んでくる。

僕がジェフのそばに近づくとジェフは僕の方を背にして立っている。僕はさらに近づいて「ヘイ、ジェフ？」と呼びかける。ジェフはこちらを振り向く。

「ああ、カエル君、悪いね」と言ってジェフは僕の運んできたビールを受け取る。

ジェフのティシャツには「LIFE ALWAYS HAS TROUBLE」
「W O S I D E S」と書いてある。僕はどこかでこの言葉に聞き覚えがあるような気がする。でもわからない。まだ記憶が混濁している。

「そしたら、カエル君、歴史の話じゃったな？」

「ああ、ジェフ、オレ様って歴史養分みたいなものが必要らしいんだ。いや、これは医者によれば、だよ」とにかく僕はジェフの話を聞くことにする。余計なことを言ってまた話がややこしくならぬように僕はティシャツのことは聞かないことにする。

「そしたらどのくらい前の話じゃ？インカ帝国とか、メソポタミア文明とかかな？」

「いや、いや、もつともつと先だ」

「なんじゃ、世界大戦とかか？」

「いや、ジェフ、おいしいところ突くなあ、でも、もうほんの少し先だ」

「なんじゃ？徳川幕府ぐらいかの？」

「ジェフ、それじゃあ戻ってるじゃねえか？違う、もっと先だよ」

「そしたら21世紀初期ごろあたりの話かな？」

「ビンゴ！ジェフってビンゴの天才なんじゃない？ちょうどそのあたりの話にオレ様は飢えているんだ」

「そしたら精神戦争ぐらいの話になるのかのー？」

精神戦争？と僕は思う。そんな言葉は聞いたことがない。たぶんその辺の記憶がずっぽりと抜け落ちているのだろう。

「ビンゴ！まさにビンゴ！これ以上ないぐらいビンゴ！やっぱりジェフってビンゴの天才みたいだね」

「そうかの？そんなに人から褒められたことは久しぶりじゃな」

「オレ達ってさ、いいコンビになるぜ、きっと、オレ様は暇の達人だろ。ジェフはビンゴの天才だもんな。どう？そう思わない？」

「どづかのー？」

「絶対、大丈夫だって、絶対すっげえー、コンビになるぜ！なんなら俺たちで漫才のコンビ組んでもいいぐらいだ。オレ達はそのぐら

い抜群のコンビになると思うぜ」

「そうかもしれんのおー」とジェフはビールを飲みながら答える。

「ところでさ、ジェフって煙草吸うの？」

「ワシか？ワシは若い頃は吸っておったが、もうこんな歳じゃろ？もう随分前に辞めてしもうた」

「やっぱり！オレ様、やっぱりそうだと思っただよな？やっぱりジェフって、チヨー、イカシてるよ。めっちゃ『洪チン・ブルース』って感じたもんね。実はさ、オレ様も煙草吸わないんだ！どうだ！びっくりだろ！俺たちすんげえコンビになるぜ。まさに歴史に名を残すかもな」

「そうかのー？」とジェフは答える。

「あ、そのうちさ、オレ様の部屋、ちょっとまだ汚いんだけどさ、今綺麗に掃除してる豚が一匹いるんだけどさ、オレ様の部屋遊びに来いよー」

「ワシが？いや、それは急に押しかけるのは申し訳ないのお」

「そつ固いこと言うなよー、ジェフ、オレ様とジェフの仲じゃないか？」

「まあ、ワシもいつも一人でビール飲んでおつてもしょうがない。そのうち一度ぐらいはお邪魔させてもらうかもしれん」

「極上のおもてなし、ってやつでお迎えするぜ。なんならマジで、

ファツキン・リモ！要するにリムジンぐらい呼んでやってもいいんだぜ？」

「いや、それは、いくらなんでも……」

「何、言っただ！固いこと言うな！マジで言っただぜ、オレ様は」

「そのうちお伺いするよ。ところで、歴史の話はいいの？」

「あ、そうだった、そう、そうなんだよね。すっかり忘れてた。さすがジエフ。もうコンビの息もバツチリじゃねえか？」

「そうかのー？」とジエフは少し困ったような顔をしている。

「まあ、いいや、そうだ！もう一発、ビール飲まない？もちろん、オレ様のおごりだぜ」

「まあ、ワシは別にかまわんが……」

僕は急いででカウンターに行きビールを二つ持ってくる。

「そう、そしたら精神戦争の話じゃったな？」

「さすがビンゴの天才だな。その変の話が聞きたいんだ」

そしてジャフは話し始める。

「えーと、んー、そうじゃのお、そしたら時は21世紀。ノストラダムスの予言もコンピューターの2000年問題も何とか乗り越え

た人類であったが、そこから本当の問題じゃった。人々の精神がどんどん病み始めたんじゃない。あまりにも情報化社会されすぎたために多くの若者が自分を見失ってしまった。社会のなかにはあまりにも多くの作られた選択がゴミのように舞っていた。でも若者はそのどれも選べなくなっていたんじゃない。あまりに情報のスピードが速くなりすぎて全く自分の頭で物事を考えるということが出来なくなっていたんじゃない。あるひとつの情報のことを考えている間に次の情報が長い廊下にズラツと列を作って待っている。これではなかなかひとつのことを落ち着いてじっくりと考えることはできない。いや、まさに考えている暇がない、といったほうがいいのかもしいの。次第に人々はあらゆる物質に対してか心を開けなくなっていた。例えば、インターネットとかテレビとか、ゲーム、漫画、あらゆる物質の中にしか人の心というものは存在しなくなってしまった。

そして地球というのはますます住みにくくなっていった。異常気象や環境破壊、未知なるウイルス。そういったものによってな。とにかくでもそれは止められないことだった。それは宇宙の流れを止めようとするようなものじゃったのかもしれない。とにかく地球はほとんど人が住むには過酷なところになっていったんじゃない。そして各先進国で同じような精神病がはやり始めた。引きこもりや、集団自殺、それに異常ともいえるような犯罪。朝のニュースから新しい死のスタイルが報じられ、世界の終わりを告げる事件が多発。地球はもう終わりに向かっていた。このまま行けばそう遠くない年月で地球は全く人々が住めなくなるだろうと誰しもが感じ始めていた。そこへ一人の天才科学者が作ったコンピューターが発売された」

「天才科学者？」と僕は言う。

「彼が作ったコンピューターは『ブラック・サン』という名前じゃ

った。そしてそれはまさにその名の通り黒い太陽じゃった。彼は人々の心がコンピューターの中に入っているのなら、コンピューターの世界を本当の世界にすればいい、と考えたんじゃな。そんなことをどうやってやるのかはワシにはわからんが、とにかくそうゆうことじゃよ。観念の逆転、とえばいいのかの？ワシはずっと船乗りじゃったからあんまり難しいことはよく知らんのじゃが……」

「気にすんなって、オレ様もバカで有名だからな。どうやらバカコンピで決まりだな。いや、でもジェフがバカって意味じゃないよ。俺たちの仲はそのぐらいバツグンだったことさ」

「や？カエル君、ビールがもうないじゃないか？今度はワシの番じゃな？さっきから何回も悪いからの」

「マイト、ジェフ！何言ってるんだって言うてないか？そんなのオレ様のおごりで決まりだせ」

「いや、ここはカエル君、友情というものは時には素直に気持ちを受け取ることも大事ですぞ」とジェフは言う。うん、そうかもしれない、と僕は思う。持ちつ持たれつというバランスがそこには必要なのかもしれない。

「オーケー、じゃあ、その次はまたオレ様の番だな？」

そう言うところジェフはカウンターのところにビールを取りに行く。

僕は頭のなかで今聞いた内容を整理してみる。

とにかくそれまでであった世界というものが住みにくくなってきて、コンピュターの中に人々は住み始めた、ということなのだろうか

？でもまだイマイチ仕組みがよくわからない。僕の身体はまるで生きてるように思える。どうやったらそんなことが出来るのだろう？観念の逆転？と僕は思う。観念の逆転とはなんだ？全くわけがわからない。そもそも観念というものは、観念だから、どうやってそんなものを逆転させるのだろう？

「待たせたかの？ほら、新しいビールじゃ」

「オウ、ジェフ。ありがとう。どうやらもう一度乾杯だな？」

「乾杯って、日本語では何て言うんだ？」とジェフが僕に聞く。

「カンパイって言うんだ」と僕は乾杯の部分を日本語で言う。

「そうか、そしたらカアアンバアイ」とジェフは言いながら僕とグラスを合わせる。

それにしてもこれでビール何杯目だったかな？と僕は思い始める。話を聞いているのはいいけど僕はそんなに酒に強いほうではないのだ。ジェフはビールが好きみたいでもう何杯目なのかもわからないけど、とてもうまそうにビールを飲む。そのままCMに使えようなほど、気持ちのいい飲みっぷりだ。

「そう、それから、どうなったんだ？新しいコンピューターが発売されてから？何が一体戦争なんだ？でも結局オレ達はコンピューターの中に住むことになったわけだよな？」と僕は聞く。

「そう、でも精神戦争のことは誰も詳しい内容を知らんのじゃ。ただそうゆうことがあって、我々はコンピューターの中に住むことになった、としかかな」

「なんだよ、それ？全然わけがわかんねーよ。みんなこうして生きているのにそんな矛盾を気にしないのか？」

「ワシらはもうずっとここに住んでおるんじや。だからワシらにはこれが当たり前なんじやよ。理屈やシステムがワシらにはわからなくてももうここにるのが当然なんじや。ハードウェアのコンピュータがどのようにプログラムされていようとそれがきちんと機能さえすればワシらにはどうでもいいことなんじや。だからもうそんなことを考える人もこの時代になればほとんどいないんじや。それにコンピュータの中で住むことを拒んだ人々たちがどうなったのか、それはこちら側の世界では知りようがない。今の我々にとつてそれは鏡の向こう側のように全く別の世界なんじや」そう言うとき、ジェフはまたグイツとビールを空にしてしまう。僕のジョッキにはまだ満杯に近いぐらいのビールが残っている。今度は僕の番だ、と思う。

「ジェフ、今度はオレ様の番だな」

「や？でもカエル君はまだ飲んでおらんじやないか？」

僕は一気に自分のグラスを飲み干す。僕はカウンターに向かいながら、こんな酒の飲み方は高校生みたいじゃないか？と思う。というのもジェフはすぐ酒が強いみたいだからだ。これはなかなか厳しいコンビになるかもしれないと思い始めてくる。

気がつくとも僕はロデオに乗った後のようにものすごく自分が酔っ払っていることに気がつく。なんだか足元もフラフラしている。今日は長期戦にはかなり無理があるようだ。

僕がビールをジェフに持ってゆくとジェフはあつという間にビールを飲んでしまう。僕の目の前には零れ落ちそうなくらい満杯のビールのグラスがふたつも並んでいる。僕はなんとかジェフに追いつかなくてとは無理にビールを飲むけど、飲んでも、飲んでもジェフのペースは変わらない。

次第に本当に何の話をしているのか全くわからなくなってくる。もうダメだ。これが限界だ、と僕は思う。

「ヨウ、ところでさ、ジェフ」と僕はジェフが喋り続けているのを遮ってそう言う。「こう言うのも、チヨ一申し訳ないんだけどさ。オレ様ってあまり酒飲んじゃダメなんだよね。実は医者から止められているんだ。いや、ほどほどならいいんだけど、これ以上はもう飲めない」

「ありや？そうじゃったな？いかん、いかん、忘れておった。ついワシも若い人と出会えて喋りすぎたようじゃな？」

「いや、ジェフ、そんなことはないぜ。全く、ノーウオーリーズだと僕は胸の辺りに気持ち悪いものを感じながらそう言う。

「オレ様は、これから豚の飼育をしなくてはいけない。そろそろ時間なんだ。でもオレ達のコンビのことは忘れないでくれよ」と僕は早くトイレに行かなくては、と思いながら言う。

「ああ、ワシは毎日このクラブに顔を出すからの。またそのうち会えると思う」

「オーケー、グッドラック、マイト。ビンゴの天才、ジェフ」

僕はジェフともう一度握手して別れる。早く部屋に戻らなくては、と僕は思う。とにかくトイレだ。これは今この瞬間には僕の一番の問題なのだ。これは一刻を争う問題なのだ。記憶がどうのこうのと言っている場合じゃない。とにかくトイレ、トイレだ。僕は記憶を辿り、巨大なクラブの中を自分の部屋に繋がる扉へと戻る。

部屋の扉を勢いよくあけようとするけど部屋の扉にはまだ鍵がかかっている。

「オーイ、コトカあ、緊急事態だ。早くここを開けてくれないともすごいことになる」と僕はドアをバンバンとノックしながら言う。

「オーイ、これはマジで言ってるんだぜ」僕はドアの前で何度も足踏みしながら言う。「聞こえてるんだろ？コトカ？オレ様マジでやばいんだ。記憶がまた全部なくなってもいいから、とにかくここを開けてくれ！」

そうすると音もなく扉が開く。僕はすぐにドアを開けてリビングを潜り、トイレのドアを開けようとする。

「ダメ！」とコトカが言う。

「なんだ？今オレ様はそれどころじゃないんだ。話をしている場合じゃないんだ」

「ダメって言ってるでしょ！」

「なんだよ？オレ様チヨーやばいんだ」

「今私がトイレ使ったところなの」とコト力は少し恥ずかしそうに言う。

「オレ様なあ、豚の匂いなんか気にしてる場合じゃないんだよ。それどころじゃないんだ」

「まだトイレに完全消臭機能がついているバージョンじゃないのよ。バージョンアップすればすぐに使えるけど?」

「する、する、なんでもする。ハイ、ケータイさんお願いね」と僕はいいながらトイレにかけこむ。

「オイ、死ぬかと思つたぞ」と僕はトイレから出てきて言う。

あれっ?と僕は同時に思う。

「どうしてオレ様はトイレの場所がすぐわかつたんだろう?」

「だって、前に住んでたからじゃない?」

「ここに?こんな刑務所みたいに家具もない部屋に?一体どうやって掃除したらこゆうふうになるんだよ。ほとんど部屋にあったもの捨てただけじゃないか」

「違うわよ。もっと前は部屋らしかつたわよ。カエルがケータイを初期化したからこゆうふうことになってるんでしょ?」

「オレ様は知らねーって言ってるじゃないか?それよりも布団ひいてくれ。オレ様は酔っ払って気持ち悪いんだ」

「自分の部屋に行つて寝ればいいじゃない。布団だけは残つてるわよ」

僕はまだいろいろとコトカと話をしなくてはいけないような気がするけど、とにかく今は眠りたいという気持ちのほうが強い。

「こつちだったよな。オレ様の部屋？」

「そう、そつちよ」とコトカは言う。

部屋の中はリビングを挟んで僕とコトカの部屋がひとつずつある。そしてトイレとシャワーが玄関の近くにある。家具らしい家具もないので本当に広い刑務所みたいだ。僕は自分の部屋に行くとなぐに布団に入る。なぜだかそこには懐かしい匂いがする。これは僕のものなのだろうか？と思う。

僕は眠ろうとする意識のなかで明日目が覚めたらこんな悪夢から逃れて全く別の場所にいる自分のことを考える。それはもっと、なんていうか、まともな場所と時間だ。僕はそこへ辿り着くのだろうか？僕は薄れてゆく意識のなかでそう願う。

でもやっぱり僕は目覚めてもカエルなのだ。

僕は昨日のカエルのまま目が覚める。というよりもカエルの記憶を持った僕が目覚めたといったほうがいいのかもしれない。

部屋の中を改めて見回すと大きな窓が1つあることに気がつく。そこには断崖から見える海が映っている。僕は目を覚まして自分が自分であることをもう一度確認する。そうだ、僕はカエルだ、と。そして自分がこの部屋に辿り着くまでの昨日の記憶を探ってみる。それはまるで一本のストーリーのようにちゃんと繋がっている。僕はいまこの部屋にいるということが確認できる記憶を僕は持っている。それにしてもひどい二日酔いだ。まだ頭がグラグラしている。これは僕の記憶がおかしいためでない。昨日ジェフとビールを飲みすぎたからだ。

僕はちゃんと記憶を持っている。それをもう一度確認してから僕は身体をゆっくりと起こす。部屋の中には家具と言つ家具がひとつもない。あ、そういえばケータイがあったな、と僕は思い出す。僕は布団の横に転がっているケータイを手に取ってみる。

「ビートルズが聞きたい」とケータイにつぶやく。

でも何も音は聞こえてこない。

「おい、ケータイ」

「おはようございます、カエル様。ごゆっくりお休みになられましたか？今日のご気分はいかがでしょう？」

「うん、はつきり言って朝から最悪だ。頭も痛いし、記憶もない。でもとにかくビートルズが聞きたいんだけど」

「カエル様、申し上げにくいのですが、カエル様のお部屋にはまだスピーカーがついていませんので、音源をお持ちでもお部屋の中で音楽を聴くことはできません。よろしければ、こちらで何かご紹介いたしましょうか？」

「ああ、それなら最高級のスピーカー頼むぜ！」と僕は言う。

「かしこまりました」

そう言うところからともなく部屋の壁中から音楽が聞こえてくる。まるでコンサートホールみたいだな、と僕は思う。でも一分もしないうちに部屋の壁を誰かが叩いている音が聞こえてくる。

「オイ！うるせえんだよ！」と物凄い音で壁を蹴る音が聞こえる。

なんだ？と僕は思う。また悪夢の始まりなのだろうか？

とりあえず僕はケータイの音楽を止める。そうすると部屋は一瞬にして静まりかえる。さつき壁を叩いたのは誰だったんだろう？男の声だったからコトカということはありえない。隣の住人なんているはずがない。ホテルの廊下には僕の住んでいるこの部屋のドアしかなかったのだ。どうなっているんだろう？

僕は起き上がってリビングへ行く。そこにはコトカが床に座っている。

「おはよう、カエル。良く眠れた？」

「なんだよ、よく眠れるわけねーじゃねえか。まだわけがわかんねーよ」

「うわ、すごい酒臭い。ちょっと、カエル飲みすぎたんじゃないの？」

「コンビの杯を交わしたからな。なかなかハードだった、って、オレ様はまだオレ様だよな？」

「何言ってるの？カエルじゃない？」

「はあー、と僕はため息をつく。朝起きた時からため息を付かなくてはいけない一日なんてろくな一日になりそうではない。それにこのわけのわからない世界の一日がまたやって来たというだけで、僕はなんだか気が重くなってしまふ。」

「それにしてもさ、さっき誰か壁叩いてたぞ、あれなんだ？」

「ああ、あれね。隣の住人じゃない？まだ部屋に防音プログラムをダウンロードしてなかったでしょ？」

「なんだ？それ？そんなものは付ければいいけど、隣の住人ってなんだ？昨日は隣に部屋なんかなかっただろ？」

「何言ってるの？あるに決まってるじゃない？私たちの住んでいるのは0号室でしょ？隣は7463号室でその隣は029856号室」

「なんだ？そんなもの昨日はなかっただろ？何の話だ？」

「だから私からはもういちいち説明しない、って昨日言ったでしょ？自分で外に出てみればいいじゃない」

僕は部屋の玄関の扉を開けて外に出てみる。

朝からこんなに驚いたことは生まれて初めてかもしれない、というぐらい僕はびっくりしてしまう。そこには巨大な町が一夜にして出来上がっているからだ。僕は空にも届きそうな高い高層マンションの一室の扉から出てくる。僕が振り向いて部屋のドアを見てみるとそこには「0号室」と小さなラベルに書いてある。隣を見てみるとコトカが言ったとおり、7463号室でその隣は029856号室になっている。延々と同じような作りのドアが廊下に並んでいる。昨日見た水族館の内部のような廊下はどこに消えてしまったのだろう？それにクラブはどこに消えてしまったのだろう？と僕は啞然としながら思う。マンションとマンションの間を凍えそうな風が通り抜けてゆく。僕はティシャツと短パンという格好なので皮膚がめくれそうなほどの寒さを感じる。あわてて僕は部屋の中に戻る。

「オイ、コトカ」

「これってどうなっているんだ？って言うんでしょ？もうこれはこうゆうことなんだかいいいじゃない」

「おまえなあ、『いいじゃない』で片付くような問題か、これが？もうオレ様はカエル君を卒業したい。今日は卒業式をしよう。朝からウキウキの気分でおレ様はカエル君を卒業する。卒業証明書のコピーは市役所に届けておいてくれ」

「朝から何バカみたいなこと言ってるの？」

「卒業式には一緒に蛍の光を歌おう。一応言っておくけど涙は流さなくてもいい。だいたい涙を流せるほどの思い出をオレ様は持っていない。そもそも記憶がないんだからな。オレ様の記憶はクール宅急便で届けてくれ」

「バカ！とにかく音楽が聞きたいんだつたら防音プログラムをダウンロードしなきゃダメよ。ここは安アパートで隣の人のいびきまで聞こえるぐらいなんだから」

「それじゃあ、ケータイ君よろしく頼む」と僕はケータイに言う。

それから僕はまだかなり二日酔いがひどいことを確認する。頭がガンガンする。昨日は何杯ビールを飲んだらう？その変の記憶がはつきりしないのは僕の頭がおかしいためではないだろう。

僕は音楽を聴くために自分の部屋に戻る。ビートルズは素晴らしいがいつまでも「ナツシング・ゴナ・チェンジ・マイ・ワールド」といい続けていても本当に世界は何も変わらないままだ。このままではいけない。僕はもっとタフで吹き飛ばされるぐらい激しいものが欲しいのだ。そう、まるでニルバーナみたいなのが。

「????????????????」

「？」

ニルバーナ？

僕は覚えている、その名前を。

メタリカ。

クイーン。

レッド・ツェッペリン。

ジミ・ヘンドリックス。

エミネム。

なんだ？どンドン出てくるじゃないか？

レッド・ホット・チリペッパーズ。

レイ・チャールズ。

なんだ？

スティービー・レイ・ボオン。

ジエームス・ブラウン。

ボブ・マーリー。

ジャック・ジョンソン。

どこまで出てくるんだ？

ビービー・キングにエリック・クラプトン。

止まらない、全くもって止まらない。

ストーン・ローゼス、ジェフ・ベック、カルロス・サンタナ。そしてあのレディオ・ヘッドにコールド・プレイ、マッシュ・アップ。どこまで繋がって行くんだ？

しかし気がつく僕は自分の部屋で両手を挙げてガッツポーズをしている。僕は記憶の一部を取り戻したのだ。早くCDを手に入れなくては、と同時に僕は思う。それは僕の記憶の何かの手がかりなのだ。違う、ケータイで注文するんだった、と僕は瞬時に思いなおす。

「おい、HMV！」と僕はケータイに向かって言う。

「いつもご来店ありがとうございます。こちらはHMVでございます」とケータイが喋る。この前と同じの若い女の声だ。

「今思いついたミュージシャンの音源を全部くれ！」と僕は言う。

「ありがとうございます、これでカエル様のポイントは340ポイントになりました。無料で3ギガ分音源をサービスさせていただきますが、何がよろしいですか？」

「とりあえず、今のところはいい。手に入れたものを聞くから」と僕は答える。

「そうですね？ノードアウトとか、モチバなんていいものありますけど……」とケータイが言う。

「今のところそういうものはあまり気が向かない。とりあえずポイ

ントは取っておくことにする」

「そうですか？エンヤ、とかマライヤ・キャリア、マドンナなんかも売れてますが・・・それにミツウラっていうお客様にだけ教える秘密の音源もあるんですよ。しかもこれ限定発売なんですよね」

「いや、いいよ。今日はこれでもう十分だ」

「しょうがないですね、でもデイドとか、オノ・リサなんていうのもいいらしいですよ？」

「いらん、もう、通信は終わりだ」

「あ、どうもご来店ありがとうございます。最後にモーニング娘の新しいアルバムが・・・」

「いらねえええええええ、って言ってんじゃねえか！しつこいんだよ！」

僕はケータイの通話を切るボタンを押す。

ケータイの画面には、

NOW LONDING・・・

NOW LONDING・・・

NOW LONDING・・・

NOW LONDING・・・

NOW LONDDING・・・

NOW LONDDING・・・

という文字が何度も浮かびあがる。おそらくは僕が購入した音源をケータイにダウンロードしているのだろう。

「カエル！まだ寝てるの？」とコトカが僕の部屋のドアをノックする。

「起きてるよ」と僕はドアに向かって言う。

「どこかに行つてご飯食べない？私お腹空いてるんだけど？」

「ああ、そうだな。ちょっと待ってくれ、顔洗って、歯磨かないとな」

「まだ、水道契約してないでしょ。あなた昨日トイレして流してないわよ」

「なんだよ、それ？昨日水流してない？ああ、酔っ払ってたからかな。それは悪かった、じゃあ、ケータイに言えばいいの？」

「そうよ、早くしてよね。私お腹空いてるんだから」

「オウ、わかったよ」

と答えるけど、目覚めてすぐなので僕はあまり機嫌が良くない。

あの豚まだ食うつもりか？と僕は心の中で思う。実は相撲取り部屋

からのスカウトを待ち望んでいるのだろうか？という疑問まで浮かんでくる。

それにしても僕は昨日トイレを流さなかったのだろうか？それは人間失格の烙印を押されてもしかたがないかもしれない。でも、僕の前にコトカが使っていたはずだ。でもバーションアップした直後だったからかトイレは汚れていなかった。

だんだんと僕の記憶が何かと絡み始めたことを僕は感じる。外に出ていきなり町があったのには驚いたけど、海と砂漠しかないよりは遙かにましだろう、と思いつく。これでなんとか人間らしい暮らしができるかもしれない。

そういえば、水道を契約しろと言ったたな、と僕は思い返す。僕はそれをケータイで注文する。さすがにこのままトイレが流せないのは問題外だ。水がないと人は生きていけない。

僕はトイレに行って顔を洗う。随分気分がまともになったような気がする。

「オイ、ケータイ君、歯ブラシがないんだが用意できるか？」と僕はケータイに聞く。

「かしこまりました。天然素材の新開発スーパーマイナスイオン発生の音速電動歯ブラシでよろしいですか？あと、よろしければ朝の男の必需品、電気髭剃り『ダンディズム』が最近売れ筋ですが？」

「なんでもいいよ、それでいい」と僕は答える。僕はそれで朝の身支度をする。僕のサイズに合ったジャケットとジーンズをケータイで注文する。この世界のあらゆることはケータイを操作すればいい

みたいだ。

「じゃあ、どこに行くんだ。どこか上手い飯食わせるレストランかなんか知ってるのか？」と僕は聞く。

「知らないわよ、カエルが決めればいいじゃない？」

「今まではどうしてたんだ？まさかいつも外食してた、ってわけはないよな」

「たまにチェーン店のテイクアウトとかもしたけど、だいたいいつもカエルは自分で料理してたでしょ？私はそれを食べてたけど」

「なんだ？オレ様は料理もするのか？オレ様はまさに豚の飼育係か？」

「とにかく今日はどうするの？まだ部屋に何も無いから外で食べるしかないじゃない？」

「そうだな、とりあえずクラブに行くか？あんな大きなクラブならレストランぐらいあるだろ。ってクラブはどこにあるんだ？」

「クラブはこのマンションの地下よ。エレベーターで一番下まで行けばいいのよ。クラブにはできれば行きたくないんだけど、今日はしょうがないわね」

「とにかく行こうか、オレ様も腹が減った。オイ、それとな、この部屋の鍵なんとかしてくれよ。不便でしょうがねえ」

「じゃあ、ケータイ貸して、私の鍵をコピーしてあげるから」

僕はケータイをコトカに渡して部屋の鍵をコピーしてもらおう。そして僕らはエレベーターで地下に降りる。エレベーターのドアが開くとそこには昨日見たのと同じクラブの扉が目の前にある。

僕とコトカがクラブに入ってゆくとそこでは昨日の夜の続きのように様々な人がいる。音楽はアストリックの「ポイズン」がかかっている。

僕はクラブの中を見回しながら中に入ってゆく。ボディビルダーみたいに筋肉ムキムキの男が短パンだけを身につけて自分の二倍ぐらいはありそうな大きなスピーカーに向かって腰を擦り付けるようにして激しく踊っている。まるでジミヘンがギターをこすり付けるみたいに、今までずっと長い間我慢してきたことが爆発してしまったみたいに、音を愛撫し音に愛撫されるように身をくねらせている。

その隣の薄暗い壁際のソファアの上では数多くの人がTVを取り囲むようにして眠っている。もちろんテレビの音は大きなクラブダンスの音にかき消されてしまっている。テレビには何か政治の演説のようなものが延々と映されている。人々はその演説があまりにもつまらなくていつの間にか眠ってしまったように見える。

天井を見上げると大きなガラス張りの向こう側には星が輝いているのが見える。この世界の時間や空間がどのように機能し、成り立っているのか僕には全く理解できない。

それから僕とコトカはレストランのブースに行き、テーブルに腰掛けて食事をする。僕が席に座ってもまだ筋肉質な男は狂ったように腰を振って踊っている。

まるで「俺は飯なんか食べない、飯なんかじゃ俺は止まれない、頼むから俺のことはほっといてくれ」と言っているみたいだ。僕がじつとその光景を見ているとこの踊り狂っている男はひよっとしたらゲイなんじゃないかと思ひ始める。

「どうしたの？」とコトカが聞く。テーブルはダンスフロアから少し離れているのでコトカの声も聞こえやすい。

「あのさ、あそこで踊っている男なんだけど」僕が視線を向けるとコトカは僕の視線を追うように目を動かしてその男をチラッと見る。「ひよっとしたらゲイかな？」

「あれがゲイ以外の何かだったら私は拍手して喜んであげる。そのくらい強烈にゲイよね。あの踊り方どう見たってヤバイもん」コトカは何万年も昔の昆虫の化石を見たような顔つきで言う。

「でもゲイってことはセックスに関していえば元々男と女の二つのものを一つにして持っているってことだね。セックスをしなくてもセックスの問題はある程度解決しているんじゃないかな？そう考えるとすごくない？もちろんオレ様はゲイじゃないからゲイの人々のセックスの悩みなんてわからないけど」

「でも、それはなんていうか、違うんじゃない？」コトカはパラパラとメニューをめくりながらそう言う。音楽の重低音が遠くでドンと僕の意識を蹴飛ばしている。コトカは頭のどこかで何かを考えながらまったく別のどこかで全く別のことを考えているような気がする。

「元々男と女がいるから世界があるわけでしょ。それが無いってことは世界そのものがないってことになるんじゃないかしら」

コトカが目線でウェイターを探している間僕はコトカの言ったことについてしばらく考える。それでもなんだかよくわからない。世界そのものがないってどういうことなんだ？よくわからない。なんだか自分がものすごくバカなんだという気がしてくる。ブラジャーとパンティの部分だけが真っ白く残ったものすごく日焼けした若い女の裸を見ているような気分がしてくる。身体はくまなく興奮しているように思えるけど、頭の中のどこかに開かない扉が隠されているような感じだ。

「私は注文決まったけど、カエルは？ウェイター呼んじゃう？」

「ああ、オレ様はライスと味噌汁。糊と納豆。それに漬物と温泉タマゴだな。あと梅干があれば文句は言わない」

「カエル、朝からそんなに豪華なもの食べてもいいの？日本食はものすごく高いのよ」

「なんだ？ここは日本食置いてないのか？オレ様はベジタリアンだぞ。健康第一っていうのがオレ様のモットーなんだ。頭がおかしくなるようなジャンクフードなんか食べないからな」

「あることはあるけど、食べたかったら食べればいいじゃない」

僕はウェイターを呼んで注文を伝える。しばらく僕らは黙ってクラブの風景を見ている。ここでは朝も夜も関係なく人々が踊っている。僕とコトカには朝なのにここはまるで地球の裏側みたいに時差があるように思えてくる。

僕とコトカは運ばれてきた料理を食べる。味は日本食に近いけど

そこには何か足りないような気がする。例えばおふくろの味みた
いな僕の心のよりどころとなるようなものが。でも僕は黙ってもく
もくと食事をする。こうやってご飯を食べるのはなんだかとても久
しぶりのような気がする。でもコトカと一緒にご飯を食べている自
分にあまり違和感がないという違和感が僕の中にあるような気がす
る。なんだか複雑な気分だ。

「カエル、今日はこれからどうするの？私はもう部屋に帰るけど」

「ああ、オレ様は少し町へ散歩に行ってくる。どんなところか見て
おきたいんだ。それにあんな部屋じゃ何もできないだろ？少しは何
か買ってくるよ」

「そう、じゃあ私は部屋にいるから、それに帰りが遅くなってもい
いよ。カエルも少しは一人で考える時間が必要かもしれないもんね」

「まあ、何かあったらケータイで連絡するよ。それじゃあまたな」

僕はコトカが去ってしまったとしてもしばらく一人でクラブのテーブル
に座っている。僕は手に入れた音楽をさっそく聴きたいと思うけど
ヘッドフォンを持っていない。

「もしもし、ケータイ君？」

「こんにちは、カエル様。何かご入用でございますか？」

「あお、一人で音楽が聞きたいんだけど、ヘッドフォンって用意
できる？」

「もちろんでございます。MP3プレイヤー機能でございますね。」

「さっそくご用意いたしますか？」

「ああ、頼むよ」

そうするとケータイの横からはめ込み式の耳栓のようなものが出てくる。おそらくはワイヤレスの耳栓型ヘッドフォンなのだろう。

「ああ、カエル君。カエル君じゃないか？」と僕に呼びかける声を聞く。

「あ、ジェフ、ジェフじゃないか？いやー、またしても偶然だな？これはやっぱりかなりのコンビだぜ」と僕は言う。ジェフは僕のテーブルにやってきてさっきまでコトカが座っていた席に座る。

「ワシは、見たぞ。さっき見たぞ。カエル君もなかなかやるじゃないか？さっき一緒に女の子が座っておっただろう」ジェフは朝から手にビールのジョッキを持っている。それにすでにかなり酔っ払っているみたいだ。僕はビールのジョッキを見ただけでまだ頭が痛くなるような気がする。

「あ、あの豚か？あれはオレ様が飼育しているんだ。間違ってもオレ様の彼女とかではない」

「なんじゃ？ワシはてつきり・・・なんだかすごく仲がいい夫婦みたいに見えたぞ」

「ジェフ！朝から冗談キツイぜ、マイト。人間には言っていないことと悪いことがあるだろ？いくらコンビでもそれにはツッコミ入れられないぜ。あれはオレ様が飼育しているだけだ」

「なんじゃ？いくらなんでもそれは言いすぎじゃないか？ワシはあんなにかわいい子は最近見ておらんぞ。あんな美人はなかなかいないのじゃないかな？」

「マイト、ジェフ！冗談は顔だけにしてくれよ。あんなブサイクオレ様は見たことがねーな」

「カエル君、何かの見間違いじゃないのか？あの子なら間違いなく十人中九人は美人だというようなタイプじゃと思うがの？」

「ジェフ、マイト。朝から漫才の練習なんかしなくてもいいんだよ。実はジェフってさ、目が悪いんじゃない？なんならオレ様が眼鏡屋でも一緒に連れて行ってもいいぜ。もちろん、リムジンでな」

「いや、ワシの目は悪くないんじゃ」

「そうか、それなら、あ、そうだ、明日、明日の夜にオレ様の部屋に遊びに来いよ。今日はまだいろいろと準備しなきゃいけないんだけどさ。明日ならオツケーだぜ。そうだ？またビールでも飲もうぜ」

「ワシは別に構わんが、本当にいいのかの？」

「いいよ、いいよ、豚と一緒にいるけど、あんまり気にしないでくれ。あれはただのゴーストだと思ってくれればいい。そしたら明日の夜8時にオレ様の部屋でどうだ？住所はこの0号室だから、すぐわかるだろ。こんなに近くだったら、残念ながらリムジンは呼べないかもしれないけど。いいか？」

「ワシはオーケーじゃ。そしたら明日の夜8時じゃったな？忘れないで伺うよ。それとこれがワシのケータイのアドレスじゃ。一応知

つておったほうがいいじゃろ?」

そう言って僕とジェフはお互いの連絡先を交換して別れる。それから僕は町を散歩してみることにする。

8

僕はアパートを中心にして迷わない程度に町の中を歩いてみる。まるで外国を歩いているような、映画の中に飛び込んでしまったような驚きを僕は感じる。町は新しく近代的で目に付くものすべてが僕の目には新鮮に映る。建物はどれも建てられたばかりのようにぴかぴかで古い建物は見つからない。少なくとも歴史を感じさせるようなものは全くない。道端にゴミひとつ落ちていないし、とても清潔な感じがする。まるで細菌ひとつこの町には入り込めないように思えてくる。

スーパーマーケット、デパート、食品街に行ってみる。そこではあらゆる国の料理が並び、あらゆる国の言葉が飛び交っている。国際的というよりはこれがこの町の日常なのだろう。僕はその全く新しい世界の日常に興奮してくる。目にしたことのない野菜や、そして料理がある。想像もできないくらい幾何学的なファッションをした人々が歩いている。その日常の中に僕は新しい自分自身を見つけ

る。そこで大きく息を吸い込み、新しい空気を胸いっぱいを送り込む。僕は町をしばらく歩いてみた後、目に付いた公園のなかに入っ
てゆく。

太陽はキラキラと輝いて澄み切った空の中を雲が流れてゆくのが見える。と言っても高い高層マンションで空の大部分は見えなくなっている。高いマンションは地上に長く巨大な影を照らし出し、隣の高層マンションを覆っている。僕の視界が届く範囲ではそれが延々と繋がっている。

公園はそれほど大きいものではないけど、ブランコや滑り台が置いてあって、公園を取り巻くようにして立っている木々が光を浴びてくつきりとした影を地面に投げかけている。その中心では7、8人の男の子たちがサツカーをしている。まだ小学生の低学年あたりだろう。僕は公園の端っこの日陰の中にあるベンチに腰を下ろして男の子たちを眺める。太陽は時間を止めようかとするように力強く辺りに照りつけ、風がときどき砂を巻き上げて男の子たちを襲う。でも男の子たちはそんなことに全く気がつかないみたいにボールを必死に追いかけてまわっている。

僕はどこかでこんな光景を目にしたことがあるような気がする。でもそうゆう気がするだけでそれは僕の記憶ではないのかもしれない。
い。

僕はヘッドフォンをして音楽を聴き始める。公園にいる人々はまるで僕なんか世界に存在していないという感じで子供と遊んだり、カップルがふざけあったりしている。

そんな光景をぼんやり見ていると久しぶりに少し落ち着いた気分になることができる。車の中で目を覚ましてからとんとん拍子にい

るんなことが起こって、落ち着いて考える時間がなかったのだ。

僕は記憶をさかのぼって僕のことを、そしてこの世界のことをもう一度頭のなかで整理してみる。どうやら僕は本当にカエルであるらしい。自分で認めたくなくてもないけど、それを認めないとここでは生き延びていけないだろう。少なくともカエルであれば住むところもあるし、のたれ死ぬこともない。でも本当にそれでいいのだろうか？僕はどうするべきなのだろう？でもしばらく考えてカエルのままでいるしかないのだろうと思う。このままこのわけのわからない世界に一人で放り出されても僕には生きてゆく自信がない。それに考えれば考えるほど僕はどんどんと混乱してゆく。

一体ここはどんな世界なのだろう？コンピューターのなかの世界とというのはどうゆうことなのだろう？僕の脳が巨大なコンピューターに繋がれていて操作されているのだろうか？それとも神が人間を創ったように、コンピューターが人間を作ったのだろうか？じゃあ一体誰がそのコンピューターを操作しているのだろうか？それとも宇宙というものが僕の知らない間にそれだけ進化したということなのだろうか？とにかく僕がどこか別次元の世界にはまり込んでしまったことは確かだ。

こうして目の前にいる人々やこの公園や、町や、空や風、コトカやジエフ、そしてこの僕でさえも本当は存在しない世界にいるということなのだろうか？僕は自分の身体を擦ってみるけど、そこにはちゃんと生々しい感触がある。全くリアリティのないリアリティだ。僕にはどう考えてもわからない。まるで押尾 守の「イノセンス」みたいな世界だ。

太陽が沈んで街灯が灯り始めるまでずっと音楽を聴きながら昨日から繋がっている自分の記憶というものを辿ってみる。でも昨日のこ

とは思いつけてもその前のことはいくら考えてもわからない。それでも音楽はそんなことどうでもいいじゃないか、と僕の耳で囁き続けているようだ。

ボブ・マーリーが「エブリシング・ゴナ・ビー・オーライ」と僕の耳元で歌う。僕はそれに合わせて歌を口ずさむ。「エブリシング・ゴナ・ビー・オーライ」と。

とにかく僕が誰であろうともこうして太陽が昇り、沈み、風がそこを吹きぬけてゆく。僕は一日をなんとか生きてゆくしかないのだ。当たり前なことだけど、僕はそう思う。とにかく買い物をして部屋に戻らなくてはいけない。後はなるようになると思うしかどうやっても道はなさそうだ。くつきりとした飛行機雲が空を二つに割るように夕焼けのなかに浮かびあがっているのを見ながら僕はそう思う。

僕は100円均一のショップに行って部屋に必要なものを買いにゆく。適当な消耗品なら100円均一で十分だ。

部屋に戻るとコトカはリビングの床でまた例のバカみたいな顔をして寝ている。どうしてここまでバカな顔をしているのだろうと僕は思ってしまう。僕はコトカを起こさないようにしばらくコトカの顔を見ている。

一体ジェフは何の話をしていたのだろう?と思う。どう考えても、世界が逆さまになったとしてもコトカはブサイクだ、と改めて思う。もしかしたらジェフはデブで、ブサイクな女が好きなのかもしれない。人にはそれぞれ好みというものがある。

僕は突然買い物袋の中にマジック・マーカが入っていることを思い出す。

「お、オレ様すごいこと思いついちゃった」

僕は寝ているコトカにいたずら書きを始める。

「こりゃあ、ほんとうに、豚じゃないか？」と小さい声でひとり言を言う。

僕はまず、筋肉マンみたいにコトカの額に「豚」と書き、忍者ハットリくんみたいに頬に丸を書き、首筋に「私は痩せたい」と書く。

僕はそのコトカのバカみたいな顔を見て、何度も、何度も笑う。これはだんだん楽しくなってきたな、と思う。そういえば、買い物袋の中には買ってきたハサミがあることを思い出す。

「この髪の毛がまた気持ち悪いんだよな」

僕はコトカの顔を汚らしく隠している髪を切ってしまう。

「どうだ？実はオレ様はカリスマ美容師なんだ。早く人間になりたいよー」と僕は言う。

でもハツと気が付くと自分がとんでもないことをしていることに気が付く。僕はコトカをよく見てみる。そこにはさらにバカみみたいになったコトカが口を開けて顔にいたずら書きをされたまま眠っている。

もう一度笑ってしまいそうになるけど、これはよく考えてみるととんでもないことだ。でもコトカはまだバカみみたいな顔をして眠っている。

「まあ、それ以上バカにはならねえだろ？なんなら罪滅ぼしにオレ様が何かプレゼントしてやるよ。これぞまさに豚に真珠ってやつだな。ガハハ」とまた笑う。

なんだかこの世界にいるのもなかなか悪くないような気がしてくる。

気が付くと僕は眠っている。僕はリビングではなく自分の部屋で眠っている。僕は昨日の夜自分の部屋に帰って眠ったのだろうか？と記憶をさかのぼらせてみる。でも、そんなことはいいか、と思い直す。とにかく自分の部屋にいるのだ。部屋のドアを激しくノックする音が聞こえる。

「カエル！カエル！」と聞いたことのない女の声がする。なんだよ？まだ眠いんだけどなあー、と思う。

「カエル！カエル！」

「なんだよ？オレ様はまだ寝てるんだ」

「カエル！カエル！つてば！」と僕の名前を呼ぶ声は止まらない。

しまった！そういえば昨日の夜コトカにひどいことしちゃったんだ、と記憶を思い出す。でも声はコトカの声じゃない。眠気を押さえ込み、立ち上がってドアを開く。そこには髪の高い人形のように美しい女が立っている。天使のような微笑を浮かべる学校一のマドンナみたいだ。誰だ？と僕は思う。コトカの友達か誰かだろうか？

「カエル！昨日の夜私の髪切ったでしょ？」と女は言う。

「なんだ？セリヨリータ？君のような美しい人にオレ様がそんなことするわけないじゃないか」と僕は緊張してそう言う。こんなにかわいい子と話すのは初めてなので何を言っているのか自分でもわからなくなる。まるでグラビアアイドルの写真集から飛び出してきたみたいに女はとても美しい。

「カエル！何言ってるの？あなた私が寝てる間に私の髪切ったでしょ！なんてことしてくれるの！これは冗談じゃすまないわよ！」

「ちよ、チヨ、ちよっと待ってくれ。オレ様は確かに悪ふざけしてコトカの髪を切ってしまった。それは悪かった、とオレ様も反省している。でもコトカはどこに行ったんだ？まあ、あんな豚のことはどうでもいいか。それにしても朝から君のような美しい人に出会えるオレ様ってなんてラッキーなんだろう？もう人生の運をすべて使い切ったような気がする。いや、でもファンキー・モンキー・ベイバー、気にしないでくれ。君に会えたオレ様は全く後悔してない」

「カエル！何バカなこと言ってるの？私じゃない？私にはコトカって名前があるって言ってるじゃないの？」と目の前の女の子が言う。

「オーケー、コトカの友達、かわいい子ちゃん、オレ様はすべてお見通しだ。君は頭がイカれているんだね？でも大丈夫、オレ様が面倒みよう。これからオレ様と人生をやり直さないか？きつとうまくいくよ。とりあえず、あなたの美しい名前を教えてもらえないかな？」

「カエル！だから私の名前はコトカだって言ってるじゃないの！」

「オーケー、朝から冗談はキツイぜ。一体どこのコトカちゃんの話をしているんだ？あの豚が逆立ちしても、君のようなその真珠のような大きくて美しい瞳、そして真っ白で透き通るような若々しい肌、その神秘的なボデイライン、そんなものはこの世界のどこだって手に入らない。たとえここがどんな世界であろうと……」

「……」

「まさか、君が？コトカなのか？あのコトカ？豚ってことか？」

「だからさつきからそう言ってるじゃない」と女は言う。「何言ってるの？それより話題を変えないでよね？私の髪切ったでしょ？昨日の夜？」

「だって、声も全然違うじゃないか？眼鏡もかけてないし」と僕はびっくりしながらそう言う。

「何言ってるの、私は私のままじゃない。変ないたずら書きは顔洗ったから残ってないけど、もう冗談でもこんなことは二度としないよね！」

「おい、何言ってるんだ、っていうのはこっちのセリフだけ。君が、君のように美しい人がコトカなわけじゃないか？」

「だから、私だって言ってるじゃない？」と女は繰り返す。

「おい、ちよつとこっちに来い」と僕は女の子と洗面所の鏡の前に行く。

「ほら、見てみる、君はバツグンの美人じゃないか？今一押しのアイドルみたいじゃないか？どこからどうみてもかわいいじゃないか？君はコトカじゃないよね？」

「そんなことは知らないわよ。それよりも私の髪の毛切ったでしょ！髪はね、女の命っていうじゃない。それくらい大切なことなのよ。わかってるの！」

「いや、オレ様はそれはものすごくおおおおおおおおお、似合ってると思うけど。っていうか、コトカはコトカじゃなくて、コトカは、ものすごく、かわいい、コトカ、って、すげえ、いい女だなああああ、って、一体、どうなってるんだ？まさに、これは、オレ様は、わけがわからねえ、んだけど、コトカって本当にかわいい、なあ、って、違うんだよ、っていうか、コトカって、一体何者なんだ？もしかしたらニンジャ？クノイチ？」

「ねえ、カエル！ちょっとしっかりしてよ。何言ってるのか全然わからないじゃない？昨日どこに行ってたのよ？どこかで頭でも殴られたんじゃないの？」

「ああ、オレ様は、昨日は公園で、って、あのコトカが、まさか、こんなにかわいい、って、オレ様には、わけがわからなくても、コトカはかわいいからどうでもいいじゃないか、ってそんなわけにはいかないぞ、って、でもコトカ本当に可愛くなったなあ。まるで別の惑星からやってきたお姫様みたいじゃないか？」

「何言ってるの？バカいってんじゃないわよ」といいながらもコトカは恥ずかしそうに顔を赤らめる。

「いや、でもあの豚が、って、でも恥ずかしがるコトカも本当にかわいいなあ、っていうか、そのほうがもっと可愛いじゃないか？なんだ？そろそろベッドに行く時間じゃないか？そろそろ寝るか？」

「朝からバカ言ってるじゃないわよ！カエル、ちょっとまともに話を

しない？朝ごはんどうするの？」

「バカ言ってるじゃねーよ。オレ様を作るに決まってるじゃないか！まさか君のように美しい人にそんなことはさせられない。オレ様がコトカ姫においしい食事をご用意いたしましたよ。って、オレ様昨日とかおとといコトカにひどいこと言ったかもしれないけど、あれは全部冗談なんだ。許してくれるよね？昨日の夜も本当はそんなことしたかったわけじゃないんだ。悪魔が昨日やってきてね、いや、実はあれはオレ様じゃなくて、悪魔があああの玄関のドアから入ってきてコトカ姫の美しい顔に落書きして、そのうえ髪まで切つていったんだ。あいつはひどい奴だった。あれは超一級の悪魔だったんだ。オレ様はダメだ、と思って戦おうと思っただが、悪魔に眠らされてしまった。あれは、だから・・・」

「もう、そんなことはいいから、とにかくこんなことは二度としないでよね。許してあげるのも、カエルが私の欲しいもの何でも買つてあげるって言ったのを私のケータイが聞いていたからよ。そうじゃなかったら、もう、許さないからね！」

「ああ、これはコトカ姫。もう何でも買ってください。姫にはやっぱりシヨッピングが似合う。いい女がシヨッピングしているのは素晴らしいことだ。ジャンジャン好きなものを買ってきてくれ」

「ホント？ホントにいいの？」とコトカの顔が急に明るくなる。

「当たり前だぜ、なんでもいい。なんならコトカのためにシヨッピングセンターを貸しきつてもいいくらいだ」

「キヤー、カエルって、すごい！たまには男らしいこというじゃない？」

「オレ様が？ 当たったり前だぜ、このファンキー・モンキー・ベイブー！ オレ様もやる時にはバシツと決めるからな。オイ、センターング左コーナーからな」と僕はサッカーボールを蹴る真似をする。「オウ、そう言えば忘れてたけど、今日の夜にオレ様の友達が遊びに来るんだ。ジェフっていうんだけどさ、クラブで会ったいい奴なんだよ。外国人なんだけど、いいだろ？」

「えー？ 私ってあんまり英語上手く話せないの知ってるでしょ？ それでもいいならいいけど……、カエルが友達連れてくるっていうのも久しぶりだもんね」

「そうか、そしたらさっそく準備しなきゃな。今日は一緒に買い物デーだな」

「なんか、ワクワクしちゃうね。ねえ、美容室も行ってもいいでしょ？」

「もちろんだ、でもコトカが美容室なんか言ったらスーパーモデルと間違えられるかもな。その辺のいかさまスカウトに捕まるんじゃないか？」

「何バカなこと言ってるの、もう」

それでもコトカは嬉しそうに笑う。僕もなんだか楽しくなってきたような気がする。こんなにかわいい子と一緒に住んでるなんて僕はなんてラッキーなんだろう、と思う。

「ねえ、そしたら買い物のカタログすぐにダウンロードしちゃおっか？ それに朝ごはんはどこかに注文して持ってきてもらおう？ そのほ

うがすぐに買い物できるでしょ？」

「オウ、ヘイ、ヨウ、悪くないぜ、そのアイデア。なんだか急に仲良しになったみたいだな、コトカ？」

「バカ！まだ許したわけじゃないからね。さっさとしてよ、支度」と言うとコトカはケータイを操作し始める。

「それじゃあねえ」とコトカはケータイの商品カタログを見ながら言う。ケータイを操作するコトカを見ながら僕は本当にコトカがとびきりの美人であることを確認する。確かにジェフが言ったとおり十人中九人は美人だというようなタイプかもしれない。ケータイを操作している手もほっそりとして若々しく、まるで手のモデルのようだ。大きくて切れ長の瞳はどこか妖艶な魔性の女の輝きを放っている。小さな顔の輪郭からはちょっとアンバランスとも言えるぐらいの大きな口が特にセクシーだ。街角ですれ違っただけなのにずっとどこか記憶の片隅にインプットされてしまっ、というぐらいの美人だ。

それにしてもあのコトカが……、どうやってたらこんな美人に変身できるのだろう、と改めて思う。それでも僕はなんだかものすごく自分はラッキーなのかもしれないと再び思い始める。カエルでいるのも悪くないかもしれない。

「えーと」とコトカはケータイを見ながら言う。「あ、これ、まずルイ・ビトンのバックでしょ、それに、あ、このエルメスのバックも欲しかったのよね、えーと、あとは、そうだ！カルティエの腕時計でしょ。うーん、ビトンはダミエにしようか、モノグラムにしようか、

うか迷うところよね」

「オイ、コトカ？何の話をしているんだ？」

「それとねー、うーん、何でも買ってくれて言っただわよね？言っただわよね？そうよね？言っただからにはしょうがないわよね。ねえ？そう、思うでしょ？えーとね、私は、そうだ！エルメスはドカーンとパークインのバックを買うことにして、あ、そういえば前から欲しかったグッチの新作があるのよね、でも思い切ってワニ革の鞆なんて買っちゃおうかしら？私って鞆が好きなのよねー。あ、そうだ！シャネルの財布はどれがいいと思う？」

「ちよつと、待ってくれ、そういえばオレ様は金を持ってるのか？貯金とかはあるのか？何を言ってるのか全然わかんねーよ。ちよつと真面目に話をしようじゃないか？」

「そんなのどうでもいいじゃない。カエルが何でも買ってくれて言っただんじゃない？そうでしょ？言っただことはちゃんと約束を守るのが男つてもものじゃないの？ちよつと、何？今まで散々人を豚呼ばわりして？このぐらいなんてことないでしょ？そうそう、私前からこの部屋が気に入らないなあーと思ってたのよね。どう、ニューホームでなんて？みんなが羨むようなすごい家に住むの。高級車を乗り回して、南の島でバケーション。ビーチで日光浴して、身体の隅々まで光を吸い込むの。どう？そうゆうの？」

「オイ、オレ様は庶民だぜ？そんな金あるわけないだろ？それに『強い光を求める者は濃い影を残す』って言うじゃないか？そんな不吉な影は見たくない」

「言っておくけどね、どうして私ばかりいつもいつも我慢しなく

「ちやいけないの？こんなときぐらいいいじゃない？なんでも買ってくれるんでしょ？」

「と、とにかく、だ。ちよっと落ち着いて話をしようじゃないか？」

「私は落ち着いてるって言ってるじゃないの！なによ！人のこと豚、なんて言つて。オレ様なんて偉ぶっちゃつて。お金なんかどうにでもなるでしょ？」

「悪かった、このとおりオレが悪うございました。どうかこの辺でご勘弁してください、コトカ様」と僕は頭を下げる。

「何よ！冗談じゃないわよ。バカ！あなたってどうしてそんなにバカなの？」

「じゃあ、どうしてオレと一緒にいるんだ？今まで聞くの忘れてたけど、どうして俺たちは一緒に住んでいるんだ？」

「私たち結婚してるからでしょ」

「え？」

「なによ、そんなバカみたいに驚いた顔して」

「え？」

「え？じゃないわよ、私たちは夫婦なの」

「ええええええええ？え？オレたちが夫婦？ってことは、オレは結婚しているってことか？コトカと？」

「他に誰がいるのよ」

「いや、コトカはかわいいからいいけど……でも……オレが結婚……っていうのはちょっとまだ心の準備が……ええええええ？」

「もう、これ見ればわかるでしょ」

コトカはコトカのケータイを差し出してコトカのパスポートを僕に見せる。

名前 石川 琴歌

住所 0号室

血族 半日本人

「おい、オレ様には、いや、オレには相変わらず全くわけがわかんねーぞ。素人が撮ったエロビデオみたいに局部アップばかりで何かなんだか全然わかんねー。オイ、カメラもっと引けよこのヤロウ！って感じだぜ」

「あのねえ、いい加減にそんなこと言うの辞めてくれる。私まで頭がおかしくなってくるわ」

「あのさあ、こつちこそいい加減にオレ達がどうゆう状況なのか教えてくれてもいいだろ。もう驚くのには疲れてきたんだ。オレは一体誰で、ここはどうゆう世界なんだ？ここがコンピュータのなかつていうのはクラブで知り合った友達に聞いたよ。まだよくわかんねーけどさ。それにしてもオレはこの世界で何をしているんだろう？ここはオレが今まで住んでいた世界なんだろうか？」

僕がそういうとコトカはしばらく黙って最後に大きなため息をつく。

「ねえ、カエル。あなたが大変なのはよくわかるけど、私だって大変なのよ。あなたが記憶を無くすたびに私は『これは一体どうなっているんだ？』とか『おまえは誰なんだ？』とか聞かれるのよ。それも一回や二回じゃないのよ。何回もなのよ。そうゆう私の気持ちだって少しは考えて欲しいわ」

「それは申し訳ないと思うよ。オレだって記憶がすっかりしてたらもっとまともなことが言えるかもしれない。でも自分が誰なのかわからないんだから、それはしょうがないだろ？」

「言っておくけどねえ、カエル、あなたが記憶喪失になるのはこの世界だけの問題じゃないんじゃない？それはあなたが抱えている問題じゃないの？結局あなたは誰にもなりたくないんじゃない？自己否定を繰り返しているだけじゃないの？」

「ちよ、ちよっと待ってくれ。朝からそうゆう問題はかなりヘビーだ。朝起きていきなり時間制限の焼肉食うようなもんだ。とにかくオレ達は夫婦なんだよな？とりあえずわかりやすいところから話を始めようじゃないか？コトカはコトカで、オレはカエルだろ？」

「そう、あなたは私の夫でバカなカエルなの」

「でも一般的に言っただけでどうしてコトカみたくない女がオレみたいなバカと夫婦なんだろう？どうしてオレと結婚なんかしたんだ？」

「そんなこと知らないわよ。あなたはものすごくバカなんだけど……ものすごくいい人って言うか……実はしつかりとしているっていうか……特別な才能があるっていうか……それがカエルが抱える矛盾なんじゃないの？」

「なんだ？オレは矛盾してるのか？だったらこの世界こそ矛盾してるんじゃないのか？だいたいコンピュータの中にどうやって人間が暮らすんだ？観念の逆転ってなんだ？」

「もう、そんなこと言い始めたらきりがありませんよ？とにかくここはそうゆうことなんだからしょうがないじゃない。そんなこと言っている場合じゃないのよ。私たちは仕事して、生きてゆくためのお金を稼いで、暮らしていかなくちゃいけないのよ」

「だからそうゆう難しいこと話し始めてもしょうがないじゃないか？話がどんどん難しくなっていくだけだ。オレは金を持っているのか？仕事はなんだ？オレはコトカとこんなふうに言い争いをしたいわけじゃないんだ。もっと平和的に問題を解決しようじゃないか？オレはもっと、なんていうか、まともに話がしたいんだ」

そう言ってもコトカは黙っている。どうしていつも言い争いになっってしまうんだろう？

「確かにオレが悪いのかもしれない。こうなってしまったのはオレが記憶をなくしてしまったからかもしれない。でもオレだって……」

・なんていうか、まともな暮らしたいと思うし、結婚しているんだったらコト力を幸せにしたい・・・っていうのは大げさかもしれないけど、とにかくオレは記憶を取り戻すことが先決なのかもしれない。オレはどうかんばってみてもバカなカエルでしかないかもしれない。それでもなんとかこの世界でがんばってみようと思うし・・・オレはオレなりにがんばってみようよ。としか言いようがないじゃないか？」

どうして話が次々とんでもないことになるのだろうと思う。朝起きるとコト力がとんでもない美人になっているし、それに僕とコト力は結婚しているらしい。それは記憶がないからかもしれないけど、この世界は本当にどうなっているのだろう？僕が知っているリアリティとは全く違う。ちょっとまともになつてきたと思ってほっとするとすぐにとんでもないことが起こる。

「とにかくなあ、コト力」と僕は言う。「もうオレはこのびっくり玉手箱みたいな世界にはうんざりだ。とにかくわかりやすいところから話を始めよう。オレは金を持っているのか？それに職業はなんだ？もつと現実的に話をしよう」

「ちょっと、すぐにそうやって話を変えるでしょ？カエルはなんでも買ってくれるって言ったわよね。じゃあ、そこから話をしましよつよ」とコト力は少し怒った顔になる。確かに美人は得かもしれない。ブサイクがどんなに怒ってもなんとも思わないけど、美人が怒るとなんだか説得力がある。そういえば買い物話をしてきたのだ。

「それでもなあ、コト力、とにかくオレは金を持っているのか、と、聞いているんだ。オレの仕事はなんだ？それにオレは一体、」

「いい加減にしてよ、カエル！」と突然コト力は大きな声を出す。

「あなたっていつもそうじゃない。何度言ってもわからないのね！だから話を変えないで、って言ってるでしょ！」

「わかった、悪かった」と僕は謝る。

なんともいえない沈黙が部屋のなかに流れている。窓の外からは強い風の音が部屋のなかに忍び込んでいる。それはまるで二つの世界を引き裂く木霊のようにうつろに僕の耳に届いてくる。

コトカはケータイの横に置いてあるタバコをとって火を点ける。僕は黙ってコトカがタバコを吸うのを見ている。

「わかったわ」としばらくしてコトカが言う。「とにかくカエルが誰なのかっていう話をしましょう。そうしないと話が進まないもんね」

それを聞いて僕は少しほっとする。コトカが美人になったのはいいけど、僕の立場がずいぶん弱くなったような気がする。

「あなたは私の夫のカエルでしょ？ここまではいいわよね」

僕は頷く。とにかくここはじつと黙って話を聞かなくてはいけない。

「お金のことは・・・」

「実はオレは大富豪の息子でジャンジャン金持ってるんだろ？それで金に目がくらんでコトカはオレと結婚してしまった、っていう筋書きだ。どうだ？そうだろ？」

「バカ！あなたって話を聞く気があるの？」

「ごめん、ちゃんと聞くよ」と僕は言う。

「いきなり深刻な話しになるかもしれないけど、実は私たちは借金してるのよ」

「バカやろう！そんなわけねえだろおお！オレは大富豪の息子かなんかで札束で人の顔をひっぱたいて暮らしているぐらいじゃなきゃいけないんだ。そうゆう設定に変えられないのか？オイ、ケータイ君？」

「バカ、カエル、ちゃんと話を聞きなさいよ。でも私たちはそんなに不幸じゃないのよ。むしろ幸せなほうなんだから。私たちは借金していて、あなたは仕事もしていないんだけど・・・」

「ちょっと、待てよ、このヤロウ！そんなわけねえだろおおおおおおおお！オレが仕事してない？」

「このヤロウって何よ？その口の利き方？」

「ごめん、そうゆう意味じゃないんだ」

「ちゃんと話を最後まで聞きなさいよ。あなたは要するに主夫なの。私が仕事をしていてあなたが家事を担当しているってこと。それで実はね、ここからがすごいところなんだけどね」そう言ってコトカはにんまりと笑う。とても嬉しそうな含み笑いだ。僕はなんだか嫌な予感がする。

「実はあなたは小説家の卵なの。あなたはいつの日かデビューする

ためにずっと小説を書いていたのよ。それを私が支えていたの。バカなカエルでもすごい夢を持ってるのよね。そうゆうところに私は引かれたんだから」そう言っつてコト力はまた嬉しそうに笑う。

「ちよ、ちよ、何度も言うようだけど、ちよつと待てよ。それはないぜ。オレが小説なんか書けるわけないじゃないか？それにオレは全然小説家になんかなりたくないぞ。そんな職業は最悪だ。はつきり言っつてそんなひどい仕事はないよ。オレは小説家にはなりたくない」

「あなた自分が何言っつてるのかわかっつてるの？」さつきまで笑っつていたコト力が急にブチ切れたみたいな顔になる。目を大きく見開き、鼻の穴が少し広がり、声が高く、そして大きくなる。

「あなたね、カエル。あなたが私のことを豚呼ばわりしても、記憶をなくしても、それでもあなたに耐えてきたのはあなたがずっと小説を書いてきたからなのよ。それが私の望みの。あなたは小説を書かなくてはいけないのよ。あなたには才能があるのよ」

「そんなのあるわけないじゃん」と僕は答える。「いきなりお前は今日から陶芸家だとか画家だとか言われてもできるわけないだろ？オレは音楽が好きだからミュージシャンだったら考えてもいいけど、小説なんか書けないよ」

「あなたね、私がどんなに支えてきたと思っつてるの？このクソ、カエル、ファックヤロウ、マザーファッカー！」

「ちよ、待てよ」

コト力はタバコを吸い込んで煙を吐き出しながら言う。「このサ

ン・オブ・ア・ビッチ！マザー・ファツカー！私はカエルの小説のためにすべてを捧げてきたのよ。すべてよ。すべて。あらゆるものを捧げてきたのよ、犠牲にしてきたのよ。それがどんなに大変だったかわかる？それが私の心の支えだったのよ！そのために私はこんな借金生活までしてるのよ。それでもあなたが小説を書いていたらずっと我慢してきたのよ。それを今更辞めたなんて言わせないわよ。もう離婚よ！そんなのあんまりじゃない！」コトカがそう言う
と左側の目から一滴の涙が頬を伝って落ちてくる。

窓から吹き込んでくる風はさらに勢いをましてヒュオオオオオオオオオオといううなりをあげて僕の耳に届く。改めて一体僕は何者なんだろうと思う。僕はコトカを傷つけないわけじゃない。もっともともに話したいと思う。でも僕がまともになろうと思っても話はどうどんまともじゃなくなつてゆく。シンプルな人生を求めれば求めるほど人生は逆にどんどん複雑になつてゆく。

とにかく僕が小説なんか書けるわけがない、と思う。いくらコトカが涙を流しても、いくら申し訳ないと思つてコトカの気持ちに配慮したいと思つても、できないものはできない。

「とにかく今までの話を整理すると」と泣いているコトカに言う。
「オレは家にいて主夫をしていたわけだよ？それで、うん、よくわからないけど、小説を書いていて、コトカは仕事に行つてお金を稼いでいた、つてことでいいのかな？」

そう言つてもコトカは返事をしない。

「なんだか申し訳ないけどさ、オレだつて急にこんなヘンテコな世界にきて、次々とんでもないことが起こつて、それで急に小説を書けなんて言われてもできないよ。それはコトカには申し訳ないと

思うよ、ほんとに。もしかしたらオレにはコトカがいうように才能があつたのかもしれない。でもね、オレは小説なんか書けないし、書く気もしないし、どうやって書いたらいいのかもわからない。今回のカエル君は今までのカエル君とはちよつと違うんじゃないかな？」

「バカ、あなたは小説を書くのよ……」とコトカは泣き声で言う。「あなたはとても美しい文章を書けるのよ。素晴らしい作品を書けるのよ。カエルがケータイを初期化しちゃったから作品は残っていないけど、あなたには才能があるのよ。いつの日か成功してコトカを幸せにしてやるって言ったじゃない？」コトカはタバコを消すと、床にうつ伏せになつて息を詰まらせるようにして泣く。

「……悪いけど、それは無理だよ。今回のカエル君はまったく別のカエル君なんだ、ということはどうだろう？ そうだ！ 今回は才能のないバカなカエル君というのはどうだ？ 現実的でまともなカエル君。だいたい小説家なんてまともな奴じゃないよ。陰気くさいし、気難しそうだし、偉そうだしさ。最悪だよ。ミュージシャンでいいじゃないか。うん、今回のカエル君はギタリストだ。これから趣味程度でギターを始めよう。そのへんでお互い妥協しようじゃないか？ オレも仕事を探してまともに働くし、ふたりで働けばすぐに借金なんか返せるよ」

「1億。1億よ、借金。そんなのどうやって払うのよ？」

「イチオク？ 1億つてなんだ？ オレみたいなバカがどうやってそんなに借金を作るんだ？ 銀行も貸してくれないだろ？」

「私の死んだ両親の借金なの。正確には私の借金んだけど、それ

でもいいからって結婚したんじゃない……もう話すのも
疲れたわ。部屋に行って休むから」「コト力は起き上がってコト力の
部屋に入ってゆく。

「カエル様、カエル様」とケータイが僕に話しかけてくる。

「どうした？今それどころじゃないんだけど？」

「さきほどコト力様にご注文された品はいつごろお持ちいたします
か？さすがコト力様！お目が高いですね？どれもいい品ばかりです」

「悪いけど、全部キャンセルしてくれ」と僕は言う。

「申し訳ございませんが、カエル様。すでに商品は発注済みですの
で……、今更キャンセルというのは……違約金などが
発生してしまいます。かなり高額な商品ばかりですのでキャンセル
料も安くはございませんよ」

「とにかくキャンセルだ。人の話勝手に盗み聞きしやがって、勝手に
注文してんじゃねー！このクソやろう」

「カエル様、それは穏やかではありませんね。私どもはできる限りの
誠意を持ってお客様に喜んでいただくことと、」

「ふざけんじゃねえ、とにかくキャンセルだ」

「カエル様、ご忠告しておきますが我々もいつまでも下手に出てい
るわけではありませんよ。仏の顔も三度まで、くれぐれも口の聞き
方にはお気をつけてくださいませ」

「おい、なんだよそれ？なめてんじゃねえぞ！」

「おめえこそなめてんじゃあねえぞ、このヤロウ！？金返さんかい！日本刀食わせたるうか！」とやくざみtainな声が聞こえてくる。僕はあわててケータイの電源を切る。

どうしてこうなるんだ？一体僕が何をしたと言っただ？どうしてこうどんどんとわけのわからない話が出てくるんだ？僕は前世でものすごく悪いことをしたのだろうか？何もかもがまともじゃない。まともにも考えても僕には想像もできないような世界だ。借金1億だつて？それがどのくらいのお金なのか僕の頭ではわからない。1000万ぐらいまでならなんとか想像できるけど、1億というのは天文学的数字のように思える。

そこに追い討ちをかけるようにメールが届く。メールはジェフからだ。

「今夜は楽しみにしておるよ。間違いなく8時に伺うから（＾|＾）」とある。

僕はジェフと楽しく酒を飲む気分ではないことに気がつくけど、それはもうどうしようもない。僕が誘ったわけだし、ジェフも楽しみにしているみたいだ。

僕は大きいため息をつく。洗面所に行って水を飲む。コトカガリビングに置いていったタバコを吸いたいような気分になってくるけどひとまず我慢することにする。

これは呪われた人生なのだろうか？僕が一体何をしたというのだろうか？僕は何か間違いを犯したのだろうか？僕は何かを選んだわけじ

やない。僕をとりまくこの世界は向こうから勝手にやって来て、僕を飲み込んでしまったのだ。僕は車の中で目を覚ました僕に戻りたような気がしてくる。あそこにならまだ僕の選べる選択肢というのがあったかもしれない。そのまま逆を向いて別の場所に行くとか、砂漠の方に向かうとか、もしくは海に飛び込んでしまおうとか・・・今では窓の外には海も見えなくなっている。向かい側のマンションのドアが見えるだけだ。まるで世界の果てみたいな風景だ。

僕の人生はこれからどうなってしまうのだろう。でもまさかこれ以上ひどいことにはならないだろうと思う。仕事もしてないうえに結婚していて、おまけに借金まである。それ以上なにかひどい状況があるだろうかと考えてみようと思っただけで無理だった。今ですらすでに想像を超えた状況なのだ。それに僕が小説を書いているなんて・・・自慢じゃないけど漢字さえまともに書けないような僕にどうやって小説が書けるのだろうか。まるでギターのチューニングができないギタリストみたいじゃないか。

とにかく今夜はお客さんが来るのだ。こんな殺風景な部屋のまま招待するわけにはいかない。最低限の家具と、それに料理を準備しなくてはいけない。

窓の外ではまだ冷たい風がうなりをあげて世界を飛び回っている。あの風はどこから来て、そしてどこへ飛んでゆくのだろう。僕の耳はその音の行方を聞き取ることができない。世界は限定され、僕はいつの間にか世界の端っこに飛ばされてしまっている。ここで僕の耳に木霊するのは僅かな遠い稲妻の音だけだ。それでも僕は音楽を聴こうと思う。僕はケータイを拾い上げ、曲を選ぶ。

そしてまたボブ・マーリーが歌う。

「エブリシング・ゴナ・ビー・オーライ」と。

9

しばらくしてコトカが部屋から出てくる。そしてようやくいろんな細かい話を聞くことができる。コトカはまだ落ち込んでいるみたいだったけど、ゆっくりと記憶を撫でるように僕に話してくれる。コトカはわりといい血筋の家に生まれ大事に育てられて、世間一般から見れば良い暮らしをしていた。両親はヨーロッパ人と日本人の血族だった。でも事業に失敗した両親はコトカを残して自殺してしまい、借金だけが残されたコトカはしょうがなく「ブラック・サン」を購入し、この世界にやってきた。でもなぜだかわからないけど、コトカの住む世界は購入後も全く変わらなかったらしい。本当にコンピュータの中に住んでいるのかその区別ができなかった。

「救いを求めて『ブラック・サン』を買ったけど何にも変わらなかったわ」とコトカは言う。コトカに残された借金もそのままだった。

でもそれから間もなくコトカは僕と知り合う。他にも金持ちの友達や、そしてコトカのことを気に入ってくれる金持ちのボーイフレンドもいたらしいけど（まあ、コトカぐらいの美人ならそうだろうなど僕は思った）結局はすべてを捨てて僕と結婚することになった。

それまでコトカのことを気にかけていた男たちは結婚と同時に周りからいなくなつて、まさに僕とコトカはこの世界に二人きりで残された、というわけだ。そしておそらくコトカが金持ちのボーイフレンドを選んでいれば悩むことのなかった両親の残した借金が僕とコトカの前に大きく立ちはだかつたというわけだ。

それにコトカにとって僕と知り合つてこうゆう生活を始めるまで金銭感覚というものは別次元にあった。わかりやすく言うと一般的ではなかつたわけだ。1億というお金が普通に暮らしている人々にとつてどれくらいのお金なのかをコトカは自分で働いてお金を稼いでくるまでわからなかつた。欲しいものは何でも買ってもらえ、あつちのスーパーマーケットのほうが安いから遠くても安いほうのスーパーマーケットに行くという感覚がわからなかつた。安いということに一体どんな意味があるのか、それすらも考えたことがなかつた。

そうゆう暮らしのなかで僕はコトカにとって全く新しく、そして今まで出会つたことのなかつたタイプの人間であつたらしい。それまでのコトカにとって貧しさというのは単なる劣等感だつた。貧しさというものは生きる上においてただのマイナス要素であり、できればそんなものに関わりたくないと思つていた。それは誰でもそうだろうけど、コトカの場合元々貧しさからは無縁の世界にいたわけだからそのショックは強かつたのかもしれない。

でもコトカから言わせればそういったものを跳ね除けて僕は人生を楽しんで生きているように見えた。要するに知らない世界に生きる人に興味を持ったというだけなのかもしれない。全く自分からかけ離れたところで暮らす人、貧しさという中で何とか生きていこうとする泥臭さ、別の匂いということなのかもしれない。それでも僕は小説家になるという夢を抱き、懸命にこのどうしようもない世の

中を生き延びていた。コトカはそれに共感し、それから僕を支えるために墮天使となって僕のところへ舞い降りてきた、というわけだ。

コトカの話聞きながら僕は一体どうゆう人間なのだろうと考えていた。世の中のことを何も知らないイノセントな女の子がバカな男に捕まってしまうというのはよくある話なのかもしれないけど、僕はそれほど非現実的な人間ではない、と自分で思う。僕はふつうに生きたいのだ。小説家になるなんて下らない夢を追いかけていても、そんなものなおさら人生に失望するだけじゃないか。それに僕は小説家になるつもりは全くない。コトカみたいな美人のお嫁さんをもらうのは有り難いことだと思っただけでそれとこれとは話が別だ。もっとう現実的に物事を考えなくてはいけない。

コトカは僕が小説を書くことを支えながらなんとか昔のコネで紹介してもらった絵本を作る会社に勤めているとのことだ。もちろんコトカには絵本を作る才能があるわけではなく事務的なことを担当している。

「それでもさ」と僕はコトカに聞く。「とにかくオレが借金をしているわけじゃないんだよね？」

「そうよ」とコトカは答える。まだ泣いたためか少し目が腫れている。

「それならオレは自由なわけだよね？たとえばオレがコトカと別れたら借金に負われることもないってことだ。オレは自由の身なんだから？」

「そうゆうことなるわね。でも……」

「別にコトカと別れようってわけじゃないよ。一応確認ってことだ、ベイビー。暗い顔してもしょうがないだろ？それよりも今夜ジェフっていうオレの友達が遊びに来るんだよ。下らない人生でもとにかく楽しもうじゃないか。大丈夫なんとかなるよ、ノープロブレムだ」と僕は言う。そう言いながらも実は全然大丈夫だとは思っていない。

「そうね、いつまでも暗いことばかり考えていてもしょうがないもんね。とにかくこの部屋なんかしなくちゃね」

「オーケー、ベイビー。ようやくエンジンがかかってきたみたいだな。こうなったらオレはもう止まらないぜ。ドント・ストップ・ミー・ナウ。クイーンでも聴いちゃうか？」

「もう、相変わらずカエルはカエルよね」

「とにかくもつとましな部屋にしよう。そうだ！畳を部屋中に敷き詰めようぜ。それにちゃぶ台だな。着物も着ないとな。当たり前だけど部屋のなかは土足厳禁だからな。オレは死ぬときは畳の上で死にたい」

「何時代の話してるの？もう日本の製品なんて作ってないからすごく高いのよ。日本の文化は滅んじゃったの」

それから僕はケータイを操作して家具や料理品、その他生活必需品を注文する。注文確認の決定ボタンをクリックするとすぐに部屋に家具が現れ少しは部屋らしくなる。もちろん日本の家具なんて高いものは買えなかった。最低限の必需品だけだ。それから料理に必要な調味料、食材も注文した。あつという間にそれらが冷蔵庫の中に入っている。物質はデジタルに還元され、世界に現れる。

8時ちょうどにジェフが部屋にやってくる。僕はスシを作つてジェフをもてなす。なんと行っても外国人にはスシを食べさせておけば間違いないとどこかで聞いたことがある。ジェフは上機嫌で、いつものようにビールを何杯も飲み、コトカのことをアジアの妖精のようだと褒めちぎる。ゲイシャの奥さんがいるなんてカエル君がうらやましいと何度も繰り返す。

ジェフはそれからなぜ自分がこの世界にやってきたのかということと話始める。

ジェフは昔船乗りをしていた、とジェフは語り始めた。そう言われるとジェフには長い間海と関わってきたサーファーのような雰囲気があることに気が付く。

ジェフは大きな船で何家族と一緒に暮らす遠洋漁業をやっていた。子供たちや仲間に囲まれ彼は貧しくても幸せな日々を送っていた。まるでノアの箱舟のようにそこには彼の愛するべきものすべてがあつた。仲間の下らない冗談に、妻や子供の幸せな微笑み。それは彼が守るべきものであり、つらい人生送りながらもなんとか手にした小さな楽園のような場所だつた。

そこへある静かな夜に嵐がやってきた。でもそれは嵐という形をした何か別のものだつた。彼らはプロの船乗りであり、嵐が来るときにはそれなりの準備というものをする。嵐がやってくる前には空気ががらりと変わる。まるでマイルス・デイビスがゆっくりとトランペットに魂を吹き込む時のように空間の雰囲気は別次元へと飛ばされる。彼らは経験的にその匂いを感じ取り、嵐に備える。

でもその夜は誰一人として嵐が来るとは予測できなかった。星たちは水平線の中心にいる彼らを照らし出すかのように空に輝いていた。

そしてジェフは嫌な夢を見た。悪夢から覚め、船のデッキに行ってみると船は空を飛んでいた。ジェフは空を飛んでいるわけではなく、大きな波が船を押し上げていたことに気が付き、眠っている仲間を大急ぎで起こした。やがて爆発音のようなものが聞こえてきて、ジェフは妻と子供の手を握り救命ボートに飛び乗った。しかし目が覚めてみるとジェフは水平線しか見えない海の真ん中に救命ボートに乗って一人で浮かんでいた。見上げると憎らしいほど太陽が輝いていた。それから一人だけ助かったジェフは「ブラック・サン」を購入しこちら側の世界にやってきた。

じつくりと聞くとそれは興味深そうな話だった。僕はジェフができるだけ心を開いて僕とコトカに接してくれていることがわかった。朗らかな笑顔、そして打ち解けた会話。ジェフの話は相当長いものだった。

でも僕は全然ジェフの話が耳に入らなかった。延々とジェフが話し続ける隣で僕はずっとこれからどうすればいいのだろうと考え続けていた。ジェフの話はまるでオルゴールのように記憶のどこかをさ迷ってゆつくりと消えていっただけだった。一体これからどうなるのだろう？僕は誰で、どうしてこんなところにいるのだろう？

ジェフは帰り際に今日はどこか具合でも悪いのかと僕に聞いた。僕はなんでもないと答えた。ジェフは「井戸の中の蛙大海を知らず、されど蛙は空の高さを知っている」と言い残していく。

それからの日々はこれといった変化はなく過ぎてゆく。まるで読みかけている本にしおりを挟んだように僕の中の時間が一時的にそこで止まってしまふ。昼間コトカが仕事に行っている間、僕は部屋にいて音楽を聴き部屋の掃除、洗濯、料理をし、気が向くと散歩に行つて、夜になるとクラブにいつてビールを飲む。果てしないその繰り返しだ。とにかく僕はこの世界のことをじっくりと考える時間が必要だと思つた。ゆっくりとこの世界に自分を慣らし、そして一体何をするべきなのかということ。

クラブに行くといろいろな人と出会うことができた。さまざまな職業、人種、そして個性。僕は人々が語る世界に耳を傾け、そして少しずつ世界のことを学んでいつた。でもやっぱりここがコンピュータの中の世界であるということにはいつまで経つても納得できなかった。そして僕が知りえた範囲では、この世界の人はそんなこととは特に気に留めていないみたいだ。テレビを見て、酒を飲んで、これといった問題を抱えず、何事もなく日々が過ぎてゆけば世界は回っているのだと信じているみたいだ。

何度かコトカにも一緒にクラブに行かないかと誘つてみたけど、「下らない男に声をかけられるから」と言つて断つた。どうやらコトカはクラブに行くのが好きじゃないみたいだ。僕は借金している上にろくに仕事もしていないのでコトカに引け目を感じていたけど、コトカと話し合うといつも口論になつてしまつた。だんだんと僕はコトカと顔を合わせるのが嫌になり、僕は夜遅くまでクラブにいて時間帯をずらすようになっていつた。僕はやらなくてはいけないこ

と、それははつきりとわかっていた。僕は働いて、借金を返さなくてはいけない。でも一体どんな仕事をすればいいのか、僕にはさっぱり検討もつかなかった。僕は目の前に突きつけられたものからずっと目を背け続けていた。それが何ヶ月か続いた後、ある日の夜僕は一人の男と出会うことになる。

いつものようにクラブのカウンターでビールを飲んでいると「ハロー」と隣の男が僕に話しかけてくる。

クラブの中の音楽はエイペックス・ツインの「ウィー・アー・ザ・ミュージックメーカー」がかかっている。

男がカウンターのところに来てケータイを注文する機械にピッと掲げるとボーイが赤ワインを運んでくる。

「ハロー」と男はもう一度僕に話かけてくる。

その男をみた途端に僕はこの男は日本人ではないかと思う。見るからにアジア人だし、そうゆう雰囲気がある。男は黒い髪を整髪料でしっかりと固め、痩せた体にあっぴたりとしたスーツを着ている。何かスポーツでもしているみたいで頬はげっそりとして目つきは鋭く、顔つきはさっぱりとしている。アクセサリーは見るからに高価そうな時計を腕にひとつだけ付けている。

「アー・ユー・ジャパニーズ？」と僕は英語で言う。

「そう見えるかい？まあ、そう見えてもしょうがないかもしれない。私の祖先は中国人だからね。おそらく似ているところはたくさんあ

るかもしれない」

男はそう言うとワインを口元に運ぶ。男はそうとう金持ちなのかワイングラスもクリスタル製のピカピカに磨かれたものだ。僕がいっつも飲んでいる汚いグラスに入ったビールではない。

「ヨー、オレまだここに来てから日本人に会ったことないんだよね。どこかで見かけなかった？」

「日本人？君はあの日本人の血族か？てつきり中国人かと思ったよ。まあ、このところ全く見かけないね、日本人は」日本人？と言ったときに男はとても驚いた表情をする。

「オレ、オレ以外の日本人探しているんだけどまだ会ったことないんだよね」

「日本人はほとんど滅んじやったからね。我々中国の経済的勢いに勝てなかったし、日本はどんどん尻すぼみになっちゃったから」

「なに？それ？オレ聞いたことないよ」と僕は言う。

「なんだ？そんなことも知らないのか？ちょっと図書館でもいって歴史を調べてみたほうがいいんじゃないか？」

「なんだ、ヨウ？教えてくれてもいいじゃない？おじさん暇なんだからそれにここだけの話だけどオレって人から歴史の話を聞かないと生きていられないっていう複雑な病気をかかえているんだ。おじさん、そういうのって大変だと思わない？」

「おじさんとはなんだ！オジサンとは。私はまだオジサンではない

！」と男は言う。

「へえー、見かけよりも若く見えるね、あんまり人生苦労してないんじゃない？」

男はすぐに答えずにジャケットの内ポケットから煙草とライターを取り出すと火を点けて一呼吸おいた。そのへんの女の子なら「かっこいい」と思うような場面かもしれない。男には「金持ち」というようなオーラが漂っている。

「それよりも私の名前はチャンと言うんだ。とりあえず、この珍しい出会いに」と言ってチャンはワイングラスを僕のほうに差し出す。僕は自分のビールのグラスで乾杯をすると二つのグラスがぶつかった。「チーン」という心地よいクリスタルの音がチャンのグラスから聞こえる。

「失礼だけど、私はあまり時間がないんだ。歴史の話は自分で図書館でも言っただけで調べてきたらどうだい？そのほうが自分でいろいろと考えることができるだろう？本を読む、という習慣にもなるし。そうそう、習慣といえば日本と中国には共通した習慣がたくさんある。そういうのを調べてみるのもおもしろいだろう？良かったら私のケータイが使っている図書館のガイドブック機能をあげよう。それでいいだろう？私は次のアポイントメントがあるんだ」

「めんどくさいこと、オレって大、だい、ダイ、大嫌いなんだああああ。少しぐらい教えてくれてもいいだろう？おじさん？」と僕は言う。

「君がそこまで言うのならしょうがない。次の予定を多少変更するぐらいのことはできる。それぐらいできないとビジネスマンは務ま

らない。それならあっちのボックスの席に座らないか？もちろん特別料金は私が払うよ。それにとりあえずおじさんはやめてくれ」

「イエース、オレって、けっこう、ラッキーなんだよね、こうゆうことに関しては、チャンだったよね」と僕は言う。

チャンに連れられてクラブの奥のひな壇のようになったボックス席の一番上ある豪華なソファに移動する。僕にはよくわからないけどそのソファはとても高級そうで座ると身体力がふんわりと抜けるように僕を包み込む。目の前にあるテーブルも一枚板のどっしりした歴史のあるテーブルのように見える。それにテーブルに運ばれた高そうなウイスキーとワイン。僕とチャンがソファに座るとウイスキーを持ってきたテレビに出てきてもおかしくないぐらいモデルのような美人二人がサツと僕とチャンの間に入って座る。一人は長い髪のプロンドのレースクイーンみたいな女の子で、もう一人のほうは同じく美人だけど上品な色気があるような長い黒髪の女の子だ。まるでキャバクラに来たような気分になる。そこに行けば簡単に恋という幻想に酔うことができる。それがたとえ夢の話であろうとも、システムに組み込まれた巧妙な疑似体験だろうと僕が楽しむことができる。できればどうでもいいのだ。

綺麗な女の子に囲まれた僕は少し緊張してしまう。僕は自己紹介をしてみんなに僕の名前を教える。

「どうだい？なかなか居心地がいいだろう？」とチャンが言う。

「そうっすね、でもこうゆう豪華なところって来るの初めてだから、ちよっと緊張しちゃうなあ」

「ああ、全然緊張なんてしなくてもいいのよ。そんなのするだけ

無駄なんだから」とブロンドの女の子が僕の膝に手を置いて言う。チャンの向こう側に座ったもう一人の女の子もにっこりと僕に微笑む。まるでリラックスすればいいのよ、というようなふんわりとした笑顔を浮かべている。それは本当の微笑みなのか、商売上の微笑みなのか僕にはよくわからない。どちらも美人だけど、僕は黒髪の女の子のほうがかわいいなあ、と思う。

女の子たちは手際よく僕とチャンに飲み物を作ってくれる。僕はいつものようにビールを頼み、チャンはワインを頼む。僕が視線をクラブのほうに向けるとひな壇の下のダンスフロアではたくさんの人々が踊っているのが見える。

音楽はサム・ポールの「アイル・テイク・ユー・ゼア」がかかっている。

僕はクラブの大音量の渦から遠ざかった薄暗いVIPの席に座ってしばらくクラブで踊る人々を見ている。人々が踊っているのを見ていると僕は少し混乱してしまう。そこにはまるですべてが映し出されているかのように思えてくる。人々はさまざまな人生を送っているのだからけど結局はこうして踊っている。その中には今日の午前中に手術をしていたドクターもいるのだから、学校の教師や、セールスマン、主婦やタクシードライバーまでいるだろう。僕は彼らの向こう側にある生活の匂いを感じることができる。そこにある匂いが僕の記憶と繋がっているような気がしてくる。

「いいかい」とチャンが僕に向かって言う。それで僕はチャンのほうを向いて話を聞く。

「私はカエル君のために時間を取った。ビジネスで相手の時間を取るということは当然ながら利益、金の問題ということになる。それ

は覚えておいてくれ」

「え、でも、オレって金、またいきなり金の、金、カネのことしか頭にないのかな、オレって、とにかくカネの話で悪いんだけどさ、オレって金持ってないんだよね。金ないし、仕事もしてないし、さらに結婚してるんだ」

僕がそう言つと「まるでヘレン・ケラーの3重苦みたいだな」とチャンは答えて大笑いする。二人の女の子もそれに合わせて笑う。僕はさらに少し緊張してしまう。

「でもその3重苦ってなんだよ？」と彼らが笑い終わるのを待つてから僕は聞く。

「悪い、悪い、つい笑ってしまった。3重苦というのは、見えない、聞こえない、話せないってやつさ。見猿、聞か猿、言猿、というのがあったらどう？あれと同じだ」

「ふーん、よくわかんないけど、大変みたいだな」

「それは自分のことでしょうか？」とブロンドの女の子が僕にツッコミを入れる。そうするとまたチャンと二人の女の子は笑う。

「君はなかなかおもしろいキャラクターみたいだね」とチャンが僕に向かってそう言う。「なかなか将来有望じゃないか。冗談のひとつも言えないビジネスマンは、いやそうじゃないな、冗談の大切さを知らないビジネスマンはビジネスマンではない、というのが私のビジネス哲学のひとつだ。日本は先進国の割には国際感覚がまるでなかったし、ろくに英語も喋れなかった。でも君の英語はなかなか上手じゃないか？」

「英語はジェフっていう友達に習ったから少しは上達したかもしれない。でもオレってあんまり頭良くないんだよね、はっきり言ってあんまりビジネスの話なんかされてもよくわかんないんだ、実際のところ」

「そうか、それならビジネスの話はひとまず置いておこう」チャンはそう言うと、グラスを傾けるようにしてワインを少しだけ飲む。そして黒髪のおとなしい女の子の細い肩に腕を回す。

「この子のことどう思う？」とチャンは僕に言う。

「綺麗、んんん、かわい子ちゃんだと思っぜ、ヨウ、バリバリのグリグリ、イカシてるって感じじゃん、君のハートに釘付けだぜ！まだ網にかかったばかりの魚みたいにピチピチだもん」僕は答える。

「そうか気に入ったか？」

「気に入ったなんてもんじゃないぜ、ダンナ。こんないいオンナとしゃべりやっちゃったら、胸に7つの傷をもったケンシロウでさえ『我が生涯に一片の悔いなし』って感じだぜ」

そう言うと周りのみんなが大声で笑う。

「よかろう、君はなかなか見所があるな。ところで君は女を知っているのか？」とチャンが言う。

「なんだって、ダンナ？オレは、耳、耳、ミミが遠くてのーーーーー
ー？」

「カエル君、君は女と一発やったことはあるのか？と聞いているんだ？」

「マツタク、聞こえねーなー、なんて言っただけ？」

「君、ドリフターズじゃないんだぞ、君は今までに女とセックスしたことはあるのか、と聞いておるんだ！」

「ゼンゼン、聞こえねーよー、ベートーベンみたいに何も聞こえねーよー、なんて言っただけだ、ダンナ。もっと大きい声で言っただけねえがあ？」

「貴様！ふざけるのもいい加減にしゃがれ！おまえのチンポをオマノコに突き刺したことはあるのか？って聞いているんだ？」

「ねえ、ひょっとしてカエル君ってドーティなんじゃない？」とブルンドの女の子が言う。

「あ、おめえさん、そつたらことあるわけねえでねえの。だたオラ、おらは、ききききききききききおくくくくくく、がああああああああああああ」

「おい、どうした？大丈夫か？」とチャンが言う。

僕は呼吸を整え、ビールを飲む。

「オレってときどき変な発作が起こることがあるんだ、でも、ノー・

プロブレム、問題ないぜ、いや？モウマンタイっていうんだっけ？中国語では？」

「おい、君、カエル君？中国語も話せるのか？」

「いや、よくわかんねえけど、話せるのかもしれない、ウォー・シー・ニーベンレン」

「おい、それは『私は日本人です』っていう中国語じゃないか？おい、君はますます見所があるじゃないか？これはおもしろい夜になりそうだ。私は今夜のスケジュールをすべてキャンセルするよ。どうだ？今夜はじっくりと楽しもうじゃないか？」

「オーケー、オレなら全くモウマンタイだな。我、暇、達人」

と僕は中国語で言う。自分で言ってびっくりするけど、僕は中国語が話せるみたいだ。

「ナマ・サヤ・チャン・ニヤ。ア ندا・オラン・ジャパン・ニヤ？」とチャンが言う。

「ヤ！サヤ・オラン・ジャパン」と僕は答える。

「おいおい、おい、おい？なんだ？君はインドネシア語も話せるじゃないか？私にはインドネシア人の血も混ざっているんだ。どこで君はインドネシア語を覚えたんだ？」

「サヤ・テイダ・タウ。デイダ・インガット・ニヤ。トウタピ・テイダ・アパアパ」と僕は言う。

「ねえ？カエル君、今、なんて言ったの？」とブロンドの女の子が
チャンに聞く。

「『オレは知らない、覚えていない、でも問題ない』って言ったんだ。これはますます楽しい夜になりそうだぞおおおおおおおお
おお」

とチャンは少し興奮ぎみに言う。

第三部 完結

11

チャンはケータイをポケットから取り出して何やら操作する。

「さあ、これで今夜の予定はすべてキャンセルした。といつてもそれだけ私がカエル君を見込んだからだ。それで、カエル君は歴史の話が聞きたいんだっただね？」とチャンは英語で言う。

「ああ、オレってさ、歴史の話聞いていないとダメなんだよね。なんかこう意識がグラグラしちゃってさ、実は医者にも進められているんだ。歴史の話聞きなさいってね」

「そうか、そしたらとりあえず私の過去の話をしてあげよう。それでだいたいの流れはわかるはずだ。それにこれは私の経験談だから歴史の本を読むよりもわかりやすいかもしれない。まあ、とりあえず何か飲み物はいいかね？」

「ああ、ビールでいいよ。オレってさ、あまり金持っていないだろ？下手に高いもの口にしても味がわかんないんだよね」僕がそう言うのと隣の黒髪の女の子が新しいビールを僕に作ってくれる。

そこでクラブの中にはメタリカの「ワン」という曲が流れ始める。

「お、この曲オレ好きなんだよね。アイ、キャント、リメンバー、
エニシング」と僕は英語で最初の小節を歌う。

「いいかな、話始めても？思ったよりも長い話になるかもしれない
とチャンが僕に聞く。

「オーケー、オレって暇の達人だからな」

そうしてチャンは話始める。

「私は昔、日本の大手電機メーカーで働いていたんだ。じゃあ、そ
の変のところからいこうか」そう言っただけでチャンはグラスを口に運ぶ
とてもゆつたりと、そしてスケジュールという時間から解放され
た私はこんなにも余裕があるんだとその素振りと言っているみたい
に。

「私はその会社の中でかなり高い地位にいたんだ。私は若く、そし
て中国人であつたにもかかわらずね。それだけ私には能力もあつた
し、そして何よりもとにかく人よりもたくさん働いた。それが私の
成功の秘訣だ。とにかく働く、ということ。人の何倍も頭を動かし、
そして身体を動かす。それが成功の秘訣だ。と、簡単に言っしま
えばそのとおりなんだが、これを実行するのは並大抵のことではな
い。しかし、私はそうして会社でもみんなに認められ、評価されて
いた。下らない仕事は山ほどあつた。いや、楽しい仕事なんてもの
はほとんどなかった、と言ったほうが正しいかもしれない。私のや
っていることはほとんどが下らない仕事だつた。でも私はなんとか
日々を乗り越えていた。

でも、そこにある問題が起こつた。我が社が新しいMP3プレイ
ヤーを発売することになつたんだ。発売前の段階で商品が私のとこ

るに届いた。本当はそんなこともあつてはいけないことだったんだ。というもの試作の段階で私のところに商品が届かなくてはいけないかった。要するに手違いがあつたんだ。そして発売前の段階でそのMP3プレイヤーが私のところに届いたときにはもう手遅れだった。私は愕然とした。そのくらいその商品はダメだったんだ。私はこんなものを発売すれば我が社はもう終わりだと思つた。そして私は私の権限が届く範囲の限りにおいて断固反対した。こんなものを発売したら我が社はもうやつていけないと重役会議で発言した。しかし、私の上司たちにはそんなことさえわからなかつた。頭の悪いクズどもだとは思つていたけどまさかあそこまでアホだとは思わなかつた。結局どんなに私が叫んでみたところで私は大きなシステムの中のほんの小さな部品にしかすぎなかつた。もしかしたら私が中国人ということも関係していたのかも知れない。結局ところ人種差別や国境意識。人々はなかなか変わらないってことさ。そこで私はいろいろと考へた。その頃にはもう結婚していたし、子供もいた。給料に関しては同じ同世代と比べても申し分なかつた。他人からみれば順風満帆というところだっただろう。でも私は悩み始めた。せつかく良い大学を出て、一流の会社に勤めて、必死で頭を下げながらやってきていたことの意味が私にはどうしてもわからなくなつてきた。結局社会の中では良い大学を出ようが、そんなものはどこの階級に属するかを決めるだけであつて、社会の中では仕事ができる奴、がんばつて仕事ができる奴が生き残つていくんだ。我々の国もずいぶんと受験戦争でダメージを負つていたからね、あの精神戦争ではかなりの人間が死んだ。私も大切な友人を何人も失つた。厳しい受験戦争を乗り切り、そしてさらに厳しい社会の中で我々は頭を下げながら必死にやつていた。でもいざ立ち止まつて自分の過去を振り返るとそこには何の意味もなかつたような気がした。

しかも会社は『我が社の社運をかけて』というキャッチフレーズまで掲げてそのMP3プレイヤーを発売したんだ。私の頭がおかしい

のか、奴らの頭がおかしいのかだんだんわからなくなってきた。どこに生きてゆくことの意味があるのかわからなくなってきた。それが精神戦争の火種だったんだ。私の元にも何人も誘いが来た。私の友人たちも生きる意味を失い、精神戦争に出かけていった。そんな下らない社会の中で生きてゆくことに意味はあるのか？そうゆう問いが生まれたものから戦争に賛成し、そして崖から飛び降りていった。殉職者たち。そして彼らはみんないい奴らだった。死んだ奴はみんないい奴だった。今にして振り返って思えば彼らのほうがまとも、と呼んでもいい人間だったかもしれない。私は今もこうしてその世界の狭間に一人で座っているが、彼らは大きな声で『ノー』と叫ぶとその暗黒の崖に転がり落ちていった。そうして私は多くの友人を失い、会社を辞めて独立してこうなった。結局私も悩みに悩んだ末に、戦争には参加しなかったんだ」

「ヨウ、でもさ、どうしてそれが日本という国の崩壊に繋がるんだ？」と僕は聞く。

「考えてもみたまえ、我々中国と日本では人口のベース、つまりマーケットの大きさが全く違ったんだ。どんどん社会のシステムも弱肉強食という人間の攻撃本能に近い形に変わっていった。つまり社会の中で生き残れない奴を生き残れる奴が支配する、という枠組みがたんだんとクリアになっていった。中国はどんどんと急成長していったからどんどん物質社会になっていった。多くの人が多くの新しい電化製品を買った。その大きなマーケットは世界中の電気メーカーがまさに戦争のように争っていた。でもそんなMP3プレイヤーを発売する私の会社には全く勝ち目がなかった。まさに私の思うとおりになったわけだ。」

それに日本と中国の間には歴史的な問題が色濃く残っていた。2次世界大戦のときの生臭い空気をなかなか拭い去ることはできな

った。それほど歴史の問題というのは簡単なものではない、ということだろう。誰が一人『もう終わったことだからもういいじゃないか』と言ったところで片付く問題じゃないからね。結局あの精神戦争でも日本と中国の戦いはひどいものだったらしい。でもそれはあくまでも向こう側の世界のことだからね。私の家族は『ブラック・サン』を買ってこちら側に非難したけど、向こうの世界はすでに消滅しているかもしれないね」チャンはワインをまた一口飲むと話を続ける。

「私が会社を辞めて独立しようと思った最大の理由は酒だった。私には会社の上司たちと一緒に酒を飲まなくてはいけないのがどうしても嫌になった。絶えられなくなってきたんだ。あのバカどもが口を大きく開けて馬鹿笑いしている顔を見ると吐き気がしてきた。でもそれも仕事だから付き合わなくてはいけない。これは死ぬほど退屈だ。あいつらはとにかく自分を正当化したいだけなんだよ。やつらの下らない話を酔っ払いながら延々と何時間も聞かされるんだ。あれはまさに牢獄と呼んでもいいかもしれない。そうゆうのに私はもう我慢の限界が来た。そしてある晩会社のパーティのときにたまたまあのMP3プレイヤーの話になった。上司は酔っ払っていたし、半分冗談のつもりで私に言ったのかもしれない。でも彼の一言が私の我慢の壁を突き破った。そして気がついたら私は手に持っていたワインを彼の顔にぶちまけていた。それで終わりだった。私はこうして死んでいった友を思い返して女たちと一人で酒を飲む。人の生き血というワインを飲み、死んでいった友を思う、それが今の私だ。でもそれで私の人生というものが幾分救われたと言えるかどうかはわからない。これはまさに死ぬまでわからないのかもしれない。もしかしたら前よりも悪くなっているかもしれない。それでも私はワインを飲み、金を人の何倍も使い、人生を出来るだけ楽しく暮らせるように心がけている」

「チャンさんて素敵な人生歩んでらっしゃるのねー？」とブロンドの女の子が言う。

「そうかな？そう聞こえるかもしれない、でもここにいる私はすでに死んでいるんだ」そう言ってチャンが笑う。

「えー？わけわかんないー？」とブロンドの女の子が答える。

「ところでカエル君？ここまでの話はわかったかな？」

「オウ、だいたいなー」

僕は頭の中でざつと話をまとめてみる。とにかく日本は世界との経済争いで勝てなかったということだろう。経済が弱くなれば当然国としての運営は難しくなってくる。

「君は男だろ？だったら牙は抜かれてはいけない。社会の中でも、どんなに忙しくても、男は牙だけはもつていなくてはいけない。とは言ってもよだれを垂らしたむき出しの牙じゃないよ。スマートでミステリアスなバンパイアみたいな牙だ。それをちゃんと忘れないことだ。・・・まあ、今夜は少し喋りすぎたかな？そろそろ本題に入るんじゃないか？」

「本題？ホンダイってなんだよ？」

そこでチャンはものすごく嬉しそうににっこりと笑う。いつもは真面目な顔をしているけど、笑った時はすごくエロそうな笑い方をする。

「ギャンブルだよ、カエル君。私も随分と歴史の話をしてあげたか

らそろそろビジネスの話を始めようじゃないか？」

「ギャンブル？自慢じゃないけど、オレってここぞ、ってときには必ず勝負に負ける呪いを身体にインプットされているんだ。勝つことよりも負けないことを考えなさいって言われたような気がする」

「とにかくギャンブルの内容だけでも聞かないかね？その後によっぱり嫌だったら辞めてもいい、どうだい？」

「ああ、オーケーだぜ。それなら悪い話じゃないよな？チャンスの神様には前髪しかない、とかマルチ商法みたいなことは言わないでくれよ」

「とりあえず、だ」と言ってチャンはおとなしい黒髪の女の子を見る。「この子のことは気に入ったって言ったよね？」

「ああ、ブリブリのかわいい子ちゃんだもんな」

「この子は実は聾啞なんだ。人の話は理解できるけど話すことはできない。そして彼女は優秀なマッサージの技術を持っている。人間の持つ五感のうちどこかが遮られている場合、またその別の能力が常人と比べて飛躍的に発達している、ということがある。中国の医学では人間の身体はひとつの小さな宇宙であると考えられている。そこでまず最初に彼女のマッサージを受けてもらう。もしかしたらマッサージによって君の中に眠っている何かが目覚めます、という可能性だってあるだろう？そしてこれだ！これを見たまえ」

そう言ってチャンは黒髪の女の子のドレスの袖をまくる。そこにはタトゥーが入っている。

「これはリンニャンという、宇宙を現す印だ」

タトウーは丸い円が波を打つ線で二つに割れていて、一方は白い肌、一方は黒で塗られている。そして白の中に小さな黒の点があり、黒のほうにも小さな白い点がある。

「これにはいろいろな意味が隠されているわけなんだが、とにかくだ。マツサージを受けた後にはこの子と一発やってもらう。カエル君が男になるチャンスを私が与えよう、というわけだ。これが私のギャンブルの提案だ」

「はあ？」と僕は言う。「オレが？この可愛い子ちゃんとやる？・・・」

「カエル君、さっきみたいなの冗談はもういいだろ？私もいろいろと喋ったじゃないか？君も私の言いたいことはわかるはずだ」

「なんだよ？それ？ゼンゼン、わかんねーな、ダンナ。また声が小さくなっていったみたいだ」

「だからさああ、さっきから言ってるじゃないか？この子にマツサージしてもらって、その後この子とセックスすればいいんだよ。無事君がそれを潜り抜けることができたなら君の勝ちだ。できなければ君の負け、とまあ、そうゆうことだ。わかっただろ？」

「ダンナ、イマイチわかんねーな。どうしてオレがこの子とセックスするんだ？」

「だからああああ、さああああ、それがギャンブルだって言うてるじゃ、ないかあー！」

「だって、そんなのめちゃくちや簡単じゃん？だってこの女の子とセックスすればいいだけ、だろ？」

「カエル君がそう思うのなら、賭けてみればいいじゃないか？ということは、決まりかな？」

「でもなあー、なんとなく………」

「オイ、オイ！ここまで来てまさか男になれない？って言うんじゃないだろうね？」

「そんなことはないんだけどさ………ちょっと個人的な問題が………」

「当たり前だ、セックスの問題が個人的な問題じゃなかったらどうする？まさか家族ぐるみの問題ってわけにはいかないだろう。ママー、この宿題わからないから教えてー、なんてこともできない。これは極めて個人的なことなんだ」

僕はしばらく考える。とくに悪い条件ではない、というよりもこれはものすごいチャンスだと考えていいかもしれない。

「ところでさー、オレが勝ったらどうなるの？」

「ああ、そうだったな、ギャンブルの条件を決めよう。カエル君が買ったら………そう、君は借金しているんだろっ？いくらぐらいだ？」

「さあ？1億以上あることは確かだけど」

「そうか、私にとっては鼻クソをほじるぐらいの額だが君にとっては切実な問題だろうね？」

「かなり」と僕は答える。まさに僕にとってはそれが一番の問題なのだ。

「そうか、そしたら君が勝ったら2億あげよう。借金がなくなる上に1億の金を手にすることになる。さらに君を見込んで私の会社に入れてあげてもいい。まあ、それは勝ったときに決めればいい。私のほうもこの賭けに勝てないようではカエル君には会社勤めは無理かもしれない、と考えるからね。確かに君には才能はあるかもしれない。5、6年も私の元でしつかりと働けば私の右腕ぐらいにはなれるかもしれない。そうすればもう金の心配はしなくてもいい。まさに人生をかけた大勝負をするわけだ？どうだい？」

「でもさ、オレが、もし、もしだよ、負けたらどうなるのかな？」

「そうだな………とりあえず私は君と会えて楽しかったし、君から金を取るのは少々良心が痛む。そうだね、今夜のこの特別料金を払ってくればそれでいいよ」

「チヨ、ちよつと、ちよつと待ってくれ、ダンナ。だいたいいくらぐらいなんだい？」

「なんだ？まさか賭けに負けるつもりじゃないだろうな？」

「そんなことはないけど、もし、ってことがあるからな。それにこれ以上借金が増えることんでもないことになる。オレはケツの毛どころか、ケツの穴までなくしてしまうかもしれない」

「とりあえずお金のことはいいじゃないか？とにかくやるのか？やらないのか？」

「やる！」と僕は答える。「オレはやるぜ！これはものすごい戦いだ。性欲と金という二つの欲望のぶつかり合いだな。オレはやるしかない……ってその子が聞いているのに」

と言って僕は黒髪の女の子のほうを見る。彼女は相変わらずにっこりと笑ったままだ。

「そうか、決まりだな。そしたらこうゆうことは早いほうがいい。この子が部屋に案内してくれるからカエル君はこの子に着いて行けばいい。じゃあ、よろしく頼むよ」

チャンがそう言うとスツと黒髪の女の子が立ち上がる。僕は少し緊張してしまう。

「私はここで待ってるからね。それとひとつだけ私から条件を出す。何があってもカエル君、彼女に話しかけてはいけないよ。簡単だろ？じゃあ、楽しんで」とチャンは僕に言う。

僕と女の子はクラブの中にある特別の個室のようなところに案内される。曲がり角があるたびにそこにボーイが立っていて道案内をしてくれる。まるで王様になったような扱いだ。僕はシャワーを浴び、個室のベットに裸で寝転がって女の子が来るのを待っている。そしてこれはものすごいチャンスなんだぞ、と少し緊張しながらも自分に言い聞かせる。

広々とした個室は落ち着いた感じの豪華な部屋で、静かなインド音楽のようなものが流れ、柔らかな間接照明がぼんやりと灯っている。まさにマッサージの部屋、というような感じだ。ベッドのシートからはたっぷりと太陽の光を吸い込んだような匂いがする。なんだか本当に王様になったような気がしてくる。

一人になって僕は初めて冷静に僕の置かれた状況を考えてみる。勢いで賭けにのってしまっただけ、僕はコトカを裏切っているということになるのではないだろうか。そう思うと急に僕はコトカに対して申し訳ない気がしてくる。僕はこんなところで一体何をやってるんだろう？本当にこれは僕が望んでやっていることなのだろうか？僕はだんだんと不安になってくる。考えれば考えるほど僕のやっていることはまともじゃないような気がしてくる。可愛い女の子とセックスをして、その上借金まで帳消しになって、僕にとっては多額のお金が入るのだ。どう考えてもこれはまともではないような気がする。じゃあ一体まともってどうゆうことなんだろう？

とにかく考えてみてもしかたがない。チャンが言うようにこれはビジネスなんだと僕はひとまず自分を無理やり納得させる。これはビジネスチャンスなんだ、と。

そうすると黒髪の女の子がチャイナドレスで登場する。ものすごくセクシーだ。まだ僕が学校に通っていたころに気がついたら教室の誰かが鼻血を流していた、みたいな気分になる。

女の子はそつと僕のところへ近寄って来て、僕の身体に触れる。そして女の子はマッサージを始める。綺麗なものにはトゲがあると言うけど、そのマッサージはものすごく、時には歯を食いしばらなくてはいけないぐらい、痛い。僕はときどき声を出しそうになるの

を我慢しながら女の子が僕の全身をマツサージしてゆくのを必死でこらえている。一度痛いほど押し付けたあとは穏やかな波のように女の子は僕の身体を撫でてゆく。それが僕の全身で繰り返される。僕の耳には遠ざかる意識と連動するようにインド音楽が聞こえる。

僕は女の子が僕の肩を叩くので目を覚ます。僕はどうやらマツサージの途中で眠ってしまったみたいだ。気がつくと女の子はすでに裸になっている。

女は君の性器を優しく撫で、口に銜える。そうして君は女の身体を思い出す。写実主義の画家が描いた精密な油絵のように皺のひとつひとつ、体毛の一本一本まで見落とさないように。彼女の身体だけではなく君と彼女の匂いが染み込んだベッドや、君の部屋の照明、セックスのあとの気だるさ、その季節の湿度にいたるまで細かく君は思い出す。

女の体のラインを思い出し、脇の下の影や、わき腹のたるみ、白くやわらかいふくらはぎ、不器用な足の指、そして女の陰毛。君の指先に触れた彼女の性器の温度を思い出し、鼻のなかに残るその匂いを思い出し、吸い込まれてゆく君の性器を思い出す。

連続写真を一枚一枚丹念に眺めるように君は彼女の表情を、僅かな感情のブレを思い出す。ある写真では大きく目を見開きながら顎をしゃくり上げ、別の写真ではしっかりと目を瞑って下唇を噛んでいる。彼女の表情は激しく君を求めている。

そうしていつの間にか君は幻の彼女を抱いている。夢のなかで、夢の君が、夢の彼女を抱いている。それは現実に彼女を抱いているよ

りも生々しく思えてくる。彼女の力強い生命力が君を向かい入れ、彼女の口からこぼれる吐息を、その生命の匂いを、感触を君は思い出す。彼女は君の口の中で舌を動かす、何かを捜し求めるかのように生温かい粘膜を摩り付けてくる。彼女が上に乗る、彼女の髪が揺れ、互いの手を取り合って単純なうねりに身を任せる。君は彼女のすべすべしたおしりに手を回して揉み解す。

彼女は腰を仰げ反らせ、呼吸と共に裏返ったような声を出す。君の性器と彼女の性器が擦れあうたびに彼女の表情はメトロノームのように規則正しく揺れ動いている。彼女のねばねばの体液はだんだんと君の時間を溶かしてゆく。君の記憶はどこかではらばらに弾けてしまう。夢と現実が分水域を超えて、何かが壁にぶち当たる。

声？と思う。彼女は聾啞だったはずだ？どうして声が出せるのだろうか？

はっと気がついて僕はもう一度彼女を試してみる。それは彼女ではない。

それはコトカになっている。

だんだんと僕の記憶がおかしくなってきたような気がする。どこかどこかが絡み合って解けない。なんだ？よく見るとさっきの黒髪の女の子じゃないか？

今のは幻想だったのだろうか？

だんだんと意識が朦朧としてくる。彼女が動いたたびに腕にある夕

トウーが気になり始める。あれはなんだ？それにこの女の子の表情は商売的なものなのだろうか？それとも本物の彼女の表情なのだろうか？僕はだんだんとそんなことを考え始める。

ダメだ、僕は賭けに負けるわけにはいかない。僕はセックスに意識を集中しなくてはいけない。なんとしてもこれをやり遂げなくてはいけないのだ、と自分に言い聞かせる。それにしてもこの子は本当に感じているのだろうか？ちゃんと女の子をイカせないとなんとするのプライドが保てないような気がする。ダメだ、そんなことは考えるな。ダメだ、僕は賭けに勝たなくては。日本人のチンポは小さいからいつも彼女が外人のチンポをズボズボ入れているとしたら・・・・・・僕はだんだんと消極的になってくる。ダメだ、ここは賭けをしているんだぞ、僕はもう一度自分に言い聞かせる。

僕は身体を起こして彼女に後ろを向いてくれというようなボディランゲージをする。昔誰かが「女は目を閉じて後ろから突っ込めば誰でも同じだよ」と言っていたのを僕は思い出す。ここは一気にゴールへねじ込むしかない。あまり余計なことは考えるんじゃない、ここはチャンスなんだ。

でも僕は彼女の背中を見て愕然とする。そこにはタトウーで文字が刻み込んである。

「LIFE ALWAYS HAS TWO SIDES」と。僕は何がなんだかわけがわからなくなってくる。こんなところで僕は一体何をしているのだろうかと思う。

僕が愕然としていると彼女は僕から離れてしまう。

「どうやらダメだったみたいだね」と残念そうに席に戻ってきたチャンは僕に言う。「まあ、それはそれでしょうがない。とにかく今夜はカエル君と会えて楽しかった。もう会うこともないかもしれないけど良かったら図書館の使用ガイドをコピーしてあげよう。私からせめてものプレゼントだ」

僕はチャンに図書館ガイドをコピーしてもらって部屋に戻る。僕が玄関の扉を開けるとそこには静かな闇が僕を待ち受けている。まるで今夜僕の身に起こったことを非難するみたいに。僕は足音を立てないようにしてリビングを抜け、そして自分の部屋の扉を閉めてから電気を点ける。それと同時に大きなため息が僕の耳に木霊する。一体僕は何をやっているんだろうと思う。ケータイをチェックすると今夜使ったお金は2534500円と画面に表示されている。

12

僕はケータイを見る。そこに着信の後はない。迷惑メールが3通届いているだけだ。部屋にいてもすることはない。僕は外に出ることを考える。

いつもと同じ街。同じ日常。デパート前の広場ではだぼだぼの服を着た若者が座り込み、その隣には制服を着た女子高生がいる。コンビニでは立ち読みをしている人々が肩を擦り合わせるようにして

居場所を守っているし、角のパチンコ屋の自動ドアが開くとがやがやとした騒音が漏れてくる。人々は勝手気ままに歩いていて、どこに向かっているのかも自分ではわかっていない。みんな夢遊病者のように片手にケータイを握り締めている。みんな自分の居場所を誰かに知ってもらわないと不安でしようがないのだ。

そんなことを考えると僕は外に出る気がなくなる。どこへ行ってもどうしようもないような気がしてくる。でも結局は部屋にいたところで同じことなんだ、と僕は思う。

僕は顔を洗い、歯を磨き、服を着替えて外に出ることにする。ようやく僕にとつての一日が始まる。ヘッドフォンを取り付けてしっかりと耳を塞ぐ。部屋のドアを開けて外に出る。でもいくら耳を塞いだところでそこにある匂いは、街の沈殿した匂いは鼻から入ってくる。

駅までの道のりを歩きながらどこにいかうかと考える。商店街を通り抜け、小さな信号の交差点を渡りながら僕は考える。店に掲げられた幾つものチェーン店の看板や数字の列を通り過ぎる。僕はあくまでも平静を装い、彼らのなかを通り過ぎる。街の人々は口裏を合わせたように頑なに沈黙を運び続けている。ウォークマンをしていても、彼らの視線が、歩き方が、息遣いが僕にそう告げる。僕に向かつては何ひとつ語りかけてこない。

どこにも行くところがない。行きたいところがない。改めてそう思う。チャンに図書館のガイドをコピーしてもらったおかげでそれから毎日のように図書館に通うようになった。そこにある本をしまみつぶしに読み始め日々を過ごした。そこには僕の知らない世界がたくさんあった。見たことも聞いたこともない世界のささやきに僕は耳を澄まし、新しい自分をその中に探し求めた。でも結局いつも

僕はここへ帰ってくる。僕の人生という終着点へ。我々はただこの宇宙というものを自分の軸に合わせて回転させているだけのことなのだ。

芸術という音楽はすべてモーツアルトなのだとある本に書いてあった。それは正しいのかもしれないけど、そんなことを言っている時代はそれ以上進化しない。宇宙というものは進化することによって拡大し、そして同時に縮小しながら無へと帰るのだ。

駅に向かう足どりは変わらないけれどもそこに行つたところで、僕の行きたいところはわからない。

駅にはさまざまな可能性がある。さまざまな可能性の出発点だといふことができる。その気になれば、そこを足がかりにして僕は今まで行つたことのないようなところにも行くことができる。

いつそのことどこか海に行つてみようかと思う。穏やかな水平線を見て、世界の広さを感じることができれば少しはましな気分になるかもしれない。ゆらゆらと揺れる波を見ていれば時間を忘れて何がよいことが起こるかもしれない。でもそれも思つてみるだけで僕は海になんて行かない。この街の周りにはまともな、心を開けるような海なんてないことを知っているからだ。それに今から海に行つたとしてもついた頃には暗くなつてはいるはずだ。僕の一日は日が暮れるのが早い。どこにもいけないまま気がついたらネオンが灯り始めている。

そして遠くに行くには金がかかる。金がなくなるといふことは、働いてない僕にとって、収入がない僕にとっては僕の猶予を、他愛のないものかもしれないけど限られた自由な時間を自分ですり減らすといふことになる。

僕は3駅離れた街までの切符を買い、電車に乗る。そこまで行ったところで何があるわけじゃない。チェーン店のコーヒーシヨップとチェーン店のカレー屋とチェーン店の定食屋、バーガーシヨップ、本屋、レコード店、どこにでもあるような街があるだけだ。じゃあなぜそんなところに行くのだろうか？

「無駄なんだよ、無駄。おまえはなんにもわかってないな」とケータイが彼らに聞こえないように僕に耳打ちをする。

上り電車は出たばかりみたいでプラットホームにはまばらにしか人がいない。でも次の電車が来る頃にはまるで決められたことのようにそれなりの人々が集まってくる。僕はこの街の一員として、夢の住人として、プラットホームに立って電車を待っている。僕はケータイをマナーモードにし、曲を入れ替えて電車に乗る準備をする。ボリュームを小さくし、彼らに僕の存在を知られないように気を配る。ドアが開くフロントポジションに移動し、白線を越えないようにして、そしてそんなそぶりを周囲に悟られないようにして僕は電車を待つ。

電車がプラットホームに入ってくるとどうしても車内に目がいく。どれぐらい人が乗っていて、どのくらいそれが僕にのしかかっているのか、それを計算する。

思ったより電車は空いている。いくつかの席が空いているのが見える。僕はドアのそばの手すりをしっかりと握り、席には座らない。そんなところに座ってもろくなことがない。こんなことがなかったらこの街はもつとましなところだろうと思う。シートには彼らのよだれがべつとりと張り付いているからだ。彼らの匂いだけではなく、価値観や、人生観や、道徳がそこでは待ち構えている。そんなとこ

るにケツを下ろすくらいなら立っていたほうがよっぽどましだと思う。

僕は音楽を聴きながら電車に揺られている。窓越しに移る景色はとらえどころがなく、壁の中を進んでいっているように思える。僕は電車のなかに吊り下げられている広告に目がいく。

そんなものはどうでもいいことだと思いながらも、他に見るものがないので知らず知らずのうちにそこにある文字が目に入る。

目的の駅で電車を降りると歩いてコーヒーショップに向かう。レジでコーヒーを頼み、トレイにコーヒーと灰皿を載せて二階の席に行く。ほとんどの席は埋まっている。誰もが自分の座れる、自分のおしりを落ち着ける場所を求めてこんなところにやってくる。窓際のカウンターの席が空いている。僕はそこに座り、ガラス張りの向こうの街を眺める。僕は周りに聞こえないように鼻から長いため息をつく。

僕の右側の髪の短い中年女性は参考書のようなものを開いて勉強している。左側のスーツを着た20台後半ぐらいの男はノートパソコンを開いて忙しそうにパタパタとキーボードを叩いている。

ガラス越しの街からはすぐ目の前に交差点が見える。

信号が青に変わる。

人々は向こうからこちらに、こちらから向こう側に移動を始める。

信号は青だ。

横断歩道の手前でケータイを耳に当てている男が慌てて交差点を渡るうとした男とぶつかるのが見える。ぶつかったほうの長い髪の男は振り向いて何かを言う。ケータイの男とぶつかった男は言い合いになったみたいで、ついには取っ組み合いになる。

信号は青だ。

二人は横断歩道の真ん中でお互いに掴みかかる。胸元を引っ張り、ぶつかった男が殴りかかる。ほとんどの人々はそれを横目で見ながらもこちらから向こうに、向こうからこちら側に渡り終える。信号は青から黄色に変わり、赤になる。

信号は赤だ。

男たちはまだ取っ組み合いをしている。両サイドの車から一斉にクラクションが鳴り、その音はガラス越しのヘッドフォンをした僕の耳にも響いてくる。

確かに何も変わらない。改めて僕はそう思う。

たしかに、なにも、かわらない、と。

とたんにケータイが耳元で囁く。

「なあ、もうわかったか？」と、「おまえにはどこにも行くところがないじゃないか。おまえはとうすることできない。どこに行きたいかも自分でわからない。そうだろ？いつものようにおまえは自分の特等席に戻ってくるだけだ。この下らない街の、下らない日常のど真ん中にな」

僕は聞こえない振りをする。振りをしたところでほんとはしっかりと聞こえている。僕はグラスを口に運び、また曲を選び、ポリウレムを少し大きくして音楽を聴く。

次の日のから仕事探しを始める。僕には特にこれといった業種の希望はない。とにかく早く金が貯まって、早く落ち着いた暮らしができればいい。でも働いたところで返せる借金ではない。でも生活を落ち着けるためにも仕事を始めなくてはいけない。逃げ道はない。延々とメリーゴーランドに乗っているような気分になってくる。いつまでそれを繰り返かえすのか、繰り返かえしてそれでどうなるのか、といったことはひとまず脇に置いておく。そんなことをいつまでも考えていてもお金は減る一方だし、働くこともできなくなってしまふ。

夕方に突然ケータイが鳴る。着信はみたこともない番号なので電話に出ないでおこうかと思うけど、しつこく鳴り続けるので出ることにする。

「もしもし、石川 カエルさんでしょうか？」と僕の名前を言う。聞いたことのない女性の声なので「そうですけど」と怪しみながら答える。

「今日インターネットで我社のページに登録をしていただきましたよね？早速なんですけど、ご紹介できるお仕事がありますので電話差し上げました。今、お時間よろしいですか」

「はい」と僕は答える。こつこつ事務的で、礼儀正しい電話をしばらくしていいないので僕は緊張してしまふ。

「今何かお仕事はしてらっしゃいますか？」

「いいえ、していません」

「それでは、ご足労ですが一度わが社のほうに来ていただけないでしょうか？インターネットでは正式な登録にはなりませんし、お仕事のほうもできればこちらでお話したいのですが？」

僕は一瞬どうゆうふうに答えていいのかわからなくなってしまつとりあえず「よろしいです」と答えてしまつ。よろしいです？それは僕のせりふではない。けっこうです、と答えるべきだったのだから？でもけっこうです、ということとは断っているふうにも聞こえるし……。

「それではいつごろお時間よろしいですか？」相手の女性は躊躇なく話を進めてしまつ。

「オレとしてはいつでもいいですが……」

「それでは、明日の3時にオフィスのほうへいらしていただけませんか？」

「大丈夫です」と僕は答える。「お伺いいたします。よろしくお願ひいたします」ようやく社会的なカンが戻ってきて僕はそう答える。

「オフィスの場所はおわかりになりますか？」

「インターネットで調べますので、大丈夫かと思ひます。明日の3時にお伺いしまつ」

僕は焦って舌を嚙んでしまい、「します」のところか、「しまう」と言ってしまう。

「それでは明日お待ちしております」

相手の女性がそう言って電話が切れる。

なんだかわからないけど、とにかく求人ページとのにらめっこは一旦休戦ということになった。

僕は明日のためにスーツを着てみる。ネクタイを締め、ワイシャツを着る。クリーニングから戻ってきたままになっていたビニールの袋を取る。それから鏡の前に立つ。そして、なんだコイツ、と我ながら思う。

でもそういう違和感を、時間をかけて消してゆく。鏡の中の自分をさまざまな角度から眺めてみて、社会と自分を少しずつ繋ぎ合わせてゆく。どこかから何かを切り取り、僕のなかに貼り付ける。ズボンのポケットに手を突っ込んでみて、ジャケットを何度も着たり脱いだりして身体に馴染ませる。スーツのままトイレに行ってみて、おしっこをしてみる。僕じゃないみたいに見えるけど、最初の違和感は少しずつ和らいでゆく。何事も慣れなのだ。コトカが見たらなんていうだろうと僕は考えてしまう。面接に行く前に美容室に行き、髪の毛をカットしてもらおう。

次の日の3時に会社に向かう。出迎えてくれたのは昨日電話をもらった女性と同じみたいだ。小太りで、眼鏡の向こう側で細い目をさらに細めながらひきつった笑いをする。30台半ばから後半ぐら이다らうと思う。その女性が僕の担当になっているみたいで、小さ

くバロック音楽が流れる清潔なオフィスでいろいろとテストをさせられる。一般常識や、マークシートの性格診断、パソコンがどれぐらい早く打ち込めるか、それから僕の職歴を聞かれる。

「何か資格のようなものはお持ちですか？」と女性は言う。

「資格は『ネット作家 2級』『暇の達人 3回戦』と、あとは『着物の似合う日本人世界ランキング 1位』というのを持っていきます。けどこれはこの世界にはオレしか純日本人がいないからであっていわば不戦勝のようなものです。それと『使用上の注意をよく守ってお使いください』はもってます」

「それは、履歴書には書いてないですね」

僕の冗談は全く通じなかったみたいで、それが冗談だとわからない相手の女性は僕と僕の書いてきた履歴書に交互に視線を送る。僕を異邦人のような目で見つめている。僕はもう冗談は止めておいたほうがいいなと思う。

「今までどのようなお仕事をなさってきましたか？」

僕は自分の職歴を話す。記憶がないから本当は全部でつちあげただけで、大学を卒業した後の工場の夜勤や、レストランのウェイター、ビデオ屋の店員、短期のリゾートバイト、トラックドライバー、その他もろもろの仕事経験を話す。相手の女性は履歴書に書いてあるはずなのに、仕事をしていた正確な場所と時期を聞いてくる。僕はそんなことどうでもいいような気がするけど、なんとか履歴書に書いたとおりに思い出しながら詳しく話す。

「今回ご紹介したいのは、簡単な電話のお仕事なんです」そう女性

は言う。

「簡単な」というところが強調されて聞こえるような気がするけど、僕は続きを待つことにする。

「会社のほうから電話をかけるリストをいただきますので、そのリストに従って電話をしていただだけです。経験がなくても誰にでもできるお仕事ですので、ぜひやってみられませんか？」

「はい」と僕は答える。

「経験がなくても誰にでもできる」という部分がまた引っかかるけど、僕は「はい」と答えることにする。いちいちそんなことで引っかかっていたら働くことはできない。

相手の女性は契約内容や仕事条件、そういったものが書かれた書類を出してきて僕にサインをさせる。書類にはすでに僕の名前が書かれている。その書類は僕が会社に来る前から机の引き出しに入っていて、おずおずと女性が引っ張り出してきたものだ。僕がここに来る前から、テストや質問を受ける前から、それはあらかじめ決まっていた運命のように思えてくる。

「突然で申し訳ないですが、明日からさっそくお仕事よろしいですか？」相手の女性は言う。

「明日？明日から？ですか？」と僕は言う。

「もちろんカエルさんの都合の良い日からかまいませんが、来月からということはないですね？」

「いや、そうですね・・・」と僕は躊躇してしまつた。

「それと仕事が決まったといふことで最後にもう一つだけテストがございます。とにかくそれからやっちゃいますか？」と女性は明るい表情でそう言う。でも僕はそこに全く親しみというものを抱くことはできない。

「はい」と僕は答える。

「そうしたら、えーと、もう一度机のほうに戻っていただいで、えーと、これ、この原稿用紙に『私の自画像』というテーマで、そうですね原稿用紙3枚ぐらい何か書いてもらえませんか？適当でいいですから、テキストで」と女性は言う。

僕はまたさつきテストを受けた机に戻り原稿用紙を見つめる。女性性は奥の部屋のほうに消えてゆく。僕の仕事が決まったみたいなのでどこかに連絡しているのかもしれない。

僕は改めて真っ白な原稿用紙を見つめる。

そして「私の自画像？」と思う。

とにかく何でもいいからここに書けばいいのだ。バカで間抜けなカエル君であることをわざわざ書くことはない、と僕は思う。もっとしっかりとした社会的ビジョンをもった大人としての意見をここに書かなくてはいけない、そう僕は思う。

でもそう考えて見たところで・・・・・・・・・・・・・・・・全く何も浮かんでこない。

考えれば考えるほど僕は書くことから遠ざかってゆくような気がする。

私の自画像？

こんな難しいテーマが会社のテストなんかには本当に使われるのだろうか？と原稿用紙を見つめながら僕は思う。

まずい、そろそろ時間がなくなりそうだ。このままにらめっこを続けているわけにはいかない。とにかく僕は借金をしているんだ。電話の仕事なんてもちろんやりたくないけど、そんなことは言ってもらえない。でも、まさか、明日から急に働けと言われるとは思っていなかったなあー、と僕は思う。

ダメだ、何か書かなくては。えーと、僕は記憶のない、バカな力エルです。

違う、まさかそんなこと書けるわけじゃないか？

そうするうちに女性がドアをあけてオフィスに戻ってくる。

「書けましたか？」と僕に微笑む。

「申し訳ありませんが、この話はキャンセルできないでしょうか？」と僕は言う。

「え？何か問題がありましたか？労働条件も決して悪くないと思うのですが……」

「そういう問題ではなくて、ちょっと個人的なことで・・・」と僕は言葉を濁してしまふ。ダメだ。断るときにはちゃんと断らなくては、と僕は思う。

「こちらからお仕事の紹介依頼をしておきながら真に勝手だとは思いますが、またの機会に、ということにはできないでしょうか？」

「ええ、ま、まあ、それは、別にかまいませんが」

「度々申し訳ございません」

そう言うのと僕は立ち上がってオフィスを出る。僕は帰り道にケータイで煙草を注文する。思いつき煙を肺の中に送り込むとなんか世界がどうなるかと僕には関係のないことのように思えてくる。欲望の炎は消したと思ってても気が付くと風の中で揺れている。

僕はなんだか自分がとても疲れているように感じる。どこか心の休まるような場所に帰りたくなる。

昔流行った音楽が流れる居酒屋でのんびりと酒でも飲みたいような気分になってくる。着物を着たやさしいおかみさんみたいな人が僕にお酌をしてくれて、僕の下らない話をただ聞いてくれる。そこでしか僕は本当の自分の気持ちを話せない。誰にも言えない秘密をこっそりと心の穴にしまいこむように僕はそこで心を解いてゆく。心を隅々まで広げ、体の中からストレスを追い出すのだ。温泉にでも行ってのんびりと日々の疲れを癒す。おいしいものを食べて何もかもを忘れ、バカみたいにかラオケでもしよう。

でももちろんこの世界にはそんな場所はもう存在しない。それは

僕の記憶と共にどこか別の世界に消えてしまったのだ。僕はもうそこに戻ることはできない。僕は自分が全くアパートに戻る気分ではないことに気が付く。クラブに行ってビールでも飲もう。今夜はヤケ酒だ、と僕は思う。

13

いつものようにクラブの入り口のドアを開く。クラブの中にはケミカルブラザーズの「カム・ウイズ・アス」が流れている。

クラブの席には誰ひとりとして座っていない。客一人いない。どうしたんだ？と僕は思う。中に入っていても誰一人いない。カウンターにも、テーブルにも誰もいない？そして大音量の音が僕の耳で木霊する。一体どうしたのだろう？この前来たときはこんなことはなかったのに。僕はだんだんと恐ろしくなってくる。

そして僕がダンスフロアのところに行くとなんか原因がわかる。フロアでは大勢の人が取り囲むようにして一人の男が踊っているのを見ている。まさにクラブ中の人々がその男の踊りを見ている、という感じだ。

そのダンサーは「スペース・イズ・プレイス」とプリントされた

真っ赤なティシャツを着て、黒のぴつたりとしたズボンを履いて踊っている。髪は短く彫刻のような整った顔をしている。まるでセックスパールという香水を付けているかのようにダンサーからはまわりの人々とは全然違う匂いが、雰囲気は漂っている。僕は人々の壁を掻き分け前に進んでようやくその踊りを見ることがができる。

彼はとてもリラックスしているように見えるけど、背筋をピンと張って、男性的な甘いカーブを描いた顎をグツと引き、とても見事に踊っている。何かが完結されたような踊りを。男が手を伸ばすと音と空間の波がそこに生まれ、男がステップを踏むと大地が時間を止め、くるりと回ると風がそこに生まれる。そこには踊っている男の人生というものがありありと浮かび上がっている。その悲しみと孤独と生きるというエネルギーを僕はそこから読み取ることができ

る。

僕は、というよりも、観衆の誰しもが、このクラブ全体がその踊りに釘付けになっている。

それからスクウェア・プッシュャーの「テトラ・ソニック」に音楽が変わる。

ダンサーはまるで人間の歴史をなぞるようにして、その音のラインを崩すことなく踊り続ける。そこには間違いなく人ではないものが含まれている。人間を超えたもの、といえはいいのかもしれない。ダンサーはまるでヨガ・ダンスのように踊る。数々の音の渦の中から的確に一本のラインだけを選び出し、それを丹念になぞっているようにも見える。誰もがそれに目を奪われている。このクラブの中にいることをすっかり忘れてしまっぐらいに。自分がどこにいるのかもわからなくなるぐらいに僕と観衆は男の踊りにただ見とれて

やがて音楽がだんだん小さくなってきて音楽が止まりそうになる。そしてアナウンスが流れる。

「みなさまありがとうございます。彼がこのクラブの唯一の公式ダンサーであります。華麗な踊りを楽しんでもただただかと思いません。彼の踊りはこの辺でお終いです」

「えー、ふざけんじゃねー、もっとやれー」と観衆から野次が飛ぶ。

「またの機会をお楽しみください。それでは最後に大きな拍手をお願いします」

アナウンスがそう言うのと、みんなが一斉に拍手をする。男は丁寧に頭を下げると人々の壁を掻き分けるようにして消えてゆく。

「すつげえ、踊りだったなあ、オレ鳥肌立つちゃったぜ」と言いながら僕の隣を酔っ払いの群れが通り過ぎてゆく。観衆は席に戻ってそれぞれに話始める。ダンスフロアでは彼に刺激されたのか多くの人がそこに残って踊り続けている。

僕は目に付いたテーブルに腰掛けてビールを飲み始める。それにしてすごい踊りだったな、と僕は思う。今まで僕は本格的な踊りというものを目の前で見たことはなかった。それもプロのダンサーの踊りなんか普通に暮らして見かけることはない。今日はなかなかラッキーだったな、とビールを飲みながら男の踊りを思い返す。

「やあ、さっきの踊り見てた？」と僕に後ろから声をかける男の声がある。僕が振り返るとそこにはさっきまで踊っていたダンサーがビールを手にして立っている。

「ここ、いいかな？席空いている？それとも待ち合わせかな？」
「ダンは僕にそう言う。」

「いいツスよ、ばつちり席空けておきました。どうぞ、良かったら座ってください」と僕は言う。それにしてもなぜこの男は僕のところに来たのだろうと不思議に思う。

「やあ、カエル、君、だよな？」

「そうツス、オレはカエルです。通称、暇の達人です。どうしてオレのことを知っているんですか？」

「君のことは噂で聞いているよ。このクラブの常連だろ？その変の情報ぐらいは入るさ。私もここで働いているからね、イチオウ。でも、気が向いたときにしか踊らないけどね」

「へエー、そんなんで飯食っていけるっていうのもうらやましいなあ。オレなんか仕事探してクタクタって感じなんですよ」

「そうか、君は仕事を探しているのか？うん、良かったら僕がこのクラブに口を利いてもいいよ。何か君にできる仕事があるかもしれない。まあ、君の運が良ければ、ということだけだね、もちろん」

「エッ？マジで？マジツスか？オレに仕事？でも、そんなに簡単に決めてもいいのかな。オレってかなり長い間仕事探して迷っているんです」

「でも私のコネクションもそんなに強くないからあまり期待しないほうがいいかもしれない。できることなら仕事は自分で見つけたほ

うが いいもんな。そう、それよりね、君はなにを探し者をしているんだって？」

「そう、オレってさ、この世界のことをまだよくわからないんだよね、実際のところ。頭が悪いだけなのかもしれないけど、この世界のどこかにある記憶のスイッチを探しているんだ」

「ふーん」とダンサーは席に座り、ビールを飲んで答える。額にはまだじつとりとした汗が浮かんでいる。彼はそんな長い間踊っていたのだろうか？

「カエル君、私知ってることならいくつか教えてあげることができるかもしれない。でも私の言うこともただの参考程度に思ってくればいい。人それぞれ考え方というものは違うからね。でも少しくらいならこの世界のことを教えてあげることができるよ。君がそれを聞きたければ、ということだけど」ダンサーはそう言う。

「オウ、オレって何度も言うようだけど、暇の達人なんだ。人の話を聞いているのは好きなんだ。もちろんおもしろい話のほうがいいけど」

「そうか、私もちょうど踊り終わった後だし、少しカエル君と付き合うことにしよう。いいかい？」

「オーケー。オレなら大歓迎だ」

「僕はトミーだ」とトミーは言って僕にウィンクする。僕はそこに何か不思議なものを感じる。とても人の良さそうない男なだけども、もしかしたらトミーはゲイかもしれない、と僕は思う。あれほど人々を魅了するダンスができるのだから特別ななにかが潜んでいる

るのかも知れない。でも相手がゲイであろうとなかろうとそんなことは気にしてられない。僕らは握手を交わす。

「ところでこの国の出身？」と僕は聞く。

「そうゆうことは、私にもわからない。もう先祖もずいぶん混ざってしまったからね。とりあえず、カンパイしようじゃないか？」
トミーは「カンパイ」と日本語で言う。

「今、カンパイって言ったよね？え？日本語話せるの？」

「少しぐらいはね。簡単なもんだ。どこの国に言っても大体使う言葉って言うのは同じだからね。自分のやることの必要最低限さえわかればどこの国にいてもなんとかなるものさ。私の場合はビールをよく飲むからそれで知っていたわけだ、それじゃあ、カンパイ」

そう言って僕とトミーはグラスを合わせる。

「ところでね」とトミーはつまそうにビールを飲むとそう言う。「スイッチの話だったよね。うーん、でもうまく言えないな。とにかく一度スイッチを切る、そしてまた入れなおす。そうするとプレイバックされる君の世界は今までは全く違うものになる。そこには新しい記憶が再生されている。君はまだそこから目覚めたばかりだからまだこの世界のことをよくわかっていないだけかもね」

「えー、オレって目覚めたばかりってことないぜ、もうこの世界に来てからずいぶんと時間は経ってると思うけどな」

「なんていうか、それはあまり時間とか場所とか、そうゆうものには関係がないことなんだ。やっぱり身体を動かしてみないとわから

ないことってというのがこの世界にはたくさんあるんだ。ところでカエル君、洞窟に入ったことはあるかい？」

「洞窟ですか？観光旅行とかでいったことはありますけど」

「そんなんじゃない。もっと本当の洞窟だよ。狭くてじめじめしていて本当に真つ暗なところさ」

「そんなところには行ったことはないな。システムのなかにあつたかな？そんな選択肢が？」

「システムのなかにはそんなものは入っていない。それはどこからでも行けるし、どこでもないところなんだ」

「どこからでも行けるし、どこでもないところ？ですか？」なんだかなぞなぞみたいだ。

「そんな洞窟に行くことを想像してみるんだ。最初に入ったときはああ、なんでオレはこんなところ来ちまったんだろうな、と少し後悔するような洞窟。ねえ、カエル君、もう一杯ビールを飲まないか？良かったら今夜は私がおごるよ、私も踊った後は少し興奮してベラベラとひとりで喋ってしまう癖がある。とにかくビールどうだい？」

「もちろん、有り難くいただきます。このご恩は一生、このカエル、忘れることはありません」

「たかがビール一杯じゃないか。私が取って来るからカエル君はここで待っててね」とトミーはカウンターのほうに向かってゆく。

クラブの中にはザ・ストーン・ローゼスの「ブレイキング・イン
トゥ・ヘブン」が流れ始める。

トミーがテーブルに戻ってきてビールを僕に手渡してくれる。僕
とトミーはもう一度カンパイする。

「カンパイ」と僕とトミーは言う。

「そうそう、そう言えば、何の話だったっけ？」

「えーと、洞窟がどうのこうのって話じゃなかったかな？」

「あ、そうか、そうだったね。そう、そして君はそこに行く。観念
という名の洞窟の中に足を踏み入れる」

曲が変わって辺りが静かになったので、トミーの声はとてもはっ
きりと聞こえる。まるで耳元で囁いているみたいに。

「そこには矛盾という名の魔物がいて君が中に入ってゆくのを拒も
うとする。君が見たどんな怪物よりも恐ろしい、おとぎ話にでてく
るお化けのようなものだ。まだ洞窟の入り口だからうっすらと外の
光は中を照らしている。そしてぼんやりとした影がさらに濃くなっ
たあたりに君はその怪物の息吹を感じる。それは良く見えないから
さらに君は恐ろしくなる。君の息がいつの間にか止まっている。君
は何とか一息深呼吸すると洞窟の中に向かって全速力で走り出す」

トミーはそこでテーブルに置いた煙草を手に取り、デュポンのラ
イターで火をつける。ライターの蓋を開けたときに独特の「ピイン」
という金属音が響く。まるで何かの合図のように。

「後ろからはその怪物の恐ろしい咆哮が聞こえる。それは狭い洞窟の中でまるで君の肌を引きちぎるかのように木霊して君の耳に届く。その咆哮に混じってその怪物が後をつけてくる音まで聞こえてくるんだ。君は必死で足を動かし、ひとまず怪物のことはなんとか頭から振り払って走ることだけに意識を集中させる。君はほとんどその洞窟の内部へと入ってゆく。するとその洞窟はだんだんと小さくなっていくことがわかる。君はもう少しだ、と思ってさらに走る。だつて狭くなれば怪物は奥へは入ってこれないからね。君は走る。もうマラソンのゴールのテープを切ってしまったかのようにあとはゆつくりとね。もう後ろを振り返っても怪物が追ってくる気配はない。それはどこか遠くに消えてしまったんだ、と君は思う。そして君は立ち止まる」

トミーは煙草を吸う。銘柄はインドネシア産の「ガラム」だ。独特の匂いが僕の鼻につく。

「さて、君は逃げ切った。なんとかね。でもここからが問題なのさ」

トミーは煙を吐き出し、僕のほうを見る。僕は黙ってトミーの言うことを聞いている。

「そこで初めて君は気がつくだろう。君がとんでもない洞窟の奥にひとりで迷い込んでしまった、ということに。君は改めて君がどうゆう状況なのかを考えるだろう。君の大事なケータイはこの洞窟の中ではどうやって電波が届かない。電波が届かないということは君の持っているものがすべて使えなくなってしまう、ということさ。それがどんなに大変なことか君にもわかるだろう。パソコンもできない、音楽も聞けない、本も読めない、ゲームもできない、もちろん漫画だつてもってきいていない。ケータイは電源が入らずにただの鉄くずになってしまう。これは今まで君が生まれて味わったことが

ないような状況だ。ものすごく深刻なトラブルだ。でもひとつだけ君には望みが残されていた。そう、君は煙草を吸うようになっただろっ?」

僕は頷く。

「そう、君は煙草を吸う、イコール、ライターを持っている、ということさ。君はポケットから必死の思いでライターを取り出す。そして君は火をつける。そうすると洞窟の内部が浮かび上がってくる。ライターといってもこの時代のライターだからね。ものすごく明るい。夜の学校の白々とした不気味なライトぐらいに明るい。じめじめした岩肌や、足を流れる汚いどぶ水のようなものも君の目に入る。おまけに気持ち悪い小さな虫まで歩いている。でもそうゆうものも真つ暗闇よりはまだましだと思ってあまり見ないようにする。しょうがない、ここまで来てしまったんだ、と君は思う。」

君は死ぬほど喉が渴いているけど、落ち着くためにとりあえず煙草を吸う。とにかく君は逃げ切ったんだ。まだ息も少し乱れている。君は煙草に火をつけてそれを吸う、吸うことによって自分が今どれだけパニックになっているか改めて気づくだろう。

どうしよう、ケータイはもう使えない、君が共に過ごした時間がゆっくりと遠ざかってゆくのを君は感じる。パソコンのメールも送れないし、インターネットも、電話も、メールもできない。君の好きな音楽も聞けないし、テレビも見れない、あのチェーン店に行つて飯をテイクアウトすることもできない。君は何かに対して怒りたくなってくる。なんでこんなところにオレは来てしまったんだろうと思う。そう、そして君ならここからどうする?」

「オレなら…….」と僕は少し考える。「おそらくとにかく

奥に進むでしょうね。後ろには戻れないし、もう少し先に行けば出口があつて、最悪の場合でも電波が届くところにまで行けばあとはなんとかなるんじゃないかな？」

「うん、まあ、そう思うのが自然な流れだろうね」とトミーは言う。「そして君はとにかく先に進んでみようと思う。そのじめじめして汚い洞窟を君はすすんでゆく。まるで地下鉄の駅ようにドブ川のよくな匂いが君の鼻に入ってくる。でも、まあ、しょうがない。進むしか道はないもんね。そう思って君は再び足を前に進める。そして悪夢というのはここから始まる」

トミーきつぱりとそう言うとはもう一度煙草を吸い、それを灰皿の中にねじ込む。

「君はそうして進んでゆく。その汚くてじめじめした洞窟をね。君は歩き始めたことによつてもう少し落ち着きを取り戻す。頭の回転もまともになってくる。もう自分はそんなにパニックにはなっていない、そう思う。とりあえず先に進んでみればなんとかなるかもしれない。出口が見えてこればラッキーだし、ケータイが電波をキャッチしたその瞬間には自動的に電源が入るだろうと思う。そうすればもう助かったようなものだ。外と連絡さえとれればここからすぐにも出ることが出来るだろう」

そう思つて君は前に進んでゆく。それでもしばらく5分ぐらい、10分ぐらい一人でその洞窟を歩いてみてもケータイの電源は死んだままだ。道は一本道になり少しずつ狭まってゆく。その洞窟の中で君の耳に届くのは不気味な君自身の歩く音だけだ。さて、君ならどうする？」

ひどい話だなあ、と僕は思う。そんなところに迷い込んだらさらに

パニックになつてしまふかもしれない。

「そう、君は再びパニックに陥つてゆく。だんだんとその気配を背中に感じるようになる。これはまずいな、と思い始める。ひとまず落ち着かなくてはと自分に言い聞かせる。そうするとまた君の目の前に矛盾の怪物がまた戻ってくる。壁だ。その洞窟は先に進んでみたけど、そこは行き止まりだったんだ。そして君の大事なケータイはまだ死んだままだ。君はひどいパニックに陥っていることに自分で気がつく。死んだままのケータイと壁。」

君は今歩いてきた道に戻つてまだ洞窟が比較的広がったところにまで戻つて必死で君のケータイを振るだろう。とにかく少しでも電波をキャッチしてくれば君は助かるんだと。でも無駄だ。ケータイは死んだままだ。ひどい洞窟に入りこんじゃったなと君は思うだろう。君はさんざん疲れ、汗をかき、ぼろぼろに身体を汚した上に、結局その洞窟の一番奥の壁の前までやつてくる。『もうダメだ』と君は思う。君はそう口にし、そしてその自分の声を聞く。その音はまったく自分の声には聞こえない。自分が言つたんじゃない、と君は思う」

そういうのって最悪のパターンだなと僕は思う。

「そう、これが悪夢というものなんだ。そして君は疲れてしまつてその洞窟の中で眠つてしまふ。そうして君は深い、深い眠りにつく。もう何もかもが死んでしまった後なんだ。あとはもう眠るぐらいしか残されていないからね。そうして君は眠りにつく。でも結局それがどこであろうとも眠つてしまえば君の意識は別の場所へと運ばれて行く。夢のなかだ。君は夢の中を今度はさ迷うことになる。そしてそれはあらゆる場所であり、あらゆる時間なんだ。そうして君は何かの音を聞く。何か君の意識を叩いて起こそうとしている。そ

れはひとつの鐘の音なんだ。そこにはすべてがあるし、すべてがない」

クラブの中にはデッド・キャン・ダンスの「サモシング・オブ・ミューズ」という曲が流れ始める。

そこでは誰かが踊っている。誰だ、と僕は思う。僕は意識を凝らしてその影を追おうとする。今一瞬何かが見えたような気がする。

「君はそこではじめて君の中を流れる水の音を聞く。それは地底の遙かそこに眠る古い、古い記憶の水だ。君はそこで初めてその水の意味を知るだろう。その水を口に含み、匂いを嗅ぎ、新たな生命の記憶を取り戻す」

影だ。

僕の影がそこでは躍っている。

なぜこんなところで影が躍っているのだろうか？

違う、影なんかじゃない。

コトカだ！

コトカがそこでは踊っている。

コトカは必死で踊っているが、コトカの目からは大量の涙があふれ出ている。どうしてこんなにも涙が出るのだろうかといわんばかりに泣いている。しかしコトカはとても上手く踊っている。まるで音そのもののようにコトカは踊っている。コトカは音の渦の中を華麗に

舞う。約束の地に火を灯す聖霊のように、まるで大地と空を繋ぐ妖精のように華麗に踊っている。

「カエル君？」

僕はその音で我に返る。

「カエル君？大丈夫か。涙なんか流して、酔っ払っているのかい？」
そういわれて僕は初めて自分が涙を流していることに気がつく。

「今夜はいろいろあつて大変だっただろう？もう帰って寝たほうがいいんじゃないか？」

僕は手で自分の流している涙を拭う。トミーは僕が涙を流したためか僕に対して何かしらの同情心を抱いているみたいだ。僕はもう一度コトカの姿をフロアのなかに探そうとするけどコトカはいつの間にかいなくなってしまうている。

「いや、自分でもなぜ泣いているのかわからないんです。きっと少し疲れたのかもしれない。このところいろいろと考えることがあったから」そう僕は答えて席を立つ。

運命の歯車は大きな破壊的な音をたてて次の歯車をしっかりとくわえ込み、それがまた次の歯車を動かしてゆく。そしてその歯車は延々とどこまでも繋がりがては大きな鐘の音になる。

部屋に戻るとケータイの電源を確かめる。ケータイの待ち受け画面にはいつものように一枚の絵が写されている。会社の面接に行き、トミーに出会ったおかげでクタクタに疲れている。もう何も考える力は残っていない。そのままベッドに倒れこむと眠ってしまう。

朝方目を覚ますとコトカはどうしているんだろう?と思う。昨日クラブで踊っていたのは本当にコトカだったのだろうか?僕はコトカの部屋のドアをノックする。

「おーい、コトカあ、まだ寝てるのか?」

返事はない。

僕はもう一度ノックする。

「おーい、コトカ姫様、寝ていらっしやるのでしょうかとお伺いしているではありませんか?こちらはレポーターのカエルちゃんです、お休みのことろ、あ、まことに、あ、申し訳ございませんええん」

返事がない。

「おい、コトカ、寝てるのかって聞いてるんだけど？」

もう一度ノックする。

「コトカあ、出て来いこのヤロウ、オレ様は借金取り、じゃなかった、オレ様は借金持ちなんだ、頼むから出てこいよお」

僕はドンドンと扉をノックする。

どうなってるんだ？

「このクソヤロウがあ、デテコイ！出て来い！おまえ天才、志村ケンさん呼んでもいいのか？あの人、只者じゃねえんだぞ！バカ殿なんだぞ！なんなら北野タケシ監督に来てもらってもいいんだぞ！あの伝説のコマネチが来たらもう誰も止められないんだぞ！翼クンと岬クンのゴールデン・コンビよりもすごいことになるかもしれないんだぞ！それにいい加減にしねえといつもみたいにエロビデオのネタ話始めちゃうぞ！」

「バン」

という大きな音がして扉が開く。そこにはコトカが立っている。とても寝ぼけた顔をしている。でもいざこっつして見るとやっぱりコ

ト力は美人だ。いい女は何をしていてもいい女なんだなあ、と僕は思う。今では長くなつた髪が良く似合う。

「何よ、寝てただけど？」

「いや、悪い、コト力姫、無理やり目を覚ましてしまいました、その上貴重なお時間を……………」

「そんなことはいいから、一体なんなの？」

「昨日の夜にクラブに来てた？」

「えー？なんで、私がクラブに行かないって知ってるじゃない？行かないわよ」

「そうか……………やっぱり昨日の夜はかなり酔っ払っていたのかな？」

「そんなこと知らないわよ、良かったら私も少し眠りたいんだけど、いい？」

「オーケー、悪かった。気の済むまでお眠りあそばせ、くださいませえ、おひめさま。そして姫のお好きな高級ブランドの天然素材ローションを体中ベチヨベチヨに塗りまくって、ああ、もうダメ、アハン、イヤン、そんなことしないって言ったじゃない、オー・イエス・オー・ファックミー・アアーン・ファックミー！イックウウって……………」

そう言い終わる前にコト力は扉を閉めてしまう。それと同時に頭の中にあるアイデアが閃く。

そうだ、パーティをしよう。

それはそれで何かのきっかけになるかもしれない。いつまでもこうしてダラダラしているわけにはいかないし、僕もなんでもいいから仕事をしなくてはいけない。とりえず長かった僕の生活にも一応の目的ができた。パーティをしよう。そしてそれが終わったらどんな仕事でもいいから、もう選ぶことはあきらめて、鉛筆ころがしでもして、仕事を決めよう。僕はそう思う。

それがどんな仕事であろうともこれから先僕は死ぬまで延々と働き続けなくてはいけないだろう。そう思うと胃の中から反吐のようなものがせりあがってくるような気がしてくる。毎日、毎日死んだほうがましだと思いつながら電車に乗り、勝ち目のないストレスという敵と踊りながら朽ち果てるまで足を動かし続けるしかないのだ。一年に数回しかない連休を楽しみに日々を送り、その連休にしたところでバタバタしている間に終わってしまう。年に2回のボーナスは僕に何も与えてくれはしないだろう。大きな楽しみも悲しみもないごく平凡な人生を送るのだ。

そんな人生を送るとわかつているんだからその前に最初で最後かもしれない大きなパーティを開こうと思う。それは僕の人生のクライマックスになるかもしれない。それはただの花火のようなものだ。その夜だけは人々を楽しませ、日常という枠を打ち壊すかのように記憶の燃えカスとなる。それは心の奥底に眠る夢を焦がし、風に吹かれて闇の中に消えてゆく。次の日には人々はそんなことがあったとこさえ忘れているだろう。

でもそれはささやかなものではあるかもしれないけど、この僕の人生の大きな転換期なのだ。多くの人々が暮らすこの砂漠のような町

のなかで僕はその砂の一欠けらにしかすぎないかもしれない。それでもそれは誰のものでもないこの僕の人生なのだ。誰にも理解されないかもしれないけど、それは僕にとって特別なものでありつつたひとつしかこの世界に存在しないものなのだ。

僕は自分を特別な人間であると思ったことはない。この世界にはさまざまな人々がいる。それぞれの役割がありながら交換可能なペルソナのようなものを共有している。誰かが誰かに摩り替わり、そしてあくる日に僕はその中のひとりとして存在している。この世界の中には僕のわからないこともまだたくさんあるけどそれはまるで空に輝く星のようにそれぞれ的人生としてこの世界に散らばっている。そう考えると僕もまた特別なものの中に属しているということになる。

そんな僕のための一生に一度の特別なパーティー。それをやってみようと思う。何もかもを投げ捨て、サムライ魂を世界に発信するのだ。僕は当面パーティーのことだけに意識を集中するように心がける。

その夜にクラブに行つてパーティーを開きたいのだけど、会場をつかわせてもらえないかと馴染みのバーテンダーに聞いてみる。

「それはオーナーに聞かないとわからないな。ちょっと待っててくれ」彼はそう言うところかに電話をかける。オーナーか、と僕は思う。こんな豪華で馬鹿でかいクラブのオーナーっていうのは相当金持ちで、やくざなんかも絡んでいて、いかにも怖そうなんだからうなと僕は思う。僕はカウンターに立つたまま少し緊張しながらビールを飲んで待っていると「カエル君」と僕を呼ぶ声を聞く。

「やあ、カエル君。久しぶりじゃな」とそこにはジェフが立っている。

「あれ？ジェフ、久しぶりじゃないか、マイト！元気だった？」

ジェフは相変わらず短パンによれよれのティシャツを着て、まるでトレードマークのように片手にビールのジョッキを持っている。

「どうしたんだ、ジェフ。最近見かけなかったけど？」

「ワシもなかなか忙しくてな、カエル君も元気そうで何よりじゃ。ところでワシに何か話があるんじゃない？」

「はあ？ジェフ。ビンゴの天才にしては的外れなこと言つなあ。今日はちょっと用事があつて、人を待っているんだ」

「だからワシのことじゃろ？」

「違つよ、マイト。オレはクラブのオーナーを待っているんだ」

「だからワシのことじゃろ？」

「違つよ、つて、マイト！まさかジェフがこのオーナー、つてそんなわけないよな」

「だからワシのことじゃろ？これでもう3度目じゃぞ」

「そんなわけねえええだろおおおお。もしかしてジェフつてすつげえ金持ちなんじゃねええかああああ。俺たちのコンビはどうなるんだ？オイ、今すぐリムジン呼んでくれ。どこでもいい

「からオレをこの世界から連れ去ってくれ」

「まあ、まあ、カエル君。落ち着いて。確かにワシは貧乏ではないが、見ての通りそんなに贅沢な暮らしをしてるといいうわけでもないところで話というのは何じゃな？」

「オイ、マイト。金、金ええ、カネ、貸してくれ・・・っていうのは冗談だよ。そんなこと頼んで友情を台無しにしたくないからな。できればここでパーティを開きたいんだけど、会場を使わせてもらいたいんだ。一晩だけでいいからさ」

「願ってもないカエル君の頼みなら引き受けよう」ジェフは嬉しそうにそう言って笑う。でもジェフってひょっとしたらただの酔っ払いではないのかもしれないと思う。

「本当は会場費もバカにならんのだが、カエル君には世話になったからな。ワシからの条件を飲んでくれればそれは大目に見よう」

「なんだよ？やけにこの世界は条件付だな。もっとシンプルにいかないのか？」

「簡単なことじゃよ、カエル君。カエル君がパーティでDJをすること。そして必ずオリジナルの曲を一曲作ること。それが条件じゃ」

「まあ、そのくらいならいいけど。それにしてもジェフが、まさかなあ、ここのオーナーなんて」

僕とジェフはそれからビールを飲みながら話をする。突然の再会だったけど、久しぶりにジェフに会えて楽しく会話することができ。仕事探しのことも、借金のこと、世界のこともすべて忘れて。

そして3週間後の満月の夜にパーティをすることになる。それまでに僕は曲を作らなくてはいけない。

それからは部屋に引きこもって延々と曲作りに励む。曲を作るのに必要な機材を購入し、朝から晩まで一心に曲作りを始める。でも不思議とそれは苦痛な作業ではない。まるで記憶の奥底に眠っているものを引き出すかのように僕はコードを巧みに操ることができ、ルートとなる音を作りそれにドミナント、サブドミナントを重ねてゆく。そしてルートへと戻る。僕はスケールに合わせて音を配置し、マトリックスのような無限の荒野で自分自身の欠片のようなものを繋ぎ合わせてゆく。

何かメロディーの基本となる曲を決めることにする。僕の新しい出発のお祝いとして何かおめでたいものがいいと思う。新しく再生へと導く道しるべとなるようなメロディーだ。散々迷った末に日本の正月によく耳にする「春の海」を選ぶことに決める。琴と尺八の絶妙なバランスを保つこの美しいメロディーを基本にしてそこにさまざまな音を加えてゆく。加えては削り、そしてまた加える。その繰り返しだ。

曲の中にオリジナルの歌詞も入れてみることにする。何かのメッセージのような歌詞を書いてみようと思う。それは誰にも理解されないかもしれない。でもそれはただのメロディーにしか過ぎない。僕はその曲に「武士道・イズ・デッド」という曲名を付ける。

それからクラブで知り合った友達やDJ達に声をかける。パーティを開くだけでなく良かったら参加してくれないかと友達に持ちかける。とにかく僕の葬式のようなパーティなのだ。そこに花を添えるためにも少しでもいいから多くの人に楽しんでもらいたいと思う。このさまざまな人が暮らす広い世界と比較すると僕のためのパーテ

イなんて屁のようなものかもしれない。でも僕の人生のフィナーレとして出来る限り大きなイベントにしてみようと僕は思い立った。

「フルムーン・パーティー！ウエルカム・トゥー・ユニバース！」とパーティーのタイトルを決め、パーティーのチケットをインターネットで流し始めた。でもそれが思ってもみなかったような大きな騒ぎになっってしまう。

パーティーの打ち合わせのためにジェフのところに行くところとジェフはすでにチケットは完売し、映画監督やミュージシャン、生死を問わずすでに世界中がパーティーのために動き始めていると言う。インターネットのホームページを開くとそこにパーティーの広告があり、町を歩くとパーティーのポスターが至る所に張ってある。あの「ブラック・サン」を作った天才科学者も現れるという噂まで流れ始めた。一体これは何の騒ぎなのだろうと僕は思う。僕はただの平凡な人生を望んでいるまともな人間なのだ。どうしてこの世界はいつも知らない間に話が進んでしまうのだろうか？

僕はジェフと会ってパーティーの綿密な打ち合わせをする。図書館に行き、日本の文化について調べてみた。お祭りというものは精霊という風が通り過ぎるときの一種の儀式のようなものであることがわかった。僕は懐かしい日本のお祭りというものを再現できないかと考え始めた。

みんながこの日はかりは着物を着て外を歩くことを許された特別な一日のように日常の外に飛び出してくる。子供たちは買ってもらった綿菓子を誇らしそうに舐め、クレープやお好み焼きなんかの屋台がずらっと並んでいる。それぞれの屋台には裸電球が灯っていて、そのぼんやりした光はまるで夢の一部のように夜の闇に紛れ込んでいる。辺りには人々が日々の疲れを癒すかのように特別な笑顔を顔

に浮かべ、人が踊っている姿を見ている。そこには僕の求める懐かしい匂いがある。しばらく顔を合わせていなかった友達なんかにはバツタリと出会う。まるで服を一枚ずつ脱いでゆくかのように、僕は僕自身へと戻ってゆく。かつての記憶という向こう側の世界へ。

いよいよパーティー当日、朝目を覚ますとコーヒを片手にクラブに向かう。クラブの扉を開くと音楽が鳴っていない。それどころかクラブの中は昼間のように太陽の光がさんと降り注いでいる。僕が知る限りこのクラブはいつも夜で大音量と共に人々が踊り狂っていた。僕はその静かで大きな空間に驚いてしまう。クラブの中にはすでにパーティーの準備が整っている。屋台が並び、金魚すくいや射的のゲームなんかの店も見える。ダンスフロアには大型のステージが用意され、何段にも積み重ねられた大きなスピーカーがまるで壁のように聳え立っている。僕が今夜ここでDJをするのかと思うと気が遠くなる。僕はステージの横にジェフが立っているのを見つける。

「おい、ジェフ」と僕は呼びかける。

「なんじゃ、カエル君か？よく眠れたかい？いよいよ今夜じゃな」と相変わらずジェフはビールジョッキを持ったままそう言う。

「なんだよこれは？こんな馬鹿でかいステージ作りやがって。どこでどうやったたらこんな話になるんだよ？オレは身内だけのひっそりしたパーティーで良かったんだ」

「まあ、カエル君。でもな、今回のパーティーはとても大きなものなんじゃ。このクラブでもかつてない人が集まる。それならそれなり

のステージというものが必要なんじゃない。踊るためには命も捧げる。それぐらいの覚悟で今回はワシもがんばっておるからの」

「それは嬉しいんだけどさ。はつきり言っただけの話が大きすぎるんだよ。オレは日本人だけ。ステージに上った途端にスナイパーに狙われるかもしれないぞ。この世界には頭のおかしい奴がいっぱいいるんだ。日本人というだけで恨みを買われるかもしれない」

「それは大丈夫じゃ、カエル君。ワシもこのオーナーじゃからな。そんなことはここでは起こらない。何があっても絶対にな。ある意味ではこのクラブは特別な場所なんじゃ。誰しもが幸せを求めてこのクラブにやってくる。ワシとカエル君のコンビなんじゃ。ワシを信頼して、今夜は一発大きな花火を夜空に打ち上げようじゃないか？」

「ああ、マイト。ビンゴの天才と暇の達人のコンビだからな。バツチリ決めようぜ」そう言っただけで僕とジェフと一緒にビールを飲み始める。とにかく今日はパーティなのだ。一生に一度ぐらい一日中酔っ払っていても誰にも文句は言われないだろう、と僕は思う。

僕はケータイのメモリーに入っているパーティのプログラムを再確認する。パーティは夕方から始まり、そして明日の朝に終わる。僕は友達のDJとローテーションを組み、僕の出演時間を決めておいた。僕は夜中の12時にDJをすることになっていた。夜中の12時というのはシンデレラが会場からいなくなる時間であり、要するに最高潮の盛り上がる時間帯なのだ。僕はそんな時間に出演しなくなかったけど、その時間帯はスケジュール上穴が空いていた。要するに僕の役割は繋ぎをするということなのだ。そんなに神経質になることはない。失敗したって死ぬわけではないのだ。

やがて太陽の光をゆつくりと月が覆い隠すすくかのように夕方がやってくる。美しいオレンジ色の夕日がクラブの中を通り過ぎていった後いよいよ会場がオープンする。会場がオープンすると同時にたくさんの人々がクラブの中にやってきてあつという間に朝の地下鉄のような雰囲気になる。どこを見ても人しかいない。

それに合わせてDJが音楽を流し始め、クラブの中はパーティー独特の騒がしさに呑み込まれてゆく。人々は踊り始め、そして始めは小さな渦であったものがだんだんと大きくなってゆく。そして文字通りパーティーの最高潮という場面で僕のDJの出番がやってくる。

ダンスフロアはものすごくホットになっている。はつきり言ってみりやりやすい状況ではない、と僕は思う。僕が下手なDJをすれば会場の雰囲気はすべてぶち壊しなのだ。ミスをするとかクラブ全体を白けさせてしまうことにもなりかねない。僕はとにかくこのままこのホットな会場を維持して次のDJに繋がなくてはいけない。

僕は自分がナーバスになっていることに気が付く。

でも、と僕は思う。

ここは世界平和のための逃れられない運命なんだ、と自分に言い聞かせる。僕はドラゴンボールのゴクウのみたいに「みんな、オラに力を貸してくれ」とつぶやく。

僕は緊張しながらDJのブースに行き、僕の選んだ曲を会場に流し始める。

ダンスフロアにいる人々は物凄い熱気の渦のなかで踊り狂っている。人々が発するフェロモンのようなものが空中で渦となってクラ

ブを取り囲んでいる。その渦が僕をどこかへ吹き飛ばそうとしている。僕がどこに辿り着くのか、それは神のみぞ知るといった感じだ。

僕は少しずつ自分の足を動かし始める。リズムに合わせて、足でステップを踏んでゆく。僕の中の何かがそれに合わせてゆっくりと持ち上がるのを僕はどこかに感じ始める。僕は音楽に耳を澄まし、リズムを身体に馴染ませるようにして踊り始める。僕はもうバカなカエルではない、と自分に言い聞かせる。僕は誰だ？そう自分に問いかけてみる。

僕はステージの上で踊り始める。僕はクラブのライトの中で、さまざまな色を網膜に映し出す暗闇の中で踊っていることに気が付く。

そして僕は真剣に踊り始める。

「あ、カエル君踊っているわよ」と女の声がどこかから聞こえる。でも僕はそんなこと気にしない。僕には自尊心の欠片も残っていない。僕はそれどころではないのだ。僕はここに一度だけ自分を取り戻すチャンスを作ったのだ。僕は真剣に踊っているのだ。

そうして僕は踊り続ける。足を動かし、腕を振り、背筋をピンと張って。

やがて曲が入れ替わり僕の作った曲「武士道・イズ・デッド」が

会場に流れ始める。

ここだ、ここで踊るんだ、と思う。

音楽が鳴り止んだら

一瞬にして世界が沈黙に包まれた鐘の音を聞いたなら

すぐに足を動かすんだ

その鐘の音は

光と闇が一匹の巨大な怪物となって

おまえの何かを食いつぶす

メデューサの餌食になるまえに踊りだせ

ダンス ダンス

踊りだしたら

おまえの足はもう止まらない

天国と地獄の境界線を

踊り狂うことになるだろう

天国に足を踏み出せば

お前は地獄に行き

地獄に足を踏み出せば

おまえは天国に行く

DNAの螺旋を上り続けるんだ

ダンス ダンス

君は君の鼓動の音を聞く。そして君の中に流れるその水をその手で掬う。

すると自分が砂漠の中で踊っていることに気が付く。君の目には地平線の広がる砂漠しかみえない。

そこには失われた世界がある。

僕は誰だ？と僕は思う。

そうだ！

僕は僕じゃないか。

と、僕は僕であることに気が付く。

僕はもうカエルではない、僕は僕なのだ、と僕は思う。

僕は記憶をすべて取り戻したのだ。そして僕は思い出す。「ブラック・サン」を作ったのは僕であったことを。ここは僕の世界なのだ。

ふと気が付くとクラブの会場では音楽が鳴っていない。

あれ？と僕は思う。

気が付くとクラブにいる人々は足を止めてみんな僕のことを見ている。どうしたんだろう？と僕は急に心配になる。

耳を打つような沈黙があったあと、会場にいるみんなは一斉に僕に拍手をしてくれる。まるで大きな花火のようにその拍手の音はクラブ中に鳴り響く。

「カエル君、すごいじゃないか！」とダンサーのトミーが僕のところへやってきて言う。「今の曲、カエル君が作ったんだろう？」

「ああ、オレが作ったんだけど、何か問題あったか？」

「ない、ない、あるわけないじゃないか。すごくいい曲だったよ。みんなびっくりしている、カエル君にこんな才能があったなんて。私のダンスもカエル君の曲のおかげで新しいステップを見つけたことができたよ。これならカエル君の仕事は決まりだな。新しいアンダーグラウンドDJの誕生だ」

そして次のDJが準備できたみたいでクラブの中に音楽が戻ってくる。そして人々は楽しそうに踊り始める。

「カエル君、すぐにクラブの連中と契約させるよ。大丈夫、私も推薦してあげるし、オーナーのジェフの友人でもあるし、それにこんなにみんなを驚かせるような音楽を作ったんだからクラブの連中も嫌とは言わないだろう。もちろんカエル君さえ良ければ、ということだよ」

「もちろんオレはオーケーだ。このクラブで働くのは大変そうだけどなんとかやってみるよ。それにいい加減オレも借金生活からも抜け出したいし」と僕は答える。

とにかくこれで仕事が決まったのだ、と僕は思う。なんとかこれで人並みの生活ができるようになるだろう。金持ちにはなれないかもしれないけど、借金を抱え込んでいるよりは遥かにましだ。

「じゃあ、正式の契約の話はまた今度会ったときにしよう。カエル君はなんだか疲れているように見えるけど？ちょっと休んだほうがいいんじゃないか？なんなら仕事も決まったんだし、働く前にどこかバケーションでも行ってくるといい。働き始めたらこんどいつまでもな休みが取れるかわからないからね」

「ああ、そうする。それじゃあ、ありがとう」

そう言って僕とトミーは別れる。それと入れ違いのようにコト力がやってくる。

「ねえ、聞いたわよ。仕事決まったんだって？とりあえず、おめでとう。カエルの仕事も決まったことだし、良かったら二人でお祝いでもしない？」

「お、なんだよ、そりゃ？悪くない提案だな。まあ、お祝い事はいいくつあってもありすぎるといふことはない」

「ねえ、明日あたりどうかしら？」

「別にいいけど。それよりもどこでするんだ？」

「明日、夜の8時に私たちの部屋のリビングでどう？」

「いいよ、まあ、明日な」

「オー、乾杯だああああああああああああああああああああ」

と僕は言う。コト力は部屋のリビングでテーブルの向かい側に座っている。

「いやー、長かった、ここまで来るのも大変だったな？いろいろ喧嘩もしたし……。まあ、オレが変な冗談たくさん言ったからかな、悪かったな」と僕は言う。

「いいわよ、別に。でも本当に最初の頃は大変だったわね。もうダメかと思っただもん」

「え？なんだ、ダメになるって？どうゆうこと？」

「結局あなたはここから出ていかなかったじゃない？そしてこうなつた以上はこれからもここで暮らす予定なんでしょ？」

「うん、まあ、ね……………」

「何よ？その曖昧な言い方は？ここではもう暮らしたくないってこと？」

「そうじゃないんだよ。違う、そうじゃないんだ。なんて言うかね、ちよつと音楽止めようか？」

「別にいいけど、カエルが音楽止めようなんて聞いたことないわね。雨、とか、豚とか空から降ってこなければいいけど」とコトカは僕に微笑む。どうして今までこんなに優しい顔を見せてくれなかったのだろう？とゆうような優しい微笑みだ。できれば僕は音楽を止めたくない。僕はコトカの微笑を見ているのが好きなのだ。なぜだかはわからないけど、僕は最近よくそう思うようになった。でもおそらくここで僕は止まるわけにはいかない。僕はそこを乗り越えなくてはいけない、たとえそれがどんなに意味のないことであっても。

「大事な話なんだ」そう言って僕は音楽を止める。

「いいわよ、なんだか急に改まって、変な気はするけど……………」

「僕は」と僕は話し始める。僕の声は静かな二人だけの部屋に木霊する。それは僕が僕であるということの証明であるかのようにはつきりと。

「僕はこうして君と向かい合うためにとても長い、長い時間を浪費してきた。もう信じられないくらい長い時間だ。時間のことを考えただけで気が遠くなってしまつぐらい長い時間だ。いや、つまりねでも僕はこうして君の前に戻ってきた。そしてこれだけは言えるんだけど、たとえ何があつても僕は君の元へ戻つてくるよ。どんなに僕自身を失つたとしても、そこには美しい世界がある。それは僕自身であり、そして君自身でもあるんだ。でも太陽が昇り始めた地平線と水平線をみたいにそこにはなんの意味もないかもしれない。どれだけ美しく、そして深く僕の心を捉えようとも、そして僕があまりのその美しさに涙を流してしまつたとしても、そこには何も残されていかないのかもしれない」

僕はそう喋りながら、コトカがグラスに注いでくれた水のような液体を飲む。

「鳥が歌と共にその美しい世界を舞い、そして風が、そして太陽が、僕の世界をまた新しいものへと変えてゆく。一日が訪れ、風がそれを翼に変えて僕の見知らぬ世界へと旅立つてゆく。そう、僕はまた旅に出なくてはいけない。でもわかつてほしいんだけど、ある意味では僕はそれを望んでいないんだ。そして僕は君とこうしているのが………なんていうか、幸せ、なんだ。というよりも、それで僕は満足しているんだよ。でも、それでも、僕はやっぱり旅に出なくてはいけない。どうしてかはわからない、僕はどこまでいつてもバカなカエルでしかないのかもしれない。でもそれは、わかりにくいかもしれないけど、変えようのないものなんだよ。まあ、なんだか喋りすぎちゃつてるみたいだけど、とにかく何があつても僕は

君のところへ帰ってくるって、言う、ことだあああああああああああああ。そしていつもように、

『LIFE ALWAYS HAS TWO SIDES』ということ、おしまい」

僕が話し終えてもしばらくコトカは黙っている。沈黙が耳に届きそうなほど、僕の耳はその深く研ぎ澄まされた音を聞く。

「っていつか、それがカエルの考えてことでしょ？」とコトカが聞く。

「まあ、今までのところは、そういうことになるね」

「じゃあ、それでいいんじゃない？」

「そうか？ファンキー・モンキーベイベーター？バッチリだったかな？」

「とにかくその呼び方はやめてよね。嫌なデジャブを思い出しそうになるから」

「オーケー、じゃあ、DJスタートだな。オレが今の気分にあったバッチリ良い音楽を選んでやるぜ」

「カエルは、やっぱりそれでいいのかもね？」そう言ってコトカも笑う。僕は一時停止にしていた音楽を再生する。でも今夜は静かにのんびり話をしようと思ったのであまりうるさくない穏やかな音楽を選ぶ。

「ねえ、私のケータイ知らない？今のうちに買っておきたい音源が

あるのよね」

「テーブルの下にあるじゃないか、そこ、そう、それだよ。でも珍しいね。コトカが音源を買うなんてさ。何を買うの？」

「えーつとね、ニーナ・シモンの『マイ・マン・ゴーン・ナウ』でしょ、それに『ターン・ミー・オン』でしょ、それとね………まあ、いいじゃない私が何買ったっていいでしょ？」

「まあ、べつにいいけど、なんだか気になる曲順だな、悪いことにならなければいいけど」

「なるわけ、ないじゃあああ、ないかああああ」とコトカが僕の真似をしてそう言う。

僕とコトカは二人一緒に笑う。僕はなんだかとても幸せな気分になる。

「今日はいつもみたいに怒らないのね？」

コトカはまっすぐに僕を見ている。

「まあ、ね。今日はお祝いだから。そう、そう、それにしてもこの水なんだよ。水じゃあないみたいだけど………」

「これはね、日本酒っていうのよ。今日のお祝いのために特別に手に入れたの。日本のお祝い事にはやっぱりお酒はかせないでしょ？」

「なんだ、これが日本酒ってやつか。前から気になってはいたんだ

「私はね、一応、なんだけど、カエルって何も装飾品つけてないじゃない？もしかしたら嫌いなのかなーって思うんだけど、まあ、イチオウってことにしといてね、これ、ブレスレット、はい」

と僕は綺麗なプレゼント用の箱に入ったプレゼントを貰う。

「オレからはな、まあ、ん、なんていうか、その、今まで、ありがとうってことで、オレのほうもイチオウ、ってことでペンダントとイヤリングのセットだ。オイ、でも、今開けないでくれ。それは一人のときに開けてくれ、それじゃあ、はい、これ」

と言って用意しておいたプレゼントを手渡す。

「ありがとう、大事にするね」とコトカは嬉しそうに受け取ってくれる。

「それじゃあ、ボチボチ寝るか？」

「もう？まだいいじゃない？それとも・・・それって、何かの合図なのかしら？・・・」

「何言ってるんだ！このヤ・・・って違うって、そういう意味じゃないよ。このところ曲作るので忙しかったから疲れがたまっているんだよ。暇の達人でも疲れるときぐらいある」

「でも私たち愛し合っているんじゃないの？」

「なんだ！オマエ？いきなり、すっげえこと言い出すなあ」

「そうじゃないの？」

「まあ、よくわからんけど……そうゆう見方もこのひろ
い……い、世界のどこかでは、それは愛と呼ばれるかもしれな
い」

「相変わらず、カエルはカエルなのね？どう？ボチボチ寝る？」

「オウ」

「一緒に？」

「バ、ババ、バババカ、言ってんじゃねーよ……
……よ……それは、また今度な。今日はもう酒も飲ん
だし、仕事も決まったし、とにかく今日のところオレはこれで満足
だ、それでいいだろ？」

「じゃあ、また明日ね」

「オウ、ヘイ、ヨウ、セニヨリータ。また明日な」

そういうと僕らは二人でキスをする。僕はそれで十分幸せな気持
ちになることができる。

「おやすみ」

「おやすみなさい」とコトカが言う。

「最近カエルが忙しかったから、全然部屋掃除してなかったわね。
まるで豚小屋みたい。あした仲良く一緒に掃除しようね」

「オーケー、わかったからもう寝ようぜ、おやすみ」

「ねえ、カエル」

「なんだよ？まさか一人で眠りたくないとか言っんじゃないだろうな？」

「ううん、そうじゃないの。私のことちゃんと覚えていてくれる？」

「当たり前じゃないか！オレのパートナーだぞ！心配しないで安らかに、あ、お眠りくださいませ。3月3日、耳の日生まれのお姫さま。って本当におやすみ、また明日な」

「うん、おやすみ」

そう言っコトカは部屋に戻ってゆく。僕も汚い食器をそのままにしておくのはどうかと思うけど、それはまた明日すればいいのだと思う。とにかく僕はなんだか本当に疲れたみたいだ。僕は自分の部屋に戻ってプレゼントの箱を開け、ブレスレットを自分の左手首に着けてみる。なかなか悪くない。でも僕の意識はだんだんとぼんやりとしてくる。

「ここは、どこだ？」と僕は言う。

「ここは車の中よ」と女の声が言う。

「どうして車に乗ってるんだ？」僕はまだ目もつまく開かないぐらゐものすごい眠気を感じている。それにひどく暑い。どうしてこん

なに世界が燃えているんだ？遠い意識の端っこで記憶が歪んだ音をたてて揺れているような気がする。

「私たちこれからラブ・ホテルに行くの」と女の声が答える。「そして私たちはひとつになるの。世界をひとつに戻すのよ」

「煙草が吸いたいなあ」と僕はつぶやく。

煙草の煙が太陽の光の中で揺らめき、時間に吸い込まれてゆくように消えてゆくのをぼんやりと見つめながら、昨日から繋がっている記憶というものを考える。どこからか吹き込んだ風が女の髪を揺らし、その向こうにある幻のような都市の風景に溶け込んでゆく。この車の外は記憶のない夢の空間のように僕には思える。

到着の汽笛が鳴り、僕がどこかに辿り着いたことを告げる。ここはどこなのだろうと僕は思う。流れ着いたその先がどこに向かっているのか僕には知る由もない。

いつの日も意味だけが降り積もる。手に取るとゆっくりと溶けてなくなつてゆく意味。恐る恐る後ろを振り返るとそこには膨大な意味だけが積み上げられている。

意味のないものが多すぎる。

そしていつも意味だけが回り続ける……。

「いいのよ、眠ってしまえば」

女がそう言うのが聞こえる。

「眠ればいいのよ。あなたの見ている闇が全部溶けてなくなってしまうまでね」

女が僕の脛にそっと手を触れるのを感じる。僕の見ている闇は白っぽく歪む。女の手からは不思議な安らぎが感じられる。女の手がゆっくりと僕の脛を撫でるとそれに合わせて僕の見ている闇にはさまざまな色が浮かび上がる。

「いいのよ、すべて忘れて眠ってしまえば。結局あなたはここに戻ってくるんだから」

耳を済ませてみても女がどこにいるのか正確な位置が掴めない。

それは頭上から聞こえてくるような気がするし、あるいは下から聞こえてくるのかもしれない。

「一本の糸を辿ってくればいいの。あなたはきつとここへ帰ってくるはずよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4472e/>

武士道・is・Dead

2010年10月20日19時07分発行